

---

# 銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

三田弾正

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀河英雄伝説〜ラインハルトに負けません

### 【Nコード】

N3863X

### 【作者名】

三田弾正

### 【あらすじ】

銀河英雄伝説〜門閥貴族・・・だが貧乏！

執筆前に、元々このネタで行こうと、考えていた物です。

幻の皇后、シュザンナ・フォン・バーネミュンデ侯爵夫人の子供の一人に転生し、これから来る破滅を何とか、避けようとする、皇女の物語です。

この小説は「らいとすたっフルール2004」にしたがって作成されています。

**第一話 お母様は、シュザンナ(前書き)**

劇中の暗殺者は、CV真柴摩利 (シーマ・ガラハウ)さんのイメ  
ージです。

## 第一話 お母様は、シユザンナ

……暗い……それと暖かい？

耳に入るのは、ドイツ語らしい女性の声で、『私の可愛いベビー、今度こそ無事に生まれてきておくれ』

んん！

体が流れるー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

眩しい此処はどこだ？？

『お生まれになりました、お美しい皇女様です』  
誰かが言う声が聞こえる。

薄目を開けて見てみると、レトロな看護服を着た、女性が喋っている。

なるほど、さっきのは母親の胎内ですか。今は産まれた所のようにです。

母らしき人が、『おお、私の可愛いベビー、今度こそ守りますか  
らね』

看護婦が、『侯爵夫人様、皇女様のお体を、清浄して参ります』  
そう言っつて、私を連れて別室へと移動しました。

看護婦が、体を拭きながら、恐ろしいことを、言い始めました。  
『フツ・・チヨロいもんだね、あんたに恨みはないが、生まれる  
ところを間違えたのさ、自分の生まれの不幸を、呪うがいい』

うわああああ、シヤアの台詞じゃあるまいし、目つき変わってる

よ、この女。

助けを呼ぼうと、大声で泣くが。

『フツ・・死ぬのが判るのかい、この部屋は、完全防音だから、ム・ダ・ダ・ヨ』

生まれてすぐに、死亡フラグですか——！！ 酷すぎる！！

『この針の先端に付いている、薬なら、楽に死ねるから、安心して死にな』

針の先端がゆっくりと、右腕に、近づいていきます。

『傷が残ると面倒だからね、爪の間に刺してあげるよ』

痛い痛いですよ、爪の間なんて、拷問じゃあるまいし。

死ねるー、火事場の馬鹿力よ出てくれ————！！！！

——！！

右腕を振り回し抵抗したところ、そんな行動を予想していなかった、女の手から針が、飛びそのまま、その女の目に、突き刺さりました。

『ウギャアアアアアアアアア——！！！！！！』

その瞬間、すさまじい、悲鳴を上げて、女がのたうち回り始めました。

暫くすると、悲鳴も聞こえなくなり、女は動かなくなりました。

これからどうなるだろうと、思っていると、あまりに帰るのが遅いのを、心配したのでしょうか、何人もの、女性が入ってきてました、扉を開けた瞬間、中の惨状を見て、『皇女様はご無事か！』多くの方が、近寄ってきてたのですが、真つ先に、髪が乱れたままの母親らしき女性が、抱き上げてくれました。

『おお、あなたも、また失う所であった』

母親ですね、これは、泣きながら、ぎゅーっと、抱きかかえてくれます。

耳に聞こえるのは、『宮中警備隊を、呼べ』とか『侯爵夫人と皇女様を別室へ』とか、『背後関係を探れ』とかが聞こえてきます。

そのまま、別室で、清浄され、母親に抱かれて、病院らしき所から、彼女の家らしき、邸宅へ連れて行かれて、邸宅内の、赤ちゃんを入れるプラ製箱に、入れられました。

しかし、いきなり暗殺されそうになるとは、私はいったい誰なんだ？

侯爵夫人とか皇女様とか宮中警備隊とか、現代じゃ聞き慣れない言葉だし。

侯爵夫人が、母親らしい。

皇女が私。

で宮中警備隊があると、どっかの王宮かな？

疲れたんで、少し寝よう。

ん、ガヤガヤする、また暗殺か？

ホッ、母親が、立ち上がったのか、ん？

『皇帝陛下のお成りでございます』

誰かがそう言っている。

皇帝陛下????

『シユザンナ、無事か』

『陛下』

『おお、この子が、予の子か』

『陛下そつでございます』

『おお、シユザンナに似て憂い子じゃ』

『陛下、危ういところでした』

『聞いておる、大事に育てるのじゃ』

『警備も強化させよう、ようがんばった』

『陛下』

『今宵は、親子三人で過ごそうぞ』

『陛下』

意識が薄れていった……ZZZZZZ

一ヶ月ほどたって、私の、立ち位置が判明しました。

こんにちは、私は、テレゼ・フォン・ゴールデンバウムと申します。

ゴールデンバウム王朝第36代皇帝フリードリヒ4世 と寵姫シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人との間に生まれた、第3皇女です。

大きな声では言えないのですが、実は私、転生者なんです。

ゴールデンバウム王朝と言えば、銀河英雄伝説の世界ですよ。

第36代皇帝フリードリヒ4世と言えば、ラインハルトの、篡奪を知りながら、あえてそのままにした、あの皇帝ですよ。

シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人と言えば、子供4人ぐらい殺されて、アンネローゼに嫉妬して、フレーゲル男爵に、そそのかされて、暗殺狙って失敗して、死んだ人じゃないですか。

私も暗殺されかけたし、これからも、危険がいつぱい。

今年って何年なんだろう、喋れないし、字も書けないから、どうにもならないよ。

食っちゃ寝、食っちゃ寝を繰り返すこと、2年で、やっと、喋れるようになり、ムッター、ファーターと言うようになり、シュザンナ

母様と、フリードリヒ父様が、目を細めて、喜んでくれた。

どうも警備が完璧なのと、女だから、帝位に関係ないから、敵からは放置され始めたみたいなき感じ。

ノイエ・サンスーシだからか、カレンダーとか無いし、年度が判らない、困った。

つたない言葉で「お母様、私の、お誕生日は、何年なの」って聞いたら。

『テレゼ、難しい言葉を、覚えたのですね』

にこやかに、話してくれました。

『あなたのお誕生日は、471年2月3日生まれですよ』

「お母様、ありがとうございます」

女官が来て、『テレゼ様、お昼寝の時間でございます』

と来て、ベットへ寝かされました。

考えようとしたけど、寝てしまいました。

翌日から、これからの人生について考え始めた。

ん、お父様が487年に亡くなられるから、そのとき、16歳か、ラインハルトが、クーデター起こすのが、488年だから、17歳、

お母様が、フレীগエルにそのかされるのが、486年で15歳、お母様が、暗殺未遂したら、私もとばちり食うかも知れない。

それで生き残っても、アンネローゼを狙った女の娘じゃ、酷い目に遭いそうな気が。

それで、無事でも、リップシュタットの後に、あのランズベルク伯に我が儘小僧と共に、誘拐されるかも知れない。

路頭に迷うのはいやだ。

アンネローゼが後宮に来るのが477年ぐらいだから、あと4年



か、6歳に時に、父上に甘えまくって、アンネローゼが来るのを、  
阻止できれば、安全だ。  
よっし、それで行こう。

**第一話 お母様は、シユザンナ（後書き）**

いつか、続きを書きたいです。

## 第二話 韜晦作戦準備よし（前書き）

お待たせしました、少ないですが第二話です。

## 第二話 韜晦作戦準備よし

帝国歴473年7月10日 13時

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

「テレゼ私の可愛いテレゼ、陛下より沢山のドレスが送られて来ましたよ」

「お母様、お父様からですか」

「そうですね、あなたのお父様からのプレゼントですよ」

「わーい、綺麗」

「本当に綺麗ね」

「お母様、着たいですう」

「そうですね、ヘレーネ、クラリッサ、支度をなさい」

「かしこまりました侯爵夫人」

「わーい、わーい」

帝国歴473年7月10日 19時

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸 テレ  
ーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふつう、疲れたよ。

お母様ったらノリノリに成っちゃって、あれからお茶の時間を挟んで4時間も着せ替えだもの。

無邪気な2歳児を、演じるのも大変だよ。

相変わらず夕食はドイツ料理だし、たまには梅干しとお茶漬け食べたい。

お米と紅茶はあるから、探せばあるかも。けどお母様が食べるの許

してくれないな。

しかし、私を暗殺しようとした黒幕は誰なんだろう。

470年に、兄様が死産と言うことに、なってるけど暗殺の可能性が大だな。

確か母様は4回妊娠してるから、あと2人生まれるかも知れない。無事に男子が生まれてくれれば皇位継承が拗れないかも知れない。まあ私が生きているから妊娠しない可能性もあるけどどうなるやら。

暗殺の黒幕って、原作じゃ、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とか言われてるけど、ルードヴィヒ兄様が、生きている限りあの2家に帝位が行くことはないのだから、ルードヴィヒ兄様が、急死する事を知らない訳だから、そんなことをするんだろうか。それとも、ルードヴィヒ兄様の急死事態が、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とかの、策謀だったとしたら、あり得ることだ。

しかし此処に、私というイレギュラーが、発生したそうになると、最低2人暗殺しないと成らなくなった、図らずもリスク分散が出来る訳か。

こうなると、あまり才気を見せると、敵的になりそうだな。

暗殺から、逃れるためには、注意しつつこれまで道理、無邪気な皇女を演じ続けよう。

韜晦しなければ命が危ないからね。

これこそ韜晦作戦だ。

### 第三話 暗殺の裏幕（前書き）

短いです、すみません。

サブタイトルのに、此処で分けないと駄目だったので。

暗殺者経歴は、お察し下さい。

### 第三話 暗殺の裏幕

オーデイン 某所

「あの女、大言壮語吐いたくせに失敗するとは！」

「手練れの物が居たのでしよう」

「あの者から、こちらの正体が知れることはあるまいな？」

「それは、ご心配無用でございます。」

かの者は叛徒共からの亡命者。ガンダルヴァ星系とかで植民者の反乱に毒ガスを使い住民を虐殺したとか。上層部の命令で暴徒鎮圧用無気力ガスだと、だまされたそうですが上層部がそれを隠すためにかの者達を事故に見せかけて皆殺にした中で唯一逃げてきた者、我々が突き出せば死有のみでございましたからな。生きるためには何でもしましょう」

「フッフどうせ成功しても始末するつもりであったのであろう」

「これは手厳しいすべては閣下の為でございます」

「おぬしには苦労かけるの」

「いえ臣の成すところでございます」

「しかしこれである赤子の周囲に手を出し辛くなった」

「しかし男児ではありませんのでさほど気にする必要はないのでは」

「うむそうじゃな、昨年の赤子は男児であったあのときは見事に死産と言うことになってくれたからの」

「今回の事で、昨年の死産は暗殺だったとの噂が真実味を持ってまことしやかに流れ始めておりますから」

「ここ暫くはおとなしくするのが肝要であろう」

「御意」

**第四話 皇帝即位20周年記念（前書き）**

連続投稿です、お待たせしました。



## 第四話 皇帝即位20周年記念

帝国歴476年2月3日

オーティン ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」

「皇帝陛下、在位20周年、万歳」

「テレーゼ皇女殿下、御生誕5周年、万歳」

「万歳」

「いや、めでたい、お美しい皇女様のご尊顔を拝謁出来ましたな」

「皇帝陛下もまだまだお若い」

「テレーゼ様の初お目見え、楽しみでしたからの」

「僅か5歳であの美貌、あと10年もしたら、銀河一の美貌と成りましょう」

「今の内に、誼を結んおこうかの」

「我が家の、嫡男に是非とも降嫁して欲しいものよ」

「なんの、卿の嫡男は17ではないか、遅すぎるわ、それに比べて、我が息は8歳でちょうど釣り合う」

「卿の息子は、卿に似てぶ男だそうじゃの、釣り合わんよ」

「なにを、なにを、我が息子こそふさわしい」

「話が弾んでおるの」

「これは、ブラウンシュヴァイク公」

「テレーゼ様は、お美しいの」

「奥方が、嫉妬しますぞ」

「ははは」

「伯父上」

「おおフレীগエル」

「それではまた」

「ヨヒアムよ。お前、テレーゼ様をどう思う？」

「お美しい、お方ですな」

「どうだ、お前が望むのなら、いずれ陛下に、お頼み申す事も出来るが」

「しかし、あの噂がございましょう、あの女が、首を縦に振るとは思えませんが」

「確かに、あの噂はあるが、わしは知らんぞ」

「しかし、2度続けての降嫁など出来ましようか」

「オトフリート4世陛下の時代には、一人に3度続けての降嫁もあつたぐらいじゃ」

「なるほど」

「お前も、誇り有る、ブラウンシュヴァイクー門の男としての矜持を見せてみよ」

「伯父上」

「考えておくことだ、権門とはそうゆうものだ」

「さてヨヒアムよ共に挨拶に参るぞ」

「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」

「皇女陛下、我がヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」

「なんの、我がヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただきたく存じます」

「これこれ、テレーゼが困っておろう、まだ幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」

「皇帝陛下」

「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」

「はい、可愛ゆうございますな」

「ほれ、テレゼや、兄上じゃ」  
「兄上ですか？」

「うむそうじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」  
「兄上様、こんにちゅあ」

「ああ、こんにちは」

「父様、ごきげんうらわちくって、言つゆ」

「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」  
「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありませんよう」

「ううー」

「どうした、テレゼ？」

「おちっこー！」

「シャーーーーー」

「わあああん」

「陛下お召し物が」

「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛かる  
う、

すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、  
暫く、儂の代わりをしていて欲しい」

「判りました、陛下」

「テレゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」

「おとうしゃま、ぐすぐす」

「がやがやがや」

「皇女様が、お漏らしとは」

「未だ5歳じゃしかたあるまい」

「最近、陛下もテレゼ様に会いによくベーネミュンデ侯爵夫人

の所へいくそうじゃ」

「それで、夫人のご機嫌がよいのですな」

「面白いことよ」

「これは、リッテンハイム候」

「先ほど挨拶してきたが、皇女殿下がこの目出たきときに、お漏らしとは、我が家のザビーネは3歳だがその様なことはないぞよ」

「侯爵、不敬ですぞ」

「なんの、酒の上での、戯れ言よホホホホ」

帝国歴476年2月3日 深夜

オーティン 某所

「今宵の宴はいかがでしたか？」

「ふむ、初めて、あの娘にあつたが、挨拶中に、お漏らしをしておつたわ」

「ほう、恥を搔いたわけですな」

「そうよ、舌足らずに、喋っておつた、そのまま、陛下のズボンに漏らしおつた」

「前代未聞ですな」

「あの女が甘やかして居るのだろう、聞いたか、今回着る為に、陛下から、ドレスが1000着も届いたそうだ」

「よいではございませんか、馬鹿な寵姫と、その娘、我が儘に育てただければ、誰も支持しません」

「そうよの、適齢期が来たら、どこその門閥貴族へ、降嫁させるように、お勧めすればよいの」

「さようでございます」

「今回の姿を見て、安心したわ、あれは、捨て置いても平気よ、ただ寵姫達に、男児が生まれたら、始末せねばならんがな」

「御意」

**第五話 皇帝即位20周年記念裏側（前書き）**

第四話の主人公側です

## 第五話 皇帝即位20周年記念裏側

帝国歴476年2月3日

オーディン ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」 テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

「皇帝陛下、在位20周年、万歳」

「テレーゼ皇女殿下、御生誕5周年、万歳」

「万歳」

父様と私のお祝いに、帝国中の貴族、廷臣、軍人、そして、令嬢や令息達が、これでもかかって、着飾って、来ている。

贅を尽くして、豪勢すぎるわ、ドンだけ金かけてるのよ。貴族連中が、集まっては、降嫁とか、うちの子にとか、狙われてるのありありですね。

おっ、あれは、ブラウンシュヴァイク公じゃん、リアルに見ると、なんかねー。

一応、義兄になるわけだけど・・・ねー。

誰か近づいていていった、ん？あの髪型、あの顔、未だ若いけど、フリーゲルじゃない？

2人で話し始めたみたい。

ジュースでも飲みますか、演技も疲れるし。

「お父様、おれんじじゅーすが欲しでしゅ」

「誰か、テレーゼに、オレンジジュースを持ってまいれ」

「はっ」

「お父様、ありがとうございます」  
「うむうむ」

うげ、ブラウンシュヴァイク公とフレーゲルがやって来たよ、いやだな。

「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」

「うむ、公爵」

「皇帝陛下、皇女殿下、此処にいますのは、甥のフレーゲル男爵です、どうぞお見知りおきを」

「ヨヒアム・フォン・フレーゲルと申します、皇帝陛下、皇女殿下の御意を得まして、子々孫々の譽といたく存じます」

「そうか、フレーゲルよ、励め」

「御意」

フレーゲルかよ、この頃から、嫌みっぽく感じるな。

また貴族が来た、今度は誰だ？

「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」

「うむ、候爵」

ああ、この髭、リッテンハイム候じゃん

次々に挨拶来るから、かつたるい。

「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」

うげ、誘拐犯の、えせ詩人じゃん、この頃から、下手な詩を、作ってたのか。

「皇女陛下、我が、ヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」

自意識過剰の、自己陶醉来たー。



「なんの、我が、ヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただきたく存じます」

ん、ヘクスハイマーって聞いた気が………あつ、指向性ゼツフル粒子事件と遺伝子欠陥か。

「これこれ、テレゼが、困っておろう、まだ、幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」

あつ、考えていて、無口になっていた。

「皇帝陛下」

「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」

「はい、可愛ゆうございますな」

「ほれ、テレゼや、兄上じゃ」

ルードヴィヒ皇太子か。

「兄上ですか？」

「うむそつじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」

敵を欺くには、まず味方からと言うから、馬鹿をやりませうか。

「兄上様、こんにちゅあ」

「ああ、こんにちは」

「父様、ごきげんうらわちくって、言うの？」

「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」

「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありませんよう」

しまったな、トイレに行きたくなってきた。

此処は、漏らそう、死にたいぐらい恥ずかしいが、これほどのイン

パクトはあるまえ。

「ううー」

「どうした、テレーゼ？」

「おちっこー！」

「シャーーーーーー」

「わあああん」

お父様、冷たいでしょうが、申し訳ありません。

「陛下お召し物が」

「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛かる  
う、

すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、

暫く、儂の代わりをしていて欲しい」

「判りました、陛下」

「テレーゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」

「おとうしゃま、ぐすぐす」

ああー恥ずかしい！！

一生言われるんだらうな。

冷たいし。

早く着替えよう。

第六話 士官学校探訪（前書き）

書くのが止まらない。

## 第六話 士官学校探訪

帝国歴476年7月8日

オーディン 帝国軍士官学校  
ライエンフェルフ中将

アルノルト・フォン・フ

本年度の士官学校入校式に、皇帝陛下のご臨席を、賜る事になつた。

国防の第一たる士官達にお言葉をいただけるそうだと。

その後、在校生の授業も見学することだ。

本来であれば、入校式当日は授業はないのだが、本日は普通道理行うことと成った。

長い一日と成りそうだと。

オーディン 帝国軍士官学校  
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

全く今日についていない、昨夜の女は良かったが、旦那が居るとは知らなかった。

いきなりベランダから逃げる羽目になるとは、まったく。

しかも隣には、朝からテンションが異様に高い鶏冠頭が居るし、五月蠅い頭が痛いだろうが！

皇帝の臨席だって全くくだらん、気まぐれはやめて欲しい物だ。

オーディン 帝国軍士官学校  
ヒ4世

皇帝フリードリ

士官学校へ行くことになった、本来であればこの様なことは、する気が無いのだが、テレゼが兵隊さんの学校を見てみたいというので行くことにした。

オーデイン 帝国軍士官学校  
テレーゼ・フォン・  
ゴールデンバウム

やって来ました、士官学校、父様がへんな女に、引つかからないように、最近色々なところへ、連れて行ってもらっています、上目遣いのおねだりモードで大概OKです。

それに、今年の入学生には原作キャラが居ないけど、在校生には、ロイエンタール、ミッターマイヤー、ビットェンフェルト、ワーレン、アイゼナツハとか居るし、顔見せには良いかなって。

父様と一緒に侍従武官やらと共に学校へ行くと、宇宙艦隊司令長官ヴィルフリート・フォン・ベヒトルスハイム元帥が校長のアルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将与共に、迎えに出てきた。へー、ミュッケンベルガーは未だ長官じゃないんだ。

挨拶が終わって早速、入校式で訓辞を行う、父様と長官、今までこういう事は余りないことらしくて、校長が卿達は名誉であるとか言ってる。最後に私が、「お兄ちゃん達、頑張ってくださいい」て言ったら、結構盛り上がってしまった。萌はこの時代にも通用するんだね。

次に4年の授業を見学、戦略理論見たら、教官が良いところ見せようと、前の方の学生にこの問題を解けて言って、立ち上がったのが、錆銅色の髪で後頭部が跳ねてるって、アイゼナツハじゃない？

この頃から無口だったんだな、ヤーとかしか言わないし。

次に行くのか、話してみたいんだけど、仕方がないか。

続いて3年にやって来ました、3年生は格闘術ですか、体操着を着てやってますね、まあ皇帝の手前、装甲服は着れないんでしょうね、勝ち抜きをやってるようで、ベスト4が決まったようです。

ここから、天覧試合と言うわけですね。

残ってるのは、やっぱり、ロイエンタール、ビットンフェルト、ワールンですね、残り一人は見たこと無いので、モブキャラですね。

始めの合図で、4人が戦闘始めましたね、おっビットン強いモブを一発ですっ飛ばした、ワールンとロイエンタールは、間合いを計ってる、ワールン出るけど、ロイエン軽く足払い、すっ飛んだー、最後は、ビットンVSロイエンですか、ビットン相変わらず猪突猛进、ロイエン飛んだ、再度突っ込むビットン、ロイエンそのまま受け流しながら、足払いしながら、一本背負いだ。ロイエンタールの勝ちだ。

ロイエンタールには、父様から金時計が贈られました。

私は、「父様絵本で見たんだけど、勝利の女神がキスするのってありですよ」て言ったら。

『よいよい、テレゼの好きにするがよい』とにこやかにOKしてくれました。

その後、ロイエンタールのホッペにキスしました。

ロイエンタールは、ビックリしましたね。

ビットンフェルトには、持ってきていた、銀製の櫛をあげました、喜んでいたよ。

ワールンには、ハンカチをあげました、恐縮ですって言った。

イエンタール

驚いた皇帝から金時計を下賜されるとは、さらに驚いたのは皇女が俺にキスしたことだ、勝利の女神うんぬんと言い、皇帝の許可を受けほつぺたにキスしてきた、明日から噂が流れるだろう、マールバッハの家からも言ってくるかも知れんな。

オーデイン 帝国軍士官学校  
ビットェンフェルト

フリッツ・ヨーゼフ・

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ワーレンと話したのだが、まさか陛下から、お言葉を賜るとは思わなかった、それにだ、皇女様が、にこやかに来て、『すごいです』とおっしゃて、『髪が乱れてますう』とご自身ご使用の銀の櫛を賜されたのだ、大変感動した、大事にしよう。

オーデイン 帝国軍士官学校  
ワーレン

アウグスト・ザムエル・

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ビットェンフェルトが話してきたのだが同感だった、しかし俺たちが、最後まで生き残り戦い終わると、4人とも皇帝陛下から、お言葉を賜るとは正直驚いた。  
しかも、皇女様が、『汗がすごいですう』と言い、ご自分のハンカチを、俺に下賜されるとは驚きだ、使うわけにもいかんから、大事に保管しよう。

オーデイン 帝国軍士官学校

テレーゼ・フォン・

## ゴールデンバウム

3年の授業が済んで、いよいよ疾風ウォルフの2年生です。

戦術理論の授業か、教官理屈倒れのシュターデンじゃん、うわー、  
『皇帝陛下の御為に』とかそんなことばかり言い始めたよ、父様の  
前だからみんな真剣に聞いているけど、眠くなるねこれ、んーウォル  
フ居るかなー、前の方には居ないな、あっ居た後ろの方で、なんか  
書き物しながら見てる。残念、前にいれば喋れたかも知れないのに、  
仕方ないか。

結局シュターデンの眠くなる授業のせいで、途中から寝てしまい、  
気がついたら、宮殿に帰る車の中でした。

帰ったら、お父様とお母様と一緒に御夕飯を食べて寝ました。

最近とみに、お父様とお母様の仲が良いので、アンネローゼフラグ  
を断ち切れそうな勢いです、このまま行けば、ラインハルトは只の  
人だね。

帝国歴476年7月8日 深夜

オーデイン 某所

「して今日の動きはどうじゃった」

「間者の話ですと、格闘戦を見て、喜んでいたとのこと」

「くだらんな」

「さらには、勝者に話しかけ、頬にキスをしたとか」



「立場が判らん、子供じゃ」

「まことに」

「最早、放置しても良いかもしれん、あの者は、どう言っておる」

「無邪気で、思慮の足りない子供だと」

「陛下もあの女の元に通い詰めておる、最早又、子ができるやもしれん」

「そちらに力を入れるようにと命令せよ」

## 第六話 士官学校探訪（後書き）

次回予告

パッパパーパー、

皇帝の浮気癖を阻止しようと、テレゼは行く、そして母に運命の  
日が！

次回、銀河英雄伝説Ⅴラインハルトに負けません

第七話 初夏の風そして

銀河の歴史が又1ページ

## 第七話 初夏の風そして

帝国歴477年3月31日

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸  
テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

最近お母様の機嫌が非常によい。

やはりお父様が毎日のように来てくださるからだろう。

昨日もオペラ鑑賞に連れ立っていった、ローエングリンらしいがよく知らない。

メックリンガーなら知ってるだろうけど、未だに繋がりが無いし。

このところは、ロリコン趣味の女遊びが絶えてきて真つ当な生活環境へと変わってきている。

たくよー50過ぎの男が15歳を愛人にするんじゃないよ。

それを勧める、茶坊主どももどうしようもない。

やっと女の陰を薄くできたから、これからアンネローゼ変な女に、引つ掛からないようにさせなければならぬな。

帝国歴487年にお父様が亡くなられるのを、防ぐためお酒をあまり呑まないように、あちらこちらへと一緒に動いて出かけるようにしている。

最近は顔色も良く息切れも無いようだ。

この半年でも山登り（庭園内の丘だけ）やハイキング、乗馬など一緒に楽しんでいる。

意外だったのはお父様は乗馬がヘタだったことだ、若い頃放蕩三昧だったため遊んでばかりでやってなかったらしい。

出来るなら何とかして役立たずの門閥貴族を潰して、帝国を再生したいな。

まずは、グリーンメルスハウゼン爺様に繋ぎを作って、相談に乗って貰わないとだめだな。

んーしかし、いきなり会うと他の者に不審がられるから何とかチャンスを作らないと。

そう言えば、ケスラーって何時から、グリーンメルスハウゼン爺様の部下だっただろう。

映像見るとずいぶん親しそうだし、個人的にかなり前から繋がりがあったのかもしれないな。

472年に士官学校卒業してるから、25歳で大尉ぐらいかな？ケスラーが来てくれれば、これほど頼もしいことは無いのに。

帝国歴477年4月1日

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸  
テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日お母様から重大な発表があるとのこと。

お父様が臨席する夕食時に発表するからと待ちの姿勢。

夕方6時にお父様が来てくれました。

そしてにこやかな、お母様から発表がありました。

『テレゼに弟か妹が出来ますよ』

流産予定の子供か。守れたら守りたいな。

「お母様、わー嬉しいおめでとんです」

お父様も喜んでくれました。

よしこれで、当分の間他の女は排除できるだろう。  
エイプリルフルじゃないよね。

帝国歴477年4月

オーディン 某所

「あの女が又妊娠したと」

「あの者よりの知らせにございます」

「早い内に始末させるのだ、小娘のように生き残る可能性もあるのだから」

「流産と言うことでよろしいでしょうか」

「お前に任せる」

「御意」

帝国歴477年6月30日

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふつうつ、そうなんだよね。

新しい寵姫としてアンネローゼがやって来たそうだ。

お母様が非常に怒っておられた、危険な兆候だ！

アンネローゼが来たのって、宮内省職員が自分の点数稼ぎのために見つけてきたんだよね。

そうならないように、お父様をお母様の元へ日々通わせる作戦だったが、

子供が出来たから夜のお勤め無いから、お寂しいであろうと勝手に連れてきやがった。

余計なことをしくさってからに！

ここの所お母様の所へ度々通っていたから、安心してアンネローゼを探せ作戦を行わなかったけど、てか探せるわけがないけど。

原作道理起こるのか、イベントが！

歴史の修正力というやか、はたまたバタフライ現象か。

これでラインハルトがやって来る！！！！

帝国の危機だー！

お父様も押しに弱いから、認めてしまっし。

お偉いさん達もあまり、お母様に権力が行くのが危険と感じたのだらう。

クソッ、コルヴィッツめ一時は出世して喜んでいるだらうが、いつか必ず後悔させてやる！！

とにかくも信頼できる味方を探さなきゃだめだ。

グリーンメルスハウゼン爺様に早く繋ぎを取らないといけなくなった。

帝国歴 477年7月

オーデイン 某所

「陛下に新たな寵姫が出来たな」

「はっ宮内省の役人が市井で見つけてきたとのこと」

「平民か？」

「いえ一応帝国騎士ですが、平民以下の生活だったとか」

「歳は幾つだ」

「15歳で在ます」

「良いの、こここの所。陛下は酒もあまり飲まず健康になりつつあるから、

新しい寵姫に性を吸われれば早くに衰弱しよう」

「まことに」

「政権にしがみつきたがるあの老いばれ共に、侯爵夫人の権勢が増えると困ると、

囁き新たな寵姫をもつて侯爵夫人を牽制せよと言ったが、これほど早く決まるとはおもわなかった」

「これで流産すれば万々歳じゃ」

「御意」

## 第八話 織り姫VS彦星（前書き）

時間が中々進まないのので、戦闘シーンが殆ど無い銀英伝に。



## 第八話 織り姫VS彦星

帝国歴477年 7月7日

オーディン ノイエ・サンスーシ オルテンシア庭園  
テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日非公式ながら新寵姫アンネローゼと顔を合わせる事にした。本来であればこの様なことは異例なのだが、数日前お父様に『会わせないと二度と一緒に風呂に入らない』とだだをこねて今日という日を迎えた。その際に弟も見たいから連れてきてと無理矢理に連れてこさせることにした。

お母様にはコッソリと泥棒猫の顔を見てきますと言ってきた。

形式的には庭園散歩中の、皇帝父娘が偶然庭園に来ていた新寵姫姉弟に会うという良くあるパターン。取りあえず一発目が肝心なので、如何にも皇帝の娘という態度をとらなきゃね。

庭園の東屋で待っていると侍従に先導されたアンネローゼとラインハルトがやってきた。おうおうアンネローゼの人生あきらめた感じとラインハルトの苦虫つぶしたような顔を無理に平常にしているような感じがよくわかるな。

此方の侍従がわざとらしく大きな声で『皇帝陛下ご臨席でございます』と言つと

お父様が『うむご苦労、して其所に居るのは誰じゃ』と言えば  
向こうの侍従が『グリユーネワルト伯爵夫人とその弟にございます』  
と返す

お父様『此方へ来るが良い』  
ですぐ近くへ来たというわけ。

「伯爵夫人此所はどうじゃな？」

「このように綺麗な庭園は初めてでございます」

必死に自分の運命を諦めて居る方は気の毒なだけだね、けど貴女  
こそ最大のキーパーソンですから。

「そこもこは誰じゃな」

「伯爵夫人の弟にございます」

「面を上げよ」

「良い目をしておるな」

目の奥に憎悪の炎が見えるよ。

この目を見て良い目だなんて、お父様この時からラインハルトに期  
待していたのかもしれないな。

「今年より幼年学校で学ぶとのことだ」

「励めよ」

「はっ」

ぶぶっスゲー演技腹の中は煮えくりかえってるだろうに良くやる  
よ。

で帰って一人で怒りを滾らせるんだね、  
キルヒアイスが未だ来てないから。

さて私の出番だ一丁やりますか。

「お父様その方が伯爵夫人ですか？」

「そおじゃ伯爵夫人じゃ」

「グリユーネワルト伯爵夫人ご機嫌麗しく、私テレゼ・フォン・

「ゴールデンバウムでございます」

「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、アンネローゼ・フォン・グリューネワルトでございます」

「弟御の名は何とおっしゃるのですか」

いきなり振られて驚いてるな　くくく

「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、ラインハルト・フォン・ミューゼルと申します」

ここでいたぶるのも一興だけれど、必要以上に憎悪をたぎらせる必要もあるまい。

普通にやりますか。口元を扇で隠してお母様のような口調で。

「ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなごにもてようぞ。

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。」

ふふ、とまどつてら何を言ったらいいかわからんだろうね。

「よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじゃろ」

「お父様―昼餉に行きましょう」

「そうじゃの」

帝国歴 477年 7月7日

オーデイン　ノイエ・サンスーシ　オルテンシア庭園

ラインハルト・フォン・ミューゼル

今日姉上と共に皇帝に会いに来た、姉上を奪った敵の姿を見てやる！  
案内役が姉上と俺を連れて行く、偶然を装い会うらしいがくだらん

作法だ、俺が宇宙を手に入れたらくだらん作法など廃止してやる！

皇帝とその横に小さな少女が居る、皇帝の娘か。

「伯爵夫人此所はどうじゃな？」

「このように綺麗な庭園は初めてでございます」

わざとらしい挨拶が続く。

皇帝が俺の存在を聞いてきた、知ってるだろうにくだらん。

憎悪の目で見たが、皇帝は気がつかないようだ。

「良い目をしておるな」

「今年より幼年学校で学ぶとのことですよ」

「励めよ」

言われたので「はっ」と言っちゃった。

いつか貴様にその犯した罪にふさわしい最後をくれてやる！

キルヒアイスはどうしているんだろう？

姉上に皇女が挨拶してきた。

そのうちに俺の名前を聞いてきた、姉上に迷惑がかかるといけないのでしっかり作法道理に名乗ってやった。

するとだ『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなじにもてようぞ。』

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。』

上から見下すような傲慢な態度で話してきた！

近衛だとふざけるな！

俺は案山子になるつもりはない！

姉上のため俺は宇宙を手に入れるのだから。

帝国歴 477年 7月7日

オーディン ノイエ・サンスーシ オルテンシア庭園 アン  
ネローゼ・フォン・グリユーネワルト

今日皇帝陛下よりテレゼ皇女殿下が私とラインハルトに会いたい  
と言うことで参内させるようにと連絡が来たため、ラインハルトを  
連れて庭園へ向かった。

侍従の案内で皇帝陛下にお会いし、ご挨拶後にテレゼ皇女殿下が  
私に挨拶していただいた、私も挨拶を仕返した。

テレゼ皇女殿下はにこやかに挨拶してくれその後ラインハルト  
にの名前を聞いてきた、  
ラインハルトがしっかりと挨拶できるか心配したのですが、ちゃん  
と挨拶できて安心したのですが、

皇女殿下が『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、  
さぞやおなじにもてようぞ。』

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみ  
じゃ。』

とおっしゃった所ラインハルトの顔がきつくなって来たのです、  
あの子は少々気の短いところが有るので何かしないか心配でしたが、  
皇帝陛下が『よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじゃろう』  
とフォローしていただいたのでありがたかったです。

## 第八話 織り姫VS彦星（後書き）

アンネローゼ側を入れました

第5次イゼルローン攻略戦の並行追撃作戦対策作戦は有るんですが、  
そこまで行くのが大変。

第九話 それぞれの昼餉（前書き）

ぎりぎり12日更新です

## 第九話 それぞれの昼餉

帝国歴477年 7月7日 昼

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

アンネローゼとラインハルトとの面会を終えたあと、お父様と馬車でお母様の待つ館へ向かう途中

「お母様の真似をして喋って見ました」

「はははそうかそうか」

「どうやら誤魔化せたようです。」

今日は昼餉をお母様とお父様一緒に食べるようにして貰っていますので、

あとは本人達の気分次第で落ち着くのではないかと思うのですが、悪なら私が出て仲裁を計るつもりです。

館に着いたらお母様がお出迎えに出てきていました、

やはり焦りがあるのでしょう普通なら執事が迎え入れる物なのですがね。

お母様はにこやかに「陛下きていただき有り難うございます」

ふむ普段の母上の苛つきが消えている良いことだ。

食事中は当たり前障りのないお話や私の教育に対する話などだったのですがねー

デザートになるとお母様が『新しい寵姫の寝心地はどうですか』ってジャブな嫌味を一発

うわー母様ストレート過ぎます子供がいるのですよ



すると父様『テレエゼが嫌がったから、まだじゃ、元々國務尚書等が勧めてきたので仕方なくな』  
すると母様少し考えてから、『若い寵姫を求めるのは仕方がない事です。ですがテレエゼの為に館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』

おつ母様手を未だ出してないと聞いて少しは和らいだ。  
まあ数日前から母様をフォローし続けたかいたよ。

他の寵姫の手前毎日来るのは無理だけど、出来るだけ多く来てくれると父様が約束してくれました。  
家庭円満に成らなきゃだめだね。

結局その日はお父様はお母様と私の教育について話し合うことになり館に泊まることになりました。  
お母様は夕餉の際には数日前までの苛つきやドンヨリした空気が無くなり晴れ晴れとしていました。  
よかったよー。

けど今年の九月から始まる私の本格的な教育について話があったので、  
私としては内容が厳しそうなのでブルーに成りましたよ。  
てか、紅茶の銘柄だとか、お香の銘柄、とかいらねー！！  
ご学友を誰にしようとかも話が出たし、話が合うか不安だね、

こちらら、皇女でも根が庶民ですからね。  
なまじ原作知ってるし下手に親しくなっってその子が不幸になるとか知ってるって絶えられないじゃん。  
逆に災いになるのだとどうしていいやら。

なまじ軍事知識があるのも善し悪しで、口を出したいんだが出せないもどかしさ。

アルレスハイム、サイオキシシ麻薬、イゼルローン攻防戦、ティアマト会戦とか

軍事的に教えたいのが教えられない、教えたら教えただ変に思われるし

暗殺の黒幕も未だに解らないし、下手に爪を出すわけにはいかないんだよね。

こまったもんだ。

相談できるブレインが欲しい今日この頃。

グリーンメルスハウゼン爺さんに早く会いたいのに機会が全くない何とかしてくれー！

帝国歴477年 7月7日 昼

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸  
フリードリヒ4世

本日テレゼが、新しき寵姫アンネローゼとその弟に会ってみた  
いと言われたために場を設けることにした。

わしは、娘には弱い父親なのでついついテレゼに甘くしてしまう。  
アンネローゼの弟に会うのは初めてじゃったが、あやつに会った時  
心地よさを感じてしまった、

あの目あの表情、普段皇帝たるわしに媚び諂い裏では罵っている者  
たちと違う

わしを恨み憎む目がはっきりとわかった。

あの者こそわしの長きに渡る鬱積とした心を流してくれるのではな  
いか。

あやつは、わしの願いをかなえてくれるであろうか。

だがテレゼとシュザンナを巻き込みたくはないものじゃ。

テレゼも何か感じたのか、あの者に挑発的な態度で臨んでいたの、普段のテレゼとは何か違うテレゼを見たようじゃ。

テレゼ自体はシュザンナのまねをしたと言っておるが、あれはわしと同じかも知れん、50年間周りを謀り続けたわしのよ  
うに。

テレゼがそうであれば、また違うやり方もできるかも知れん、  
グリーンメルスハウゼンに相談してみるか。

帝国歴477年 7月7日 昼

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸  
シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ

本日テレゼが憎つくき女を見に行くという。

そんな女見に行く必要がないと言ったが、『お父様を連れてくるし  
泥棒猫を見えます』と

健気なことを言ってくれたので送り出すことにした。

昼餉の用意をさせ待っていると、テレゼが陛下をお連れしてくれ  
た、

玄関へ迎えた時テレゼとにこやかに手を繋ぎながら馬車から降り  
てくる姿を見たとき

今までの鬱積した気持ちが消えていく気がした。

けれども少しは陛下に怨みの一つも差し上げようと、

『新しい寵姫の寝心地はどうですか』いってあげましたわ。

陛下は慌てて『テレゼが嫌がったから、まだじゃ、元々國務尚書  
等が勧めてきたので仕方なくな』

まあ寵姫のもとへ行くのも仕事のうちですから、そこところは納得してあまり行き過ぎないように、

『若い寵姫を求めるのは仕方がない事ですがテレゼの為に館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』と釘を刺しておきました。

今日のことともテレゼが私のことを思い行ってくれたこと、

本当にこの子は健気で可愛いのでしよう、

ずっとずっと守りますからね、私の大事な大事なテレゼ。

帝国歴477年 7月7日 昼

オーディン ノイエ・サンスーシ      グリユーネワルト伯爵

邸

「ラインハルトいよいよ明日から幼年学校ですね」

「はい姉上」

「ラインハルト別に軍隊へ入らなくても、官吏とかでもいいのじゃない、あなたが危険なところへ行く必要はないのに」

「姉上僕は軍隊へ行つて出世したいんです」

「無理をする必要はないですよラインハルト」

「いえ自分の決めた道です」

「そうですね」

一人で大丈夫なのかしら、ジークが居てくれたら。

「ラインハルト一人で大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ姉上、もつともキルヒアイスが居ればもつといいでしょうけど」

「それではジークが言いたいえば入学できるよう

皇帝陛下にお願いしてみます」

「姉上そんな事が出来るのですか？」

「ジーク一人なら可能だと思います」

「姉上よろしくお願いします」

「けどジークが行きたいと言ったからですからね、無理やりはいけませんよ」

「わかっていますよ、けど絶対キルヒアイスは来てくれます」

「そうなるといいわねラインハルト」

「ええ」

第十話 ロイエンタールはロリエンタール？（前書き）

士官学校の一年後です

## 第十話 ロイエンタールはロリエンタール？

帝国歴477年7月8日

オーデイン 帝国軍士官学校

リヒャルト・オイゲン

今年も新学期が始まる私も此で2年だ。

士官学校は2人部屋で1年と3年、2年と4年という感じで、上級生と下級生をペアーにして部屋割りをしている。

私が去年大いなる大志を抱いて入校したのが昨日のように感じる、まさかの皇帝陛下と皇女殿下のご臨席、そしてお言葉を賜るなぞ、平民としては破格のことだった。

さらに皇女殿下が『お兄ちゃん達、頑張ってください』と仰った時の同期生の興奮ぶりは今でも耳に残っている、あれで皇女殿下のファンになった同期達が多数でた、かく言う私もファンだ。

そのあと陛下達は各授業を見学していったそうだが、3年の格闘授業で決勝者4人に陛下お褒めのお言葉を賜ったそうだ。

それよりも全校生徒が注目したのは、優勝者であるロイエンタール先輩が皇女殿下にキスされたという話だった、この話は噂好きな連中の手で夕方には全校生徒に知れ渡り、

テレーゼ皇女様ファンクラブ（当日の昼過ぎには雄志が作成していた）の面々が『ロイエンタールの女つたらしー！』や『ロリエンタール！』と騒ぐシーンも見られた。先輩方の話によるとロイエンタール先輩は入校当初から女癖が悪く彼方此方の女性と浮き名を流していたそうだ、彼女を寝取られた方も居るそうで、その男が我らがアイドル、テレーゼ皇女様のキスを奪ったと尾ひれが付いたらしい。実際には頬にキスだったそうだが、食堂の灼熱ぶりは凄まじかったものだ。

そのほかテレーゼ皇女様が2位のビットンフェルト先輩に銀の櫛を3位のワーレン先輩にはハンカチを賜った後が大変だった。先輩方が貰った物を是非見せてくれと行列を作り、ハンカチに至っては香りをかがせるとか、変態じみた方々が多数出現した。大騒ぎになりシュターデン教官が怒りまくっていた懐かしい思い出だ。

しかしその当事者の一人ビットンフェルト先輩とルームメートの私にしては先輩が貰った櫛をコソソリ見せてくれたの、舐めさせるだの言われて困ったものだった。

ルームメイトとして先輩と住みだして4日目だったからどういう反応をして良いか迷った物だ、

先輩は概して豪快、大雑把、猪突猛進と来ているが悪い人ではないし、親身になって色々教えてくれていて、だが歯止めがきかないときは自分が押さえ役として動かざるを得ないのが何ともいえないな。

2年に成ってルームメイトが変わるかと思ったが今年もビットンフェルト先輩と同室である意味期待ある意味ガツカリな自分が居るが微妙なところだろうな。

先輩はさつきから洗面台で髪型の調整をしていて最後の調整にあの銀の櫛を使っている。

さてあと一時間もすれば新学期だそろそろ支度をしよう。

オーディン 帝国軍士官学校                      フリッツ・ヨーゼフ・  
ビットンフェルト

もう4年長かった士官学校も今年で終わりだ、去年は始まって早々皇帝陛下とテレーゼ皇女様をご臨席して銀の櫛までいただいた、



今でもテレゼ皇女様の笑顔が目には浮かぶ、貰った櫛はこの髪型の仕上げに大事に使わせて貰っている、うむそろそろ支度をせんと遅刻してしまうな、「オイゲンそろそろ行くか」

オーデイン 帝国軍士官学校  
アウグスト・ザムエル・ワレーン

あれから1年か格闘授業で3位になり陛下のお言葉と皇女殿下からハンカチを賜ったのが昨日の事のようにだ、ハンカチは大事にしまっておこうとしたが、どこから噂が漏れたのか「見せる」「香りをかがせる」などの輩が多数寮の部屋にまで押しかけて来るようになった、部屋の鍵を開けようとする馬鹿まで現れたので、仕方なく額に入れ両親に預けて実家へと避難させた。本当は持ち歩きたいのだが仕方がない。

オーデイン 帝国軍士官学校  
オスカー・フォン・ロイエンタール

やっと4年だ去年は散々だった。  
いきなり皇帝から金時計は貰うわ皇女からキスを貰うわ。

其れだけなら良いそれに尾ひれが付いて「ロイエンタールが皇女のキスを奪った」だの「5歳児に欲情するロイエンタール」「女の敵」「馬鹿野郎」「テレゼ様汚した悪い奴」だのさんざん言われまくり、

遊び相手の女達にも「ロリなんでしょ」「ツルペタが好きなのね」「皇女様相手では分が悪すぎます」「皇女様のお相手を奪うことは出来ません」と言われまくって女があまり寄りつかなかったのだ。

俺が何をしたと言うのだ、みんな勘違いではないか！

最近疎遠だったマールバツハの伯父もいきなり連絡してきてパーティーに招待され行ってみれば、

会う人それぞれに『テレーゼ皇女殿下より接吻を賜り有望な甥でございます』と紹介はするわ

『オスカーどうだ養子に成らんか』と言ってくるし、全くろくな事が有りはしない。

早く卒業して任務に付きたい物だ。

オーディン 帝国軍士官学校

ツターマイヤー

ウォルフガング・ミ

今年も新学期が来たいよいよ俺も3年か、去年は学校中がテレーゼ皇女様で盛り上がったいな、3年生のロイエンタールという先輩がキスしたとかで、大波乱が起きていたが、自分はエヴァ一筋だから気にしなかった。

卒業したらエヴァにプロポーズしたいが、エヴァが受けてくれるか不安なんだよな。

オーディン 帝国軍士官学校

リヒャルト・オイゲン

大変な事が起こった。今年もテレーゼ皇女様が来て下さるはずだったのだが、校長フライエンフェルフ中将とシュターデン教官が昨年の新学期早々の学校で起こった騒ぎ（ロリエントール事件）を鑑み今回はご遠慮願ったらしい、其れを聞いた在校生は大騒ぎを起こ

し、『校長を変える』『シユターデン消える』とか大変だった。皆  
ガッカリしている残念だ。

第十一話 刃物女とお友達（前書き）

第十話最後を補填しました。

## 第十一話 刃物女とお友達

帝国歴477年7月25日

オーディン           ノイエ・サンスーシ   黒真珠の間           テ  
レーゼ・フォン・ゴールドンバウム

本日9月から一緒に勉強するご学友との顔合わせが有るのでパーティーを開くことになった。  
いやね一々そんなことでパーティー開くのも馬鹿馬鹿しいと思うんだけど、貴族社会じゃ此が常識で議会無いからこういう時に色々な決め事とかもするんだって。

いつもの通り『皇帝陛下の御為に』 『皇太子殿下万歳』 『皇女殿下万歳』

とか言ってるんだけど、大半は内心お父様を侮蔑してるんだよね。虎視眈々と次の皇帝の位を狙う物達や媚びを売って要職に就こうとする者千差万別だね。

向こうでは、ルードヴィヒ皇太子がにこやかに挨拶しているんだあの元気な兄上が483年ぐらいに急死って怪しくない？殺られたんじゃないかと推測してますよ。

OVAでヘルクスハイマーがリッテンハイムに死産したと言われている兄上を殺したんじゃないかと言って、私は知らんがブラウンシュヴァイクならやりかねないと言っていたから、しかも483年と言えば父様も重篤に陥っていた、その時に後を継ぐべき皇太子が急死し残るのは門地の後ろ盾がない1歳ほどの赤子どう見てもブラウンシュヴァイク、リッテンハイムが絡んでいるとしか見えないんだ

よね。

フェザーン&地球教という可能性もルビンスキーが482年に自治領主に就任しているし前の自治領主は地球教の支持から逸脱して処分されている訳だし就任記念の実績作りに暗殺した可能性もあるなただあの時点では帝国同盟とも戦力はほぼ拮抗。所謂48対40対12の状態でわざわざ帝国が減ぶ様なことをしないだろう、後半のルビンスキーなら独自の判断でしただろうけどあの当時そんな力はないはず

しかし注意しておくことには手を抜かないようにしないと駄目だな。

しかし今日は私のご学友候補と顔合わせと家庭教師役やお姉様役の夫人や令嬢も来てるから会場に大輪の花が咲いたがごとくなり、その花に群がる貴族の子弟がナンパして居るみたいに見えるね。

私の所にはご機嫌伺いに来る方々の多いこと多いこと、腐っても皇帝陛下の権力は未だあるようです。

アマリーエ、クリステイーネ姉上達は既に売却済みで残りは私だけだからみんな来るよね。

各爵や軍の重鎮達や宮廷の廷臣達の子弟達がわらわらと来ては挨拶をしていくし挨拶し疲れます、帝国貴族だけで4000家以上居るけどまあクロプシュトゥク候のようにハブされてる方々も居るから全部じゃないけどね。

まあ男児はご学友には成らないから将来の許嫁候補で感じだね。

さっき来たのはあのフレーゲル、来た瞬間ウゲツて思ったけど顔に出さないのが仕事だしね、『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございませ、是非来年の視察ではエスコートさせていただきます』  
「存じます」

とか言ってくるから適当に煙に巻いておいたよ。

ミュッケンベルガー元帥いやこの頃は大将の子息のフリーデグットさんは14歳だけど大将ソックリな堂々とした体格で好感の持てる方でしたね。

おつ今度来たのはどっかで見た顔だけど誰だっけ？んとウルナイゼン・・・あああのラインハルトの幼年学校同期生でへまやって精彩を欠いて閉職に回されたトウルナイゼンか伯爵だったんだな、まあ普通にご挨拶つと。

今度はマールバッハ伯爵がロイエンタールを連れてきたよ、まあ伯父甥の関係だから有るんだらうけど、にこやかに『マールバッハ伯レオンハルトで御座います、皇女殿下にはご機嫌麗しく、此処に居るのは我が甥オスカーで御座います。先年は皇帝陛下皇女殿下には類い希なる栄誉をいただき祝着至極に御座います』

『マールバッハ伯が甥オスカー・フォン・ロイエンタールで御座います皇女殿下ご機嫌麗しく存じます』

「マールバッハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしてみましたか」

「はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います」  
こんな感じで挨拶するんだけどロイエンタールは嬉しくないんだよねきつと、女性に対して母親の増悪があるから。

オフレッサーとかは未だ此処に出られるほどの地位じゃないみたいで姿が見えない会ってみたいのに残念、いずれ装甲擲弾兵の閲兵を父様に頼んで連れて行ってもらおう、今年士官学校へは校長とシユターデンのせいで行けなかったのだから、せめて卒業式には参加したいな。

一休みして午後からはご学友候補のご令嬢方とのパーティーです。同じ歳だけどブラウンシュヴァイク公令嬢のエリザベートとかは来てないんだよね。

館で古典文学を教えて貰う講師としてベアトリクス・フォン・マ  
リーンドルフ伯爵夫人が紹介されたんだけどヒルダのお母さんだよ  
ね？一緒に付いて来ている子供ってヒルダじゃない？

「ベアトリクス・フォン・マリーンドルフと申します、この度皇女  
殿下へ古典文学をお教えすることと成りました」

「ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフと申します以後お見知り  
おきを」

「よろしく願いますね」

ヒルダシヨートカットじゃない綺麗なロングじゃんいつ頃切ったん  
だろう。

お外の学校でも習うらしいけど来た方が、ヴェストパーレ男爵夫  
人だったけど年取ってるよ似てるけど年増です、どうやらお母さん  
のようですね。

「マルグリート・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人で御座います、  
この度皇女殿下のご教育の一環として我が校の総力を挙げますので  
ご安心下さい」

総力なんか挙げなくて良いからさ適当にいこうよ>><

「マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレと申します以後お見知り  
おきを」

男爵夫人だこの美少女が芸術家の愛人を7人も囲う方になるのです  
ね、メックリンガーに未だ会ってないのかな？今度聞いてみよう。

次から次へと教師役とお姉様役とのご挨拶が続いていよいよご学  
友登場か。

ケルトリング侯爵家のクラリツサ嬢、エーレンベルク元帥の曾孫の  
ブリギツテ嬢、メクレンブルク伯爵家のヴィクトーリア嬢と順番に  
紹介されていく5人いるそうだけど次の言葉にん？って思ったです。

リヒテンラーデ侯爵家エルフリーデ嬢？？？てか彼女刃物女じゃな



いか？うわーリヒテン爺さん養女にして入れてきたのかよ、刺されるのはいやだー！けど見た限り大人しくて可憐な美少女なだけだな。

やっぱり家族殺されて極寒の流刑星に流されたのがやさぐれさせたんだな。

「皇女殿下私エルフリーデ・フォン・コーラあつりヒテンラーデと申しますよろしくお願いいたします」

間違えなんて可愛いじゃん彼女を不幸にしないように頑張ろう。

最後が・・・えっグリーンメルスハウゼン子爵家のカロリーネ嬢・・・  
・グリーンメルスハウゼン爺さんの縁者だよね、そうだよ？

「皇女殿下私カロリーネ・フォン・グリーンメルスハウゼンと申しますよろしくお願いいたします」

えーと取りあえず後で聞けばいいか今日はグリーンメルスハウゼン爺さん来てないみたいだし。

「私こそよろしくお願いいたします」  
しかし爺さんこんな孫？いたのか。

まあ此で9月からは6人で勉強だ、科目が多くて憂鬱だね。

第十一話 刃物女とお友達（後書き）

明日から出張でUP出来るか未定です。

## 第十二話 裏の事情（前書き）

出かける前に今日分だけは更新、今夜は難しいです。

## 第十二話 裏の事情

帝国歴477年7月25日

オーディン    ノイエ・サンスーシ    黒真珠の間                    ヨヒア  
ム・フォン・フレーゲル

本日我が妻になるテレーゼ皇女のご学友お披露目会が開かれた、許嫁候補も居るだろうという輩も居るが其れは間違えた、テレーゼ皇女の夫は私ヨヒアム・フォン・フレーゲル男爵以外には考えられないのだ。本日も謁見時『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございます、是非来年の視察ではエスコートさせていただきますたく存じます』と言つたら、にこやかに接してくれたのだ。伯父上も全面的に協力してくれるから他の連中には負けはしないのだ。

オーディン    ノイエ・サンスーシ    黒真珠の間    フリーデグツ  
ト・フォン・ミュツケンベルガー

祖父に連れられテレーゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加した本来なら幼年学校4年であるから授業があるのだが免除されたのだが、本来ならばミュツケンベルガー伯爵家の本家たる再従兄弟が出るのが普通なのだが既婚者なので私にお鉢が回ってきたようだ。どうやらお披露目会と将来の婚約者候補を絞り込むための会だったようだ。テレーゼ皇女殿下とお話したが可愛らしいかたであった。フレーゲル先輩がニヤニヤと自分の世界に入っていたようだ。気がしないことにした。

オーデイン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 オスカ  
ー・フォン・ロイエンタール

マールバツハの伯父にどうしても言われ行く気がなかった不敬にあたると言われ仕方が無く皇女のご学友お披露目会なるパーティーに参加した。

仕方がなかったがパーティーに群がる無数の艶やかな花達、手折つてみたいと感じたが皇女への挨拶に連れられ挨拶をせざるを得なくなった。伯父だけ挨拶で良いだろうと思ったら俺に振ってきた『マールバツハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしていましたか』

はあ！息災じゃないお前のせいで去年は散々だったんだぞと言えないから『はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います』と心にもないことを言ってきた。しかし伯父が又噂を流すかもしれないなんとかしてくれ！

オーデイン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 ヒル  
デガルド・フォン・マリーンドルフ

お母様に連れられてテレーゼ皇女殿下のパーティーへ出席した、お母様が古典文学を教えるそうではお姉様役で遊び相手とかするらしい、テレーゼ様はにこやかでたいそう可愛く可憐なかたでした、今度会えるのが楽しみです。

オーデイン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 マ  
グダレーナ・フォン・ヴェストパーレ

お母様の学校でテレーゼ皇女殿下のご教育をお手伝いすると言っ

ことで、ご学友お披露目会に参加しご学友も観察するために一緒に参加した。皇女様は私顔を見ると一瞬ジーとみましたがすぐに笑顔で挨拶を返していただきました、9月からは私も参加する事になりそうですから頑張らなければなりませんね。

オーデイン      ノイエ・サンスーシ      黒真珠の間      エルフ  
リーデ・フォン・リヒテンラーデ

緊張するな、7月になっていきなりリヒテンラーデ大叔父様から父に私を養女に欲しいと連絡があった何でも皇女殿下のご学友として私が選ばれるそうでビックリした、今日初めて皇女殿下にお会いしてご挨拶したけど、いきなり自己紹介で名字を間違えるんて恥ずかしいよー皇女様は変に思わなかったか其れが不安だよ。けど優しそつなかたで良かった9月からが楽しみです。

オーデイン      某所

「今宵のパーティーは如何でございました」

「小娘の学友選びと婚約者候補選びが茶番だったな」

「そつでございますか」

「うむいくら教師が良くても役に立たん知識ではどうしようもあるまえ」

「御意」

「其れよりあの女の流産はどうした」

「あの者からですと自然に流産させないと怪しまれる為特殊な薬を使うとの事です」

「急がせよ」

「御意」

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒャルト・  
フォン・グリンメルスハウゼン

テレゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加したカロリーネが帰  
ってきた。

「カロリーネご苦労であった」

「はっ御屋形様」

「テレゼ様はいかがであった？」

「御屋形様の仰る通り皇帝陛下と同じかと」

「やはりな、自分をお隠し有られる方が」

「御意」

「兄も暗殺され自らも生まれながらに暗殺されかけたお方じゃ陛下  
下と同じ様に成られるのも判る気がするの」

「御意」

「カロリーネ濟まんの無理を言って」

「何を仰います御屋形様、私のような者を養女として育てていただき  
何不住無く居られるのも御屋形様のお陰にございます」

「此から辛かるうがテレゼ様を守ってくれ」

「御意」

「カロリーネあまり鯨張るでないぞ」

「御意」

第十三話 退屈なる日々(前書き)

相変わらず遅い時間経過。



### 第十三話 退屈なる日々

帝国暦477年8月15日

オーディン    ノイエ・サンスーシ    桃珊瑚の間    テレー  
ゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日9月からの勉強で宮殿内からヴェストパーレ男爵家が主催する学校へ通うための侍従武官との初顔合わせが行われるのです。お母様は私が外の学校へ通うのは前代未聞だと反対したのですが、お父様が世間を見るのもよいことじゃとお母様を説得し（お父様がお母様のところへ通う回数を増やす約束をしたらしい）週2日通う事に決まり残り2日は館で勉強し1日は見学等の野外学習日で残り2日が休日という感じになるそうだ。

女官に連れられて部屋に入ると既に4人の男女が待っていました。男性2人女性2人で身のこなしから相当な腕の持ち主ではと感じました。

最初にリーダーらしき30代に見える男性から挨拶がありました。「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官に任命されました、クレメンス・ブレンターノ大佐で有ります」

続いて20代ぐらいの男性が「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ハインリヒ・フォン・ヴィッツレーベン大尉で有ります」

それから20代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、マルティナ・フォン・バウマイスター中尉で有ります」

最後に同じく20代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗

しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ヴァーリア・ディーツゲン少尉で有ります」

4人から丁重に挨拶がされました。こちらも此から命を預ける訳ですから丁重にペこりとお辞儀をしながら「テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムです、此から苦勞をかけると思いますがよろしくお願ひいたします」

あまりの丁重さと腰の低さに驚いているようです。普通皇族どころか貴族もこんな態度取らないよね。

まあ最初が肝心ですし嫌々守られるよりは愛想良くしておいた方が良いでしょう。へんな貴族の紐付きだったら嫌ですけどね、その辺は追々判るでしょう。

顔合わせが終わって4人が退席したので自室に帰って何となくボーツとしながら考え事。

今日は日本じゃ終戦記念日かもう日本もないし関係ない日になってるんだけどね、元日本人としてはしみじみする訳ですよ、甲子園も高校野球もない夏の日。

スイカが食べたい気がしますね後で侍従長にスイカがないか聞いてみましょう。

そう言えば来年に第4次イゼルローン攻略戦が有るはずですが原作に載って無いので判らないんですよねOVAでアキレウス級旗艦戦艦がトールハンマーで沈むシーンが出てますが、トールハンマーで沈んだアキレウス級旗艦戦艦は記録上無いので478年に戦没したらしい第4艦隊旗艦アキレウスが該当するんじゃないかと言われてましたからね。けれども来年イゼルローン攻略戦が有るとは言えませんが、何か手は無いですかね。

そう言えば同盟の大規模戦闘のパターンは評議会選挙の年統合作戦本部長改選の時に活発化しましたね、帝国領侵攻作戦が前者でしたし、

ヤンのイゼルローン攻略が後者でしたね。

同盟の選挙と改選のパターンさえ判ればかなり正確に攻撃がわかるのでは無いでしょうか、研究する価値はありそうですね、問題は一人でしないと行けないと言うことで時間が足りないし資料が集まるかどうか、せめて軍務省と統帥本部の協力は欲しいが、あまり動き回るのも駄目だし・・・ん・・・困った知識も宝の持ち腐れだよ。カロリーネと学友になれたからグリーンメルスハウゼン爺さん家に遊びに隠れて会いに行つて相談するかな時間いつが良いんだろう本人に聞かなきゃ駄目だから暫くはむりだな。

オーティン      ノイエ・サンスーシ      小部屋

「グリーンメルスハウゼンその娘がカロリーネか」

「陛下そうでございます」

「カロリーネ、テレゼはやはり儂と同じか」

「皇帝陛下皇女殿下は韜晦なさっております」

「鯨張らずに喋るが良いぞ」

「いやしかし恐れ多い事なれば」

「良いのじゃ儂は堅苦しいのは嫌いだな」

「カロリーネ此から陛下には直接度々連絡をするのだからそうせい」

「はっ陛下」

「未だ堅苦しいぞハハハ」

「してグリーンメルスハウゼン今回付けた護衛はどうじゃ?」

「私の部下から選りすぐりの者を選びました、ケスラーは私の代理ですので動かさせませんが、ブレンターノ、ヴィッツレーベン、バウマイスター、ディーツゲン4人とも腕利きでございます」

「女官も4人紛れ込ませております」

「他には?」

「外出時には装甲擲弾兵出身者からなる護衛部隊を2個小隊用意し

「ております」

「100人が見事じゃの」

「しかし油断は禁物でございます」

「うむ、カロリーネご苦労じゃがテレエを頼むぞ」

「もつたいないお言葉でございます」

「これ。またじゃな、ハハハ」

「カロリーネご苦労」

「陛下失礼いたします」

「さてグリーンメルスよ幼年学校のあの者はどうして居る」

「はい成績は優秀であります共に連れて行った赤毛者も成績優秀でございます」

「ほう思わぬ拾い物であったか」

「そうですね、しかし」

「どうしたのじゃ？」

「あの者達校内でも孤立しており度々喧嘩沙汰を起こしており、さらに姉の悪口を聞くと逆上し石で相手の頭を殴り続けました、幸いにも死者は出ておりませんが問題になっておりまして、放校の可能性も出ております」

「うむその辺は儂が姉に頼まれたとして事を荒立てないよう伝えさせよう」

「そうですね陛下」

「しかしあの者がどう化けるか楽しみよのフッフ」

「グリーンメルスよ此からも頼むぞ」

「御意でございます」

## 第十四話 退屈なる日々その2（前書き）

すみません、今回話の関係上凄くつまらないです。

## 第十四話 退屈なる日々その2

帝国歴477年9月1日

オーデイン

テレゼ・フォンゴール・

デンバウム

本日より憂鬱な授業が始まります、夏休み明けなのに宿題未だ出  
来てない心境です。

いやね歴史、科学、国語、数学、語学、とかの実用な物は良いんだ  
よ、けど貴族のたしなみお香当てやお茶のブレンド当て（伊藤園に  
でも勤めるつもりか？てかヤンにやらせれば100点じゃねー？）  
とか実用的じゃねー！

通うために用意された地上車を見ればあくまで外見は普通の車の  
様に見えるんだよね外見はさ……でもさーサイズがでかすぎ  
戦車みたいな大きさなんですこれ、乗ってみると又々冗談かと思う  
ような装甲板ですガラスも厚いです後で聞いたら戦艦用装甲板の流  
用だそうです……てかさ其処までしないと外出られないなら出る  
こと無いんじゃないの？と思うが皇女じゃあ仕方がないかぁ。

んで朝7時に起きてお母様と朝食後身支度をしたらお出かけです、  
ただねーノイエ・サンスーシってだだっ広いから町へ出るまで40  
分かかるので飽きるよね、出れば20分で着くのによ、宮殿内  
だけでもへりでも使いたいですよね。

9時にやって来ました、ヴェストパーレ家の学校へ皆さん来て  
らっしゃいます、因みに学友5人と共に学園長たるヴェストパーレ  
男爵夫人にご挨拶です。

早速の授業は無いですが此行われる教育の方針とか何を習うとか先生はどなただとか淡々と説明されていきます。

其れが終わると懇談会で先生方と我々生徒達が雑談します、お菓子を摘みながら紅茶で喉を潤す、んー良いねこのままなら良いんだけどね、明日から地獄が始まるのだね。

其れで2日目早速文学の勉強ですか、まあ良いですけど。美術の勉強ですね教師を見るとメックリンガーじゃないですね普通のおばさんです、未だ娘さんはメックリンガーは未だ付き合っていないようですね、8人も愛人居るなんて親が聞いたら泣くよねふしだらな娘ですって、まあそのうちメックリンガーを連れてくるんだろっねその時が楽しみです。

夕方はみんなでお茶会明日は用事がないのでお休みです。

本日は何もやることがないのですよ、仕方がないので作戦を考えましょう。

どっかオーデインへのルートの惑星にグランドキャノン作れないかなと妄想、金と時間がかかりすぎて没、

移動要塞で機動防御だとガイエスブルグで失敗検討を求める、んーろくな事が考えつかんなこんな日はやめよう。

今日明日は宮殿で習い事です、学友が来てダンスにお花にお香にお茶に歌とオペラ鑑賞。

あああくびが出ますね、習いたいことが全然出来ません。

歴史と科学と軍学とか習いたいのですが駄目ですね、お父様に相談するか迷いますね。

休みの日です今までは毎日が休みでしたが休みが減った割にはやる事が有りません退屈です。

いつその事何処かへ行きたいのですが母様は妊娠中父様は謁見で暇

がないそうですタイミングが悪いですね、誰かの家に行こうにも先に連絡して準備をしないと駄目なので時間がありませんでした、次回からはちゃんと連絡をしておきましょう。

帝国歴477年10月

オーディン  
ールデンバウム

テレーゼ・フォン・ゴ

9月から始まった勉強も一ヶ月が過ぎ少しずつ落ち着きを得て来ました。

週1回のペースで順番に学友の家にお呼ばれし同じように週1回で館へは5人全員を呼ぶ形で過ごしてきました。

最初にリヒテンラーデ侯爵家へ行きましたよ、流石國務尚書の家ですね立派です凄いですね、まるで美術館のようです訪ねると侯爵自ら出迎えてくれましたよ。この人映像で見るとスゲー悪そうに見えるんですよ、ところが我々を迎えるときには笑顔なんですよ不気味ですね。越後屋とか似合いそうな感じがして少し笑いそうになりましたよ。エルフリーデは映像を見た感じと全然違って優しいよい子ですから可愛くて仕方有りませんからロイエンタールの毒牙から守ってあげたいですよ。リヒテンラーデ侯とも話をしたいけど今の年齢じゃ駄目でね何とかしたいのは山々だけど年相応の対処しかなできないです。

次がケルトリング侯爵家この家は武人の家系ですからね同盟のブルース・アッシュビーにボコボコにされてから家運が傾いたんですが、ミュッケンベルガー伯爵家とのつながりは非常に強いですからねその筋から復活しようと頑張ってるんですよ。やはり当主のケルトリング少将がお出迎え、雰囲気からして前線方の武人に見えま



すね、ただ此処も同じで話を殆ど聞くことが出来ないんですよ、折角の現場の声が聞こえないもどかしかが残念です。

メクレンブルク伯爵はごく普通の門閥貴族で大げさでなんかランズベルク伯を思い出しましたよ、可もなく不可もない極点的な門閥貴族ですね。相談等はしてもしょうがないタイプふむ員数あわせて集めたような人材だね。

エーレンベルク元帥は子爵です、元帥本来は仕事だけど皇女が来るというのでお出迎えしてくれました、きつと帰ったら書類の山でしようすみませんね。此処でも当たり障りのない話ばかりで終わってしまいました。やっぱ1対1じゃないと話せないね。

やって来ました、苦節6年8ヶ月会いたい会いたいと思っていた、グリーンメルスハウゼン子爵家へ今日突撃です。ワクワクしますね到着するとグリーンメルスハウゼン子爵とカロリーネがお出迎えしてくれました。おおっ初めて見るがこの頃確か67歳ぐらいか未だ未だ元気に見えるこの老人が彼のグリーンメルスハウゼン文書を遺した訳ですね、今回は誰がその文書を手に入れるんだろうか気になるね。

早速ご挨拶「この度はお宅にお呼びいただきありがとうございます」「皇女殿下には我が館に行幸頂き誠にありがとうございます」

よし此でアポの準備ぐらいは出来たね、後はどのように話をするチャンスを作るかだね。  
カロリーネさんは控えめな性格で表に出てこないタイプですね。お爺さんと一緒に目立たぬような感じですよ。

こうして9月から始まったお宅訪問は順当に進んでるです。

第十五話 暗雲（前書き）

書いてて感情移入してしまった。

## 第十五話 暗雲

帝国歴477年12月

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      テレーゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

グリーンメルスハウゼン爺様に初遭遇してから既に3ヶ月近くその後会いに行つても軍務や領地へ行つているとかで全然会えません、こりゃ困つた避けられているのでしょうか。カロリーネに聞いてもちょうど都合が悪いらしいですと言われています。何とかせねばあかん。

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      小部屋

「グリーンメルスよテレーゼに会つてやらんのか？」

「今少し資質をみております」

「そちが見て後どのくらいじゃ」

「年明けにはよいかと」

「どのような事を聞きたがつておるのじゃ」

「カロリーネによると陛下の若い頃の話色々聞きたいからと仰つているそうです」

「ふむあの頃のことか」

「ですなあこのころのことでしょう」

「父の威厳は大丈夫かの」

「陛下のお心もテレーゼ様なれば判りましょう」

「まあそうじゃの」

「恐らくその話は口実でありましょう、相当に政治、歴史、軍学などに興味を持たれておりますからそちらの話がメインかと存じます」

「これは楽しみじゃ逐次伝えるように」  
「判りました」

「シュザンナの方は大丈夫か」

「こちらも手練れを付けておりますれば」

「うむ頼むぞ」

「はっ」

帝国歴477年12月24日

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      テレーゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

本日はクリスマスです。この時代にもキリスト教は廃れたようですがクリスマスは有るのです不思議だね

お母様は臨月なので参加せず、宮殿でパーティーよりはヴェストパーレ男爵邸でパーティーをすることにしました。

在校生や教え子さん達が皆さん着飾って来ています、男性は居ないです女だけのパーティーです。

クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃんみんなかわいく着飾っています、話すことは誰そのの御曹司は格好いいとか誰それは嫌だとか、かましいですよ。ヒルダさんもマグダさんも来てますから話が弾みます。

聞いているとヒルダさんこの頃から真面目ですね、マグダ姐さんはこの頃既にパトロンを考えているような口調ですね早い早いですね9時までパーティーしてお開き大人の方はこれからご用があるそうです、知ってますけどね、子供はおとなしく帰りますよふふ。

帝国歴477年12月26日

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      テレーゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

クリスマスから2日後、本日お母様の出産予定日です。今までなら何らかの妨害が何者から行われてきたのですが今回はそれに鑑み身元のしつかりした者を付けていましたので安心できるそうです。大きなおなかで辛そうなお母様は先ほどから陣痛がして分娩室へ入って行かれました、私のこともありますので出産後の処置に3人が入り処置するそうです、此なら相互監視が出来ますから安心ですね。

分娩室に入って2時間あまり経ちますが未だに出てきません心配です。

3時間ほどでやっと出てきましたが、侍従長の顔色が悪いです。

「まさかお母様が何かあったのですか？」

「いえ侯爵夫人はご無事ですがお子様の方が……」

「子供がどうしたのですか？」

「お生まれに成ったのですが呼吸をしておらず懸命の処置も虚しく先ほどお亡くなりになりました」

「え……」

「えっ死んだ……死んだ……何で何で……何でこんな所だけ原作と一緒になるの！！」

そんなそんなこの子は無事に生まれてきて育つはずじゃなかったの。みんなで守ろうとしたのに何で死んじゃったの……辛いよ辛すぎるよ幾ら原作がそうだからって、生まれる前から死を宣告されているなんて酷すぎる。あまりに無情すぎるよ！

殺されたんだきつと、兄上みたいにして私みたいに殺そうとして殺されたんだ！！

ブラウンシュバイクカリッテンハイムかフェザンか地球教か誰に

しても許さない絶対許さない必ず敵を討つ！！  
みてやがれ奴らを地獄の底へ追い詰めてやる！！  
自分らの犯した罪を思い出すがいい！！

「皇女殿下がシヨックで興奮しておられる女官はお連れして差し上げろ」

「皇女殿下さあ行きましょう」

「けどお母様が・・・！」

「ご心配をお掛けしては反って侯爵夫人に障ります」

「判りました」

部屋に帰ってきて一人にしてもらい、この世界に来て初めて思いっきり泣きました、初めて出来る弟か妹大事にしたいと思ったそれなのにそれすら許されないこんな世界の皇帝一家って辛いよね。  
会えなかった弟か妹天国で幸せになってね。必ず敵はとるから見守っていてね。

オーデイン

ノイエ・サンスーシ

シュザン

ナ・フォン・バーネミュンデ

3人目の御産ですから楽に出来ましたが、生まれた子を見て思わず天を呪いたくなりました。子供は奇形児だったのです、私が悪いのでしょうかどうすればいいのか途方に暮れ自分を責めました、目に浮かぶのはテレーゼの笑顔ですこの様な劣悪遺伝子を持つ私がテレーゼの母親として一緒にいられる訳がない、ルドルフ大帝時代であれば母娘共々死を賜るはずです。

たとえ今の陛下でも私はテレーゼと引き離されるでしょう。テレーゼの為ならこんな母親は居ない方がいい死んでしまいたい、丁度手術台上にメスがある、テレーゼこんなお母さんを許しておくれ。

幸せに暮らすんですよ・・・私の大事な大事な可愛い可愛いテレ  
ゼ・・・

「きゃーーーーー侯爵夫人!!!」

## 第十六話 蜉蝣の命

帝国歴477年12月26日

オーティン                      ノイエ・サンスーシ                      フリード  
リヒ4世

シュザンナが本日儂の子を出産する、テレゼが生まれて6年又儂の子が出来るとは、帝国を滅びへ向かわせるこの儂に。

出産時には間に合わなかったが3時間後に分娩室へしかし奇形児が生まれシュザンナがショックを受けていると聞き急ぎ向かった。直ぐさま部屋に入ると『きゃー！ー！侯爵夫人！』と悲鳴が聞こえ見るとシュザンナがメスを右手に持ち自らの喉を突こうとしていた。

儂は無我夢中でシュザンナの手を握りしめた、その際手のひらが切れたが、そんなことは気にならなかった。

「シュザンナやめるのじゃ！」  
「陛下お止め下さりますな」  
「馬鹿なことではするではない」  
「テレゼ・テレゼの為にございます」  
「テレゼの為に？」  
「私のような劣悪遺伝子の持ち主が母親ではあの子が不憫です」  
「その様なことはない！」  
「いいえあの子の為に」  
「違うのじゃシュザンナ、違うのじゃ」  
「は？」  
「まず落ち着くのじゃ、そして儂の話をよく聞くのじゃ」



女官達が席を外していくの、グリーンメルの手の者達じゃな

「良いかシュザンナ今回の事はお前のせいではない」

「そんなお慰めを・・・」

「違うのじゃ、此はゴールデンバウムの血なのじゃ」

「陛下のお血」

「そうじゃルドルフ大帝以来ゴールデンバウムの血は汚れ続けてきた、代々死産、奇形児、異常者などが多数出てきて居るのじゃ、だからシュザンナおぬしのせいではない」

「しかし」

「儂の子の内4人は流産、9人は死産、9人が成人前に死んでおる、儂の兄弟も7人が病死じゃ、ゴールデンバウムの血は濁り生命力が衰えておるのじゃ」

「しかし私の血にも有るかも知れません」

「テレーゼを見よあの子は五体満足で何不住無い体で生まれてきたではないか、これがシュザンナお前の功績じゃ」

「陛下」

「テレーゼの為に前は必要なのじゃ母親を失ったとしたら、どれだけ悲しみ傷つくであろうか、そんなことをするでない」

.....

「陛下判りました、テレーゼの為に私は生きます。テレーゼを守り  
慈しむます」

「判ってくれたかシュザンナ」

「はい陛下、あっお手が」

「よいよいシュザンナが無事だったのじゃこんな傷何ともないわ」

「お手当をせねば成りません」

「たれぞ陛下のお手当を」

「さて、シユザンナよ。テレゼが非常に興奮しているそうじゃ、此から参ろうぞ」  
「陛下お供いたします」  
「親子三人で語ろうぞ」

帝国歴477年12月26日

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      テレゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

ちくしょうちくしょうワンワン泣いていると、女官がお父様とお母様が会いに来てくれたと伝えに来てくれた。お父様とお母様が来てくれた、悲しいはずなのに来てくれたすぐに会いたい、走って出て行った。

「お母様ー、お父様ー」  
「テレゼー」  
「テレゼよ」  
「お母様、お母様赤ちゃんが赤ちゃんが……」  
「テレゼ残念だけど駄目でした」  
「殺されたのですね！」  
「テレゼ其れは違うぞ」  
「お父様違う訳無い！」  
「テレゼ本当に違うのよ」  
「お母様まで悔しくないのですか！」  
「テレゼ落ち着きなさい、そしてよく聞きなさい」  
「お前には辛いかも知れんが、此はゴールデンバウムの宿痾なのじ

「や」

「宿痾？」

「そう長い間溜まり溜まった悪いところじゃ」

「悪いところ」

「幼いお前には辛いですが、我々の血では赤ん坊が育ち辛いのです、そのため今回の子も死んでしまったのじゃ」

「テレゼご免なさい貴方に弟を生んであげられなくて」

「お母様が悪いんじゃない」

「お母様もお父様も悲しいんだから、三人で赤ちゃんが天国で幸せになれるようにお祈りしようよ」

「テレゼそうですね」

「テレゼそうじゃな」

「今日は一緒に寝ましょう」

「お母様お体は大丈夫なのですか」

「大丈夫ですよ」

「僕も一緒に良いかな」

「はいお父様」

「身支度をしましょうね」

「お父様お母様、だいつすき」

両親と寝る準備しながら今回のことを考えていた。

今回は本当に死産だったのか、怒り狂ったがお父様お母様が違っているとってくれた、可哀想な弟よ天国で幸せにしておくれ。

ゴールデンバウムの血か、確かに遺伝子異常が多い系統だし生命力が弱っているのか。お父様お母様を悲しませ無い為に私がしっかりしないと、今日は怒りに任せて切れてしまったけど、命を守る為に冷静さを強化しないと駄目だ。

「テレゼそろそろ寝ましょう」

「はいお父様お母様」

オーデイン 某所

「ハハハハハようやった」

「あの者見事に任務を成功させてくれました」

「そうよ、一時は失敗したかと思うたが見事にやってくれた」

「流産を狙いながら其れが失敗したときの為に奇形児と言う次作を行っております」

「奇形児とはゴルデンバウムの血のなせる技か？」

「其れもございますが、フェニトイン、プリドミン等の薬を使うと奇形児率が非常に上がるそうでございます」

「なるほど其れは此からもつかえるの」

「御意」

「あの者には此からも逐一繋ぎをするようにせよ」

「御意」

「ハハハハハアーハハハハ」

第十六話 蜉蝣の命（後書き）

黒幕が動いていました。

## 第十七話 グリンメルスハウゼン子爵（前書き）

やっとグリンメルスハウゼン子爵の話に、ヤンが出るのはいつの日か。

## 第十七話 グリンメルスハウゼン子爵

帝国歴477年12月27日

オーディン           ノイエ・サンスーシ       ベーデミュンデ侯  
爵邸       テレゼ・フォンゴルデンバウム

昨日は悲しいことがありました。弟が生まれそして死にました。取り乱し酷い状態でしたが父様母様によって慰められ勇気付けられました。今日から又頑張ろうという気力がわいてきました。

朝起きると父様母様が見守ってくれていました嬉しかったです。小声で父様が『テレゼや此からのことを思うのであれば年明けにもグリンメルスハウゼンに会ってきなさい』と言ってくれました。私は『はい』と返事をしました。その後支度をして朝食を食べながら赤ちゃんのお墓はどうなるのと聞く皇室専門の墓地に埋葬されたとのこと、早いと思ったら生きられなかったので早く天国へ送ってあげるとのことでした。そんな風習があるのかと思いました。取りあえず午後にお参りに行き冥福を祈りました、人生ってむなしいな。

帝国歴478年1月1日

オーディン           ノイエ・サンスーシ       テレゼ・フォ  
ンゴルデンバウム

新年になりました。今年こそは良い年でありますようにと大神オ

ーデインに祈りました。

さらに元日本人として初日の出を見ながら天照大神に祈願しました。

新年ですので身支度をした後いつもの通り、黒真珠の間で新年パーティーです。

喪中の習慣がないのか或いは帝室としての義務でしょうか、父様は若干思い込んだような顔で笑顔を無理に作って居るようです。

私としては欠席したいのですが義務ですから仕方ありません。いくら転生者でも今の六歳児の精神がメインですので、身近の死にはメンタル面で非常に辛いです。

皆さん王子死産を知っていますが、さすがは貴族神経が凶太いかライバル死んで嬉しいのか、全然平気で談笑してますよね。

兄上は軽いため息を吐きながら談笑に応じています。

マグダ姐さん、（いやねお姉さんと言うより姐さんじゃないかと我ら6人組では呼んでるんですよ）とヒルダお姉さんが来てくれて慰めてくれます、因みに敬語は止めてと言ってるんですが、正規の時には矢張り敬語なんですよね。

「皇女殿下この度はご心中お察しいたします」

「男爵令嬢お心遣い痛み入ります」

「皇女殿下のお心を思うと胸が痛みます」

「伯爵令嬢お心遣い痛み入ります」

取りあえずの社交辞令をして少し離れた所で雑談。普段は敬語なしでお願いしているのです。

「弟さんは残念な結果だったわね」

「死産だそうですね」

「そうなのです、外因的なことを聞いたのですが正真正銘の死産だ



と母から聞きました」

「気を強く持ちなさいね私も出来る限りのことをしますわ」

「私もお手伝いできることはします」

「お姐さん、お姉さんありがとうございます、頑張りますんで今年もよろしくお願いいたします」

「ええ今年もよろしくね」

「今年もよろしくおねがいます」

「そう言えばお姐さん、グリューネワルト伯爵夫人とお友達になつたそうですね」

「ええアンネローゼがみんなから爪弾きにされて気の毒で母性本能を擽られましたわ」

「伯爵夫人はどのようなお方なのですか」

「だいたい原作で知ってるけどね、男爵夫人の見識を聞きたいのがね。」

「私も聞きたいですね」

「彼女は凄く大人しくて物静かで優しく料理も上手よ」

「綺麗な方ですよね」

「そうですね」

「テレゼ様」

「クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃん」

「今年もよろしくおねがいます」

「今年もよろしくおねがいます」

ワイワイしながら新年は始まっていったのです。

帝国歴478年1月7日

オーディン

テレゼ・フォンゴールデ

ンバウム

今日この瞬間こそ待ちに待った時、父様が会いに行けと勧めてくれたのだ全身全霊をかけ力を見せよう。果たして鬼が出るか蛇が出るか、グリーンメルスハウゼン爺さんの裏の顔が有れば正体を見せてもらえるか正念場だ。

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒャルト・  
フォン・グリーンメルスハウゼン

本日テレゼ様と初めて会談する、私が見てきた限りテレゼ様は大器だ。年齢不相応の冷静さ知恵も有り機敏も効き政治経済歴史軍学等に多含まれる興味を引いている。この姿は幼き頃の陛下を彷彿とさせるものじゃ、儂も久々に朝から興奮しておる新たな昇竜を見つけたのかも知れんからな。  
テレゼ様がいらっしゃったのお手並みを拝見させて貰いましょうかの。

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      テレーゼ・  
フォンゴールデンバウム

「皇女殿下このような老人の元へ行脚頂き名誉この上なき事、誠にありがとうございます」

「グリーンメルスハウゼン子爵この度はお招き頂き誠にありがとうございます  
じます」

「ささどつぞ」

「痛み入ります」

ふむ普段と違う客間に通されたわ秘匿の意味がある訳だね。

「皇女殿下におかれましてはこの老人に何をお聞きに成りたいの  
でしょうか？」

「父様の若き頃の思い出話をして頂きたくて参りました」

「皇帝陛下のお話でございますか」

「そうです」

「皇帝陛下は若かりし頃よりご聡明であらしやりました」

「そうでございますか」

「皇太子時代においても其れは其れはご立派でございました」

「ふむ試してますね、目が面白そうに見えますよ。そろそろ聞きます  
かね。」

「そうですね若き頃は優秀な兄、才気に富む弟の間で無気力凡庸愚  
物として自身を韜晦なさっていたのですからね、その為に町の飲み  
屋の店主に借金を作り皇帝次男が土下座したんですから、天晴れと  
か言いようがありませんよね、其処まで出来るお父様を尊敬して  
おります」

「……殿下」

「言い過ぎですかね。」

「そろそろ相談相手が欲しかったのです、腹を割ってはなせる相手  
が」

「其れが私だと仰るのですか？」

「もちろん、父からグリーンメルスハウゼン子爵へ会いに行けと勸た  
事もあります、宮廷や貴族の噂話や動向を長年にわたりお調べし  
ているのかなんとか」

「さようでございますか」

「そろそろお互い猫をかぶるのは止めませんか」

「……」

「・・・・・・・・」

お互いで睨めっこです

「ふふふふ」

「はははは」

「殿下には負けましたわ」

「勝ちましたね」

「して何をお聞きしたいのですかな」

「グリーンメルスハウゼン子爵貴方は父の影の部門を取り仕切ってますよね」

「はてさて」

「ここへ来ても知らんぷりですか、色々なスキャンダル等を調べてらっしゃるそうですわね」

「ふむ、よう知っておられますな」

「宮廷内で話を聞いていて次第に判りましたよ」

「さて殿下はこの老人に何をさせたいのですか」

「取りあえずは」

「第一に父が華麗に滅べは良いと考えていた帝国再生準備における人材確保」

「第二に帝国内部の叛乱勢力の確定及び内部への浸透」

「第三に叛乱軍に対しての軍とは別の情報組織の整備」

「第四にフェザーン対策」

「第五に皇族の身边警護、私は生まれたときに暗殺されかけてますからね」

「取りあえず今の年齢ではこのぐらいが精一杯でしょう」

「殿下流石ですな。とても6歳には思えない考えです」

「できますか」

「できましよう、陛下よりも殿下の好きにさせよとのお言葉を貰っ

ておりますから」

「グリーンメルスハウゼン子爵此からよろしくお願いいたしますね」

「この老人残りの人生のすべてを殿下に捧げましようぞ」

「今日は有意義な日でした。其れと殿下では無くテレゼで良いです」

「ではテレゼ様今宵は良き日でございました、お気おつけて」

「では失礼いたします」

よつしや矢張りグリーンメルスハウゼン子爵はスパイマスターだった原作じゃ其れらしい描写がありありだった物ね、其れを言う訳にはいかなかったけど何とか出来た。父様感謝でございます、此から忙しくなるぞ、人材確保が第一だラインハルトに取られてたまるかこつちが先取りだー！

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒャルト・

フォン・グリーンメルスハウゼン

今宵テレゼ様と話してみても先ほどの感が間違いで無いと身にしてみても判った。

まさにあの才氣韜晦具合正しく陛下の御血を色濃く引いておられる。あれほどとは思わなんだ若干6歳とは未恐ろしいぐらいじゃ。

男児であれば確実に皇帝として中興の祖となれる素質じゃ。

しかし男児で有れば今この世には居ないじゃろう、女子に生まれたのは天の采配としか思えん。

此から短い人生精一杯陛下とテレゼ様の為に誠心誠意尽くそうぞ。早速明日にでもケスラーと話し合わんといかんの、出来るだけ早く陛下と話もしなければならん。

忙しいが面白い年になりそうじゃ。



## 第十七話 グリンメルスハウゼン子爵（後書き）

第五次イゼルローン攻略戦、エル・ファシルの戦い、帝国領侵攻作戦のプロットは出来てるのに其処まで話が行かない状態、果たしていつになるやら。

第十八話 それぞれの新年（前書き）

亀のような歩みです。



## 第十八話 それぞれの新年

帝国歴478年1月8日

オーディン                      グリンメルスハウゼン子爵邸

「ケスラー大尉来たか」

「閣下お呼びだそうで、本日は何を」

「昨日テレゼ様にお会いしたのじゃ」

「皇女殿下とですな」

「テレゼ様は覗んだ通り、いやそれ以上の逸材だったわ」

「閣下それほどのお方ですか」

「そうよあの年齢であの知謀冷静は陛下以上じゃ、楽しみじゃわ」

「して我々はどの様な対応を」

「我らは全面的にテレゼ様をご支援いたすのじゃ、各リーダーに通達行つうのじゃ」

「はっ、では幼年学校の方はいかが致すのですか？」

「あの者の動向は今まで道理に逐一記録し探るよつにせよ」

「しかし宜しいのですか、あの者の危険な言動を陛下とてお知りでしょうに」

「陛下は知っていて敢えて目を瞑っておられるのじゃ」

「其れは又どの様なお考えで」

「陛下のお考えは追々判るであらう」

「済まぬのケスラーいずれ明かすときも来よう。

「来週テレゼ様と会談するで、ご要望に添った資料を集めよ、そしてケスラー貴官も同伴せい」

「はっ準備を整えます」

「此から益々忙しくなるぞ心せよ」

「はっ」

帝国歴478年1月8日

オーデイン 幼年学校寄宿舎

「キルヒアイス聞いたか」

「何をでしょうかラインハルト様」

「あの男の寵姫が男児を死産したそうだ」

「それはなんとというか」

「キルヒアイス愉快だな、あの男は姉上を奪い取ったのだ、その報いに子を取られたのだから」

「ラインハルト様・・・」

「子だけではない、いずれあの者のすべてを奪い取り惨めな死を与えてやるう」

「ラインハルト様お声が聞こえてしまいます」

「キルヒアイスは心配性だな」

「ラインハルト様」

帝国歴478年1月8日

オーデイン ノイエ・サンサーシ グリユーネワルト伯爵邸  
アンネローゼ・フォン・グリユーネワルト

新しい年が始まり私がここへ来て最初の新年でしたね、去年までならラインハルトとジークが居てくれて楽しい年明けでしたのに・・・  
・ラインハルトやジークは風邪など牽いていないでしょうか心配です、けれどラインハルトやジークを呼ぶ訳にもいきませんし、マゲ

ダレーナとドロテアとお茶会でもしましょう。

帝国歴478年1月8日

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸 テ  
レーゼ・フォン・ゴールドンバウム

昨日のグリーンメルスハウゼン爺さんとの会談で全面的な支援を約束して貰い一先ず安心です。

来週も会談しその時に必要な人材組織資金等の大まかな流れを決めるつもりですので、人材については原作知識をフル動員しながら転生者とばれぬように、如何にも偶然を装って決めていかないと危険ですね。

ラインハルト元帥府の主要メンバーとかは確実に引き込まないと駄目ですね、どうやら父様はラインハルトにも期待しておられる様なのである程度まで、ラインハルトが出世するのは此方も黙認ですね。

取りあえずはミッターマイヤーとロイエンタール、ミュラー、メックリンガー、ケスラー、アイゼナツハ、ケンプ、ファーレンハイト、ルッツ、ワーレン、ビッテンフェルト辺りか。Mrレンネンは要らねー、義眼はうちの家憎んでるし猛毒だから生理的に拒否したい、そうそう忘れちゃ行けないメルカツツ、陸戦じゃ原始人カリューネブルクだけど危険が一杯なんだよな、閣僚じゃシルヴァーベルヒ、リヒター、ブラツケ、オスマイヤー、マインホフ、ブルツクドルフ辺りを引き抜きたいな、そうなると領土がないと実験不可能だな、どっかの星貰えないかな。

バイエルラインやベルゲングリューンとかも超必要だし補給のベテランも絶対要るな、けど原作じゃ同盟のキャゼル又先輩かシンクレア・ゼップだったけか？しか思いつかんぞ。  
ともかく来週の話し合いからはじめなきゃ駄目だね。

帝国歴478年1月8日

オーディン 帝国軍士官学校  
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

新年最初の授業が終わった、人の噂も七十五日と過去の偉人は言ったそうだが其れは嘘だと断言できる。既に1年半経つが未だに思いついたくもないあの事件の為に親衛隊からは目の敵にされ、女どもからも敬遠されまくっているのだから堪らん状態だ。マールバッハの伯父も相変わらず無茶振りをしてくるし、最近はこの娘俺の従妹に当たるリヒャルダと結婚させ跡継ぎにしようと企んでいるらしい。皇帝陛下の愛娘の皇女殿下の覚え目出度い若手士官としての名声を望んでいるようだ。

冗談じゃないあの娘のお陰で散々だったんだ、あれは俺にとっての疫病神だ災厄の女王と言っても良いだろう、あと半年か早く卒業したい卒業して一刻も早くオーディンから離れたい離れるんだ！！

第十九話 ロリとの遭遇（前書き）

続きは第二十話です。

これから仕事行ってきます。

## 第十九話　ロリとの遭遇

帝国歴478年1月14日

オーディン　　グリーンメルスハウゼン子爵邸  
フォンゴールデンバウム  
テレーゼ・

グリーンメルス爺様との会談から、一週間待ちに待ちましたいよいよ今日から爺さん達と悪巧みの開始です。

爺様の館へ向かうといつもの小部屋へ案内されました。相変わらずの日向ぼっこ提督とはとても言えないシャッキリした姿勢で迎えてくれます。

「テレーゼ様よくお越し下さいました」

「グリーンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

爺様は考えながら一言。

「グリーンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレーゼ様何か呼び方がありますかな？」

ふむ頭の回転とかも試されていますね流石です。パット考え。

「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？  
爺様目を細めて。」

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」

「よろしく願いますね、アウリス殿」

「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」

「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

爺様はふむふむと満足そうにうなずいている。

「判りました私がテレーゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」

ニヤニヤしてますね、ものすごく楽しそうだ。

「はいよろしくお願ひします、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」

「流石に其れはご勘弁を」

「駄目ですか」

「其処までは儂が持ちませんわ」

「判りました其れはあきらめます」

「御意」

「御意も止めましょう、はいか判りましたで良いでしょう」

「判りました」

爺様も納得してくれたらしく、終始にこやかに進みますね。

爺様が身を正して真剣な顔をして此方へ向かい直した。

「テレゼ様先週頼まれました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民250億の中からですから中々調べが進みません」

「其れはそうですね其処まで無茶は申しません」

嬉しそうですね又試しましたが、食えない爺様ですね、まあ其れが其れで楽しいんですがね。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞニヤニヤしてますね、判りますよ金と赤でしょ、判つてて言ってるな、けど金は知ってるが赤は知らないふりをしないとね。」

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミユッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミユッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」

「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」

全く危険物を使いこなせと言うのですかね、いやからかってるんで

すね、ニヤニヤ。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目あの顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。」

今は様子見で良いでしょう父様の様にね」  
爺様其処までと言う顔をしてみるね、爺様クルーじゃなきや駄目だよフフ。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせておきますので、その者呼んで宜しいでしょうか」

「無論ですその様にご苦労して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」

「判りました」

そうすると爺様はインターホンで誰かを呼んでます、暫くするとノックがされて20代中盤ぐらいの士官が入ってきました。

「閣下ケスラー大尉入ります」

「うむ、ケスラー大尉よう来た、テレーゼ皇女殿下じゃ、殿下私の部下で取り纏めをしているケスラーと申します、ケスラー皇女殿下にご挨拶を」

おい来ましたよーケスラーです、ロリですよロリとの遭遇ですよ、ケスラーにしては私はドストライクゾーンです。

「皇女殿下ご尊顔を賜り恐悦至極で御座います、小官グリーンメルスハウゼン閣下にお仕えする、ウルリツヒ・ケスラー大尉と申します。元来平民たる臣が皇女殿下に直接ご挨拶するなど不敬の極みで御座いますが平にご容赦をお願いいたします」



なるほど爺様ケスラーも出汁に使ってるな。ケスラーも気の毒に此処は助けてあげましょう、私の中ではケスラーの信頼度凄く高いから、仲良くしたいいね。

「ケスラー大尉その様にかしこまらなくても構いません、私達は同士です皇族、貴族、平民の差など何がありません。同じ赤い血の流れた人間じゃないですか、そんなへりくだった挨拶は無用ですよ。私のことはテレゼで良いですよ」

ケスラー驚いてますそりやそうだよね、六歳児の言うことじゃないし。

「その様な恐れ多いことを」

「返って敬語を使われる方が気になりますよ」

「ケスラーよテレゼ様が良いとっしゃっておるのじゃテレゼ様とお呼びすればよい」

「御意」

「じゃあ改めてケスラー大尉テレゼ・フォン・ゴールデンバウムです此からよろしく願いますね」

「テレゼ様ウルリツヒ・ケスラー大尉と申します、此よりテレゼ様にお仕えし足します、どうぞよろしく願います」

「よいの此で顔合わせは終了じゃな。早速話し合いに入るかの」

「よろしく願いますね」

「判りました」

「ケスラー資料を」

「御意」

## 第二十話 人材収集計画

帝国歴478年1月14日

オーディン     グリーンメルスハウゼン子爵邸     リヒャルト・  
フォン・グリーンメルスハウゼン

テレゼ様が本日いらっしゃる、どの様におもてなしするか楽しみじゃな。  
いらっしゃったようじゃ、シャキツとした姿勢と眼光でお迎えじやな。

「テレゼ様よくお越し下さいました」

「グリーンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

ほうほう驚かな、流石じゃちと試してみるかの。

「グリーンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレゼ様何か呼び方がありますかな？」

「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？」  
ほう速攻で返した来たのしかもラテン語とは流石じゃ。

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」

「よろしく願いますね、アウリス殿」

「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」

「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

立派じゃな師を尊ぶ心、普通はとても出せん。

「判りました私がテレゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」

嬉しくてついつい顔にできてしまうの。

「はいよろしくお願いします、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」

さて本題に入るかの。

「テレーゼ様先週頼まりました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民250億の中からですから中々調べが進みません」

「其れはそうです其処まで無茶は申しません」

やはりちゃんと判つてらっしゃる、人材としてあの者の話をして見るかの一度お会いしておるし、どの程度の人物眼があるかの。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞ」

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミユッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミユッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」

テレーゼ様すつとぼけておりますな。

「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」

ニヤツとしましたな判つてらっしゃる。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目の顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。

能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。

今は様子見で良いでしょう父様の様にね」

ほう僅かな会見で此処まで人物鑑定をするとは、儂でもかなわんなそろそろケスラーを呼ぶかの。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせてお

りますので、その者を呼んで宜しいでしょうか」

「無論ですその様にご苦労して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」

受け答えも完璧じゃな、しかもケスラーに対しての受け答えも皇族貴族平民の身分差も考慮しない大らかさ、此こそ王者のカリスマじやものすごく楽しみになってきたの。

オーディン                      グリンメルスハウゼン子爵邸                      ウルリッ

ヒ・ケスラー

初めて皇女殿下にお会いし驚いた6歳なのにあの威厳カリスマ聡明さまが楽しみな女傑と成るはずだ、私がへりくだって挨拶したとき、同士だからと名前で呼んでくれと言われ驚いた。

しかも身分に躊躇しない大胆さ此は本物だ、これほど嬉しいことはないだろうこれからが楽しみだ。  
閣下と共にお仕えに足るお方だ。

オーディン                      グリンメルスハウゼン子爵邸

「さて其れでは今回の趣旨を説明します。

此から数年をかけて銀河帝国の病巣を取り除く外科手術と考えて下さい。

その為の優秀な人材がまず必要となります。

そこで人材のリスト作成をお願いします」

「諒解しました」

「まず忠誠心な厚い優秀な軍人を此は宇宙艦隊司令官候補、幕僚参

謀候補に当てる艦隊派。

的確な作戦を立てられる作戦派。

補給担当、後方支援等の後方派。

陸戦部隊。

また現在の技術部主流から外れた外された所謂勢力争いで負けた組などから優秀な人材を密かに秘密研究所へ移転させる。

帝国内、叛徒内、フェザーン内に作るスパイ組織の構成員。

政治に関しては、今までの政治に囚われない斬新な政策を考えられる者。

社会整備、インフラ、流通、経済等に詳しい者。

尚門閥貴族の紐付きではなく出来る限り下級貴族平民等から人材を集めてる。

こんな所ですね」

爺様もケスラーも驚いていますね。とても六歳児が考える物じゃないと、仕方がないですよ死にたくないですから、このまま座していればラインハルトに滅ぼされる可能性が大きいのですから。

爺さんとケスラーが頷き有ってから返事が来たね。

「テレーゼ様のご指摘誠に理にかなっております、全力をかけて行動に移します」

「よろしく願いますね」

「判りました」

「其れでは私の方も色々な所を廻り此と思う人材をピックアップします」

「その者達の調査はお任せあれ」

「其れでは失礼するわね」

「はっお気御付けてお帰り下さい」



第二十一話 黒いテレゼ（前書き）

黒いテレゼ 参上です

## 第二十一話 黒いテレエ

帝国歴478年4月12日

オーディン            グリンメルスハウゼン子爵邸            テレエ  
ゼ・フォン・ゴールデンバウム

秘密会議開始から4ヶ月日々精進の毎日です。

2月の誕生日は去年のような派手な物ではなく知り合いを招待して行いましたよ、我ら6人衆母娘にマグダ姐さん母娘、ヒルダ姉さん母娘とか若干名です、だってフレীগエルなんか来たら嫌じゃないですか。

そんな訳で男子禁制状態でパーティーしましたよ。

最近お母様はスツカリ落ち着かれて、にこやかで子煩悩なお母さん状態です。

原作やOVA板のベネミュンデ侯爵夫人と全く別人状態ですよ。お父様もよくおいでになり一緒にオペラ鑑賞とかに出かけていきます。

まあOVAで見てもお父様はお母様を巻き込みたくない為に疎遠にしていた訳ですから、巻き込む心配が無くなりつつあるので安心してきているでしょうね。

逆にアンネローゼへのお渡りが非常に少なく宮廷では無理矢理押し付けられたから気に入らないと言う噂がまことしやかに流れていきます。

アンネローゼが可哀想に感じましたね、きっとラインハルトは怒り心頭でしょうね。

姉上を奪った上に馬鹿にしていると。益々憎悪が増えそうです。



へたすれば、ベーネミュンデ侯爵夫人事件じゃなくグリユーネワルト伯爵夫人事件が起こるかも知れないですね。

アンネローゼがしなくても、お付きの者が暴発するかも知れない。そんなことはさせませんがね。

毎日お勉強と悪巧みと各種行事に参加とか大変です、お友達や姐さん達との付き合いも非常に大事ですから、なんと言っても癒されません。特にエルちゃんが可愛いです萌えますよ。

ともかくオーバークですけど死にたくないので頑張ってます。どongoのニート侍の【働きたくないでござる】じゃなく死にたくないでござるですね。

7月には士官学校の卒業式に行く予定を立てています、待ってるよロイエンタールふふふ。

9月か10月ぐらいに同盟軍がイゼルローンへ侵攻する可能性があるのでその対策も立てねば行けないところです。

そして今日も定期連絡会で、爺様とケスラーとで話し合いです。相変わらず爺様はニコニコ、ケスラーは考えてる顔です。

まずは爺様が切り出して。

「テレーゼ様今回の趣旨はいかがしますかの」

「まず、技術的計画を述べますので後で照査して下さい。なお此から述べる計画は研究所が出来た段階で行う予定です。研究所ですが明からさまに研究所としたらばれますのでダミーを作ります。」

「テレーゼ様なぜ即在の技術部では駄目なのですか」

ケスラー其処が肝心だよね。

「言ってみれば現在の技術部はシャフト大将の独壇場です。」

シャフト大将が優秀ならば構わないのですが彼は政治力で今の地位を築いたそうです。

さらに自分の地位を脅かす可能性のある人物を地方や前線に飛ばし自分の子分やイエスマン自分より劣る者で技術部を固めています。其れでは研究が出来ませんし横やりが入る可能性が多きく情報漏れが懸念されます」

「確かにシャフト大将には良い噂は聞きませんな」

「さようじゃの」

「そこで秘密研究所です。研究所は地方星域の僻地に作り例えば軍用缶詰工場とかに化けさせます、其処へ当該者達を職員として配置し研究させます、こうすればシャフト達は左遷されたと考えるでしょう」

「いい手ですね」

「そこで研究して貰うのは次のような事です」  
ケスラーメモを取ってますね。

「第一に叛徒の戦艦か巡航艦を数隻捕獲し艦の運行用ソフトを解析しそのデーターを我が軍の物と比べて下さい、此は敵の方が運行用ソフトの出来が良いとの噂が有る為です」

実際同盟軍のソフトの方が優れてるんだよね。

「第二にそれに関するのですが艦船の自動操縦システムの強化と自動砲撃システムの開発です」

「それはどう言うことで？」

「まあ敵に突っ込ませるってかんじですかね」

シトレがイゼルローンに無人艦突っ込ませたしね此方もお返しで。

「あとは気がついたら追々研究目標に入れていきましょう」

「判りました」  
爺様とケスラーも頷いてます。

「今度は人口についてです。取りあえず質問は後でまとめて答えますのでよろしく。」

まず政治犯及び共和主義者の大まかな罪状及び人数、教育程度、思想的な過激度、労働条件、家族、健康状態そしてどの星系のどの星に何人居るか、その星の宇宙港へ何日で集められるか。  
その星からイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごと位に資料を集めて下さい」

「次に殺人、強姦、重過失傷害、放火等の重犯罪者のリストと収監されている監獄そして集めてイゼルローンまで何日で到着するかを同じく三年ごとに資料を集めて下さい」

「次に叛徒から連れてきて農奴と成っている者達の居場所、そして同じくイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごとに資料を集めて下さい」

「また叛徒軍俘虜の収容所と其処にいる人数及び待遇そしてイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごとに資料を集めて下さい。取りあえずは以上ですね」

2人とも不思議がってますね。ケスラーが質問してきますね。

「テレゼ様資料集めは可能ですが、何に利用なさるのですか？」  
秘中の秘なので今は未だ言えないからお茶を濁しておきますか。

「いずれ叛徒共との戦いと我が軍の捕虜に関しての手に使おうんですよ」

「そうですね」

「それと我が軍の捕虜達がどこで何をしているか、待遇等はどんな

のかを調べて下さい、我が国は捕虜に優しくありませんから【生き  
て虜囚の恥を知り死して虜囚の恥を知らず】ですから彼らに慰問袋  
を送りたいんですよ、頑張つて下さい決して見捨てませんと勇気を  
与えたいんです」

「テレーゼ様なんとお優しいことを」

いや気の毒なものも有るんだけど、絶望の淵にある捕虜達が後々ライ  
ンハルトによつて帰国できるんだけど、その時少しでもラインハル  
トに着く人間を減らしたいのも有るんだよね。

それにエコニア捕虜収容所じゃ不正が行われていたからね、慰問袋  
に入れる予定の品物もピンハネするんじゃないかと、そうすれば同  
盟の捕虜虐待の証拠になるじゃん。

「所でこの組織の資金源を考えたんですが、吝嗇だつたお爺さまの  
貯めた資金じゃ無いんですか？」

爺様一寸驚いたなビンゴか。

「お爺さまが山ほど蓄えた資金でお父様が帝位継いだとき財政赤字  
が綺麗に無くなつたそうですよね。

そのあと相当余つた資金を、お父様は遊興や建物建築等で使い果た  
したと聞いておりますが、其れ嘘でしょ？」

「はっ気づかれましたか、流石でございますな、その通りです。相  
当量を増して請求しましてな、その水増し分を元に色々増やして  
きました」

「では研究所とかの資金も大丈夫ですね」

「国家予算の数十倍の資金はあります」

「なるほどね」

推理が当たつたね。

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒヤルト・  
フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様がお帰りになったあとケスラーと今日のことを話し合っ  
た。

「テレーゼ様の勘の良さとアイデアは誠に驚くことばかりじゃ」

「まことに、資金源の事など推測で当ててしまいましたから」

「そうよなあ時は些か慌てたわ」

「技術に関しての造形やシャフトの危うさなども優れた観測です」

「ふむそうじやの捕虜に関する御優しさも好ましいの」

「まことに捕虜もそうですが、判らないのは政治犯等ですね」

「ほんに判らんの、叛徒との戦いで何に使うのやら」

「テレーゼ様の事です考えが有つてのことでしょう」

「そうじやの」

「ケスラー今日のご苦労であった」

「御意」

第二十一話 黒いテレゼ（後書き）

【G夫人がB夫人に害意を抱いている】て匿名の手紙が届いたりしてw

**第二十二話 みんなで企めば怖くない！（前書き）**

卒業式は二十三話になりました。

## 第二十二話 みんなで企めば怖くない！

帝国歴478年5月10日

オーディン     グリーンメルスハウゼン子爵邸  
フォン・ゴールデンバウム                     テレーゼ・

本日も連絡会議、結構頻繁に此処へ来ると怪しまれるのでアリバイ作りが大変な今日この頃です。

いつものように爺様とケスラーが見守る中答弁開始です。

「テレーゼ様前回ご依頼を受けました研究所の件ですが来年度予算に潜り込ませる様に手配をしました」

「ご苦労様です。これで何とかかなりそうですね。」

所で叛徒には選挙という物があるそうですね、その時は叛徒が好戦的になるとか、以前の資料を見たのですがどうやら今年がその年に当たるようです」

ケスラーが気付いたみたいですね。

「確かにその様な行動パターンが以前言われたことがありましたな。調べてみる価値はありそうですね。警戒しその兆候があるなら迎撃の準備をしないとだめですね」

「お父様や軍部への根回しはよろしくお願いしますね。今はまだ他人に正体をさらすことは避けたいですからね」

「たしかのそうじゃのテレーゼ様のお姿は晒してはならんの、儂が陛下にお伝えしよう」

「では軍部のほうが小官が手配りいたします」



「あとですね、このことを余り広く知られると叛徒やその様な確率を信じていない方々がなにやら騒ぎ出す可能性があるので、必要最小限でお願いします」

「確かにそうです」

「そうじゃの」

「あとですね、この館に士官学校に有るような戦術シミュレーターを置けませんか？」

「なにをなさるのですかな」

「色々閃いた戦法があるので実際に試してみたいのですよ」

「ほう其れは楽しみですな。ケスラー準備出来るかの？」

「備品の発注が終わっていますので今年中に配備するのは疑念を呼びます。」

「申し訳ございませんが、来年であれば損耗分として潜り込ませられます」

「仕方有りませんね。それでは来年まで我慢しましょう、其れまではアイデアとして暖めて置きます」

ケスラーが本当に申し訳なさそうに頭を下げます。

「あと優秀な人材を発見しました」

「ほうテレーゼ様のお眼鏡に叶う相手がありましたか」

「どの様な人材ですか」

2人とも興味津々です。

「今年士官学校を卒業する生徒ですが、オスカー・フォン・ロイエンタール、フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト、アウグスト・ザムエル・ワールンが二年前に士官学校へ視察を行ったとき優秀な人材かと思いました」

「なるほど、では早速三名を調べましょう」

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒャルト・  
フォン・グリンメルスハウゼン

「相変わらずテレゼ様には驚かさせられるばかりじゃの」  
「まことに」

「叛徒の攻勢の件頼んだぞ」  
「御意」

帝国歴478年5月19日

オーディン      ノイエ・サンスーシ      小部屋      テレ  
ゼ・フォン・ゴールドンバウム

今日はお父様をお願いしに来ました。お父様は終始にこやかです。  
「テレゼやグリンメルスより聞いたが、可能性が高いのじゃな」  
「はいお父様過去のデータを照査した結果かなりの確率で攻撃が  
来ます」

お父様考えながら。

「そうかでは軍に準備命令を出さねば成らん、しかし外れた場合  
はどうするのじゃ」

「一つの案なのですが、迎撃艦隊に今期卒業の新規士官を研修とし  
て乗せて遠洋航海とすれば幾らでも準備が出来ます」

「つまりは迎撃艦隊は無く訓練艦隊だとして敵を欺くのか」

「そうです。敵と予算と信じない者達を欺きます」

お父様楽しそうです、普段の枯れた雰囲気から目が鋭くなりますね。  
流石我が師匠、天下第一の猫かぶりですね。

「その為に卒業生を遠洋航海に出かけさせる様に勅命を出して頂きたいのですよ、前例がないので現場が渋ると思つのです」

「父も使うかテレエはハハハ」

お父様凄く楽しそうです。

「ええ東洋の諺に【立つてる者は親でも使えと】というのがありませんから、お父様もお願ひしますね」

「よいよい儂は娘には甘いのじゃからなハハハ」

「それとお父様、士官学校の卒業式に参加したいのですが良いでしょうか？」

「よいよいどうゆう気じゃな？」

「士官学校に顔を出しておきたいのと、今年度卒業生に原石が居るんですよ」

「ほほ其れはあの時優勝した者かの？」

「はいあの者も入っていますですが他にも居りますので」

「よいよい行ってまいるがよい、エーレンベルクには儂が伝えておこう」

「お父様、ありがとうございます」

オーディン      ノイエ・サンスーシ      小部屋      フリー

ドリヒ四世

本日娘がお願いに来た、儂は娘が可愛くてしょうがないからの。グリーンメルスの言っておった同盟の事じゃった。

聞くごとに此はと思ふ事ばかりじゃった。

弱冠七歳でこの知謀じゃ儂など足元にも及ばん、儂は逃げて居ったからな。

彼の者に会って儂の願ひを叶えてくれると思つたが、それ以上の資

質じゃ。

今は只テレゼが僕の期待じゃ、彼の者には悪いがテレゼの礎に成ってもらおうかの。

テレゼが彼の者をどう扱うか楽しみじゃ、其れまでは彼の者の行動は目を瞑る事にしようぞ。

さて近いうちに三長官を呼んで指示しなければならぬな、これは楽しみじゃな。

帝国歴478年5月28日

オーディン　　格林メルスハウゼン子爵邸  
ゼ・フォン・ゴールデンバウム

テレー

ロイエンタール卒業まで一ヶ月一寸となりました。

まずはケスラーが3人の調査をしてきたそうです。

「テレゼ様3人の調査を致しましたが、ビットンフェルト、ワーレンは素行問題等は有りません。

些かビットンフェルトが口が悪く短気なところをのぞけばですが。ワーレンに関しては非常に優秀です冷静沈着ですし。

しかしロイエンタールは素行が悪すぎます、女癖が悪く何度もトラブル等を起こしています。

あのような者が良いのでしょうか？」

「ケスラー確かに女癖が悪いのは良くないですが其れを上回る資質が有るのでから、一概に切り捨てることはしないですよ」

ケスラー本気で心配してるみたいだね。

「しかしです。あの者の噂ではロリエントールと呼ばれており、恐れ多くもテレゼ様の唇を奪ったと言うではないですか。その様な不埒で不敬な者をテレゼ様のおそばに置く訳にはいきません」

「ああその噂ですか、それは武術優勝のご褒美にほつぺたに軽くキスしただけですよ。」

其処まで噂が大きくなっていたとは、ビックリですよ。」

クッククックワーハツハ。ロリエントールだつて可笑しいー吹き出しちゃうよ！

ケスラーが怪訝な顔するまえに我慢我慢、家帰ってから笑おう。

「そうですかしかし士官学校ではロリエントール事件として有名だそうです。」

今年の入校式にテレゼ様が呼ばれなかったのはその為だそうです。「なるほど迷惑をかけた訳ですね、しかしどんな事件なのですか？」

「テレゼ様言い難いのですが、テレゼ様が士官学校へお行かれた時余りの可愛さに生徒達がファンクラブを創立したのです。」

その総数は全校生徒の八割という状態になりました。

およそ16000人です、その時テレゼ様がロリエントールにキスをしたと行うことで学校中が彼に嫉妬し大騒ぎと成ったのです。

それ以来彼はロリエントールと言われているのです。」

うわー気の毒ですね、ロリエントールだからかパーティーで余所余所しかつたのは、けど女の敵には少しは反省して貰った方が良かったと言つことにしましょう。」

「けど能力に問題無ければ良いのですよ、追々修正していけば良い訳ですよ。」

「士官学校の評判ではテレゼ様の侍従武官と云う噂が流れております。」

「良いんじゃない噂は噂で、その時にならないと決めませんよ。」  
本当は決めてるんだけどね。

「ケスラーご苦労様です」

「御意」

「御意はいいのに」

「はっ」

第二十二話 みんなで企めば怖くない！（後書き）

卒業式書こうとしたらそこまで行けませんでした。

**第二十三話 軍務尚書のお仕事（前書き）**

すみません、卒業式がなかなか来ません。二十四話こそ卒業式に。



## 第二十三話 軍務尚書のお仕事

帝国歴478年5月21日

オーデイン    ノイエ・サンスーシ    謁見室    ハーロル  
ト・フォン・エーレンベルク

皇帝陛下がお呼びとの事ゆえ参内すると国務尚書と余り仲の良くない同僚達も参内していた。

国務尚書リヒテンラーデ侯は相変わらずの苦虫をかみつぶしたような顔をしている。

宇宙艦隊司令長官ベヒトルスハイムは元帥杖を持つ手が落ち着かない様子であり。

統帥本部長のシュタインホフは相変わらず捉え所のない顔をしながらなにやら考えてるように見える。

暫く待つと陛下がご登場なされたため、全員で挨拶をし陛下からお言葉があった。

陛下は深刻に話し始められた。

其れは今年中に叛徒共がイゼルローンへ侵攻する可能性が有ることであった、陛下なりに情報をどこからか手に入れたらしいが、シュタインホフの情報部からであろうか？

嫌違うなシュタインホフも初耳の様な驚きをしている。

ベヒトルスハイムが『恐れ多いながら可能性だけで軍を動かさせません』と言うと、

陛下が『それならば新規士官を研修するために遠洋航海という形で軍の準備をするが良い』と仰った。

なるほど良い考えだ此なら叛徒にも悟られずに準備が出来よう、陛下も旨いことを考える物だ。

最近の陛下は以前と比べて精力的に成られている。

以前ならば二日酔いで謁見しておられた物だがいまは確りと謁見しておられるのだから。

お変わりに成られたのは、グリユーネワルト伯爵夫人が寵姫に成られてからであるから、伯爵夫人の何かしらの影響なのだろう。

シュタインホフにはイゼルローンでの作戦の立案をご命令成された。

自分の番になり、陛下より『今年度卒業生は従来のような一年間デスクワークではなく半年間はイゼルローンへ配置し戦場の息吹に曝すようにいたせ、成績優秀者は旗艦に乗せ研修させるよう』勅命を受けた。

その後『今度の士官学校卒業式にテレゼが出たいと言っておるから頼むぞ』と仰られたのです。

皇太子殿下ならば緊張もするが。テレゼ様は何度かお会いし何度も話し、ブリギッテとも仲の良いお方であるし過度の心配はないでしょうな。

皇帝陛下は我らに『叛徒共やフェザーンに知られぬように防諜を確實な物として準備せよ』と仰った。

此には我らも驚きの表情をしてみましたわい。

シュタインホフが口を開けて目を見開く姿は滑稽であった。

陛下はお変わりつつあるという感覚を持ち、自身の職責を益々精進する気になったのが今日という日であった。

帝国歴478年6月15日

オーデイン 軍務省

軍務尚書室

八一

ロルト・フォン・エーレンベルク

陛下との謁見から早三週間我々は急ピッチで準備を続けていた。新規任官士官5078人の辞令準備やイゼルローン要塞における配備場所への準備を宇宙艦隊総司令部とやりとりしながら行ってきた。

練習艦隊がオーデインを発つのが7月10日であるから大変なことであるがやりがいのある仕事だが、この種類の量は何とかならんだろうか。ここ一週間は判子押しばかりしている。

面倒だからと適当には押せんしいい加減疲れてくる物だ。

ベヒトルスハイムやシュタインホフはある程度部下に丸投げ出来るが僕はできんからな仕方のないことだ。

此で叛徒共が来なければ、内容を知らずに残業の連続の部下達から文句が続出するだろう。

この状態では士官学校の卒業式は軍務次官代理をさせテレーゼ様をエスコートさせねばならんな。

帝国歴478年7月8日

オーデイン 軍務省

軍務尚書室

八一

ロルト・フォン・エーレンベルク

取りあえず早朝から士官学校の入校式だけは参加し訓辞を述べてきたが、疲れから貴賓席で居眠りしてしまった。

先ほどシュタインホフから情報部が叛徒共のイゼルローン攻撃を

察知したとの連絡があった。

彼奴も役に立つときがあるのだな。

これで今までしてきた苦勞が報われる、部下達も納得してくれるだろう。明後日は出撃だし肩の荷がやっと下りた気がする。

此から先は、ベヒトルスハイムと艦隊司令ミュッケンベルガーとイゼルローンの連中の仕事だ。

12日は久しぶりにブリギッテと何処かへ出かけるとしよう、どこがよいであろうかの。



オーデイン 帝国軍士官学校  
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

さあ待ちに待った卒業だ！此でオーデインから離れられる。  
あの伯父が俺を悪魔デーゼの侍従武官に出来るように運動したらしいがそんなことはさせんよ。

校長に直訴して帝国の為に前線勤務を願いだしたら、校長は非常に満  
足げに頷いていた。

万が一近衛や侍従武官の辞令が来るなら任官拒否して実家経営の鉞  
山へ住み込むつもりだ。

俺ながらウキウキとしながら講堂で式典が始まる前に今回は軍務尚  
書は用事で来れないらしく、次官が来ると話が伝わってきた。

そして式典が始まり列席者が紹介されたとき、俺は悪魔を見た！  
奴だ奴が居る、なぜ此処にいる！

悪魔デーゼの姿を見た同期達は一齐に拍手を行いはじめた。

まあ良いだろう、彼処に座っている限りは俺には関係ないのだから。  
式典が始まり上位10人まで恩賜の短剣を授与される事に成ってい  
るが、事もあろうにあの悪魔が授与するらしい。

俺は目の前が暗くなった何故なら俺はクラスヘッドだったのだ！

俺はそのまま腹痛で逃げようとしたくらいだ。

俺たちが一人一人呼ばれ短剣を授与される、悪魔の前に立ち短剣を  
渡された。

にこりとして『おめでとうございます』とごく普通に言われてホッ  
とした。

式典が終わるまでは何か仕掛けてくるのではないかと思いつながらビ  
クビクしていたが何もなかった。

しかしである、なぜか式典が終わり謝恩会でヒッテンフェルト鶏冠頭やワーレン達と話していたとき、

後輩達が俺を卒業記念だと無理矢理連れ出し胴上げを始めたのだ、そのまま会場から担ぎ出されて胴上げされ、口々にテレーゼ様の侍従武官、テレーゼ様の侍従武官と念仏のように唱え始めた。

やばいと感じたがヒッテンフェルト鶏冠頭やワーレン達は笑うばかりで助けてもくれん。

友達がいない奴らだ。

そして30回にも及ぶ胴上げをしまくられたあげく最後にプールへ叩き込まれたのだ！

俺が何をしたと言っんだ、あれは悪魔じゃない魔王だ！

オーディン 帝国軍士官学校  
ビッテンフェルト

フリッツ・ヨーゼフ・

いよいよ卒業だ、長いようで短い4年間だった、しかし面白い奴らと出会えて良かったと思っている、  
ロイエンタールの女癖の悪さには驚いたが、  
テレーゼ様の一件以来大人しくなったからな。  
良い経験だったのだろう。

さてどこへ配属されるやら楽しみだ。

式典にはテレーゼ様のご臨席だった、クラストップ10人が短剣を授与されるらしいが俺はぎりぎり10番だった為、頂けることとなつた。

テレーゼ様から物を貰うのは2度目だが2年経ってお美しく成られ

た物だ。

俺に授与される時、『ビットンフェルト皇帝陛下為に尽くして下さい』と言われたがテレゼ様になら尽くしたいと思うのは不敬であるつか。

まあこれで益々ファンになってしまっな。

謝恩会でロイエンタールがファンクラブに拉致されプールに落とされた、笑っちまった。

オーディン 帝国軍士官学校  
ワーレン

アウグスト・ザムエル・

待ちに待った卒業式、卒業したらリーザと結婚だ。新婚旅行はクロイツナハ？へ行くかな何よりも楽しみだ。  
式典にはテレゼ様ご臨席だった、クラストップ10人が短剣を授与されるそうで俺は5位だから授与された。

あのハンカチ以来の再会であったが、テレゼ様は俺のことを良く覚えていらっしやった。

『ワーレン格闘術は上達しましたか、皇帝陛下に尽くして下さい』と言われた。

しかしテレゼ様が俺のことを覚えてくれていた事に感動を覚えた。  
謝恩会の途中でロイエンタールが下級生に胴上げされながらプールに落とされた時は笑った。

オーディン 帝国軍士官学校

アントン・フェルナー



「あのお方がテレエゼ様か」  
ギョウターが言う

「可愛い方ですね」  
ミユラーが言う

テレエゼ様を直接見るのは今日が初めて先輩方から聞かされた話を  
噂半分に聞いていたが、100パーセントだったとは驚いた。  
なるほど人気が出る訳だ、あの顔あの気品あの優雅さ。  
これで我々のクラスメイトからもファンが出来るな。  
俺たちはどうなるか判らんが。

**第二十五話 脱出！いいえ放流です（前書き）**

第二十六話 第四次イゼルローン攻防戦が未だ書けないのに、第2

7〜29話が完成している。

26話を一時飛ばして掲載しようか考え中。

## 第二十五話 脱出！いいえ放流です

帝国歴478年 7月10日

オーデイン 宇宙艦隊第2宇宙港  
ロイエンタール

オスカー・フォン・

俺は今日ほど軍務省、統帥本部、宇宙艦隊司令本部そして叛徒共に感謝することはないだろう。

あの魔王<sup>デレーゼ</sup>から俺を救ってくれたのだから。大神オーデインよ今日ほど貴方に感謝したことはない。

思えば二年前新学期に調子に乗り武術授業で優勝したのがケチの付き始めだった。

今日の惨状を思えばあの時、<sup>トビ</sup>鶏冠頭に負けていれば良かったのだ。今更思うが一生の不覚だ。

翌年の新学期は校長とシユターデン教官の尽力で魔王が来ないと知ったときは、2人に感謝したものだ。

所が魔王は卒業式にやって来た、目の前が暗くなった何故なら俺はクラスヘッドだったのだ！

魔王が恩賜の短剣授与をすると聞いたとき、俺はそのまま腹痛で逃げようとしたくらいだ。

配属先は士官学校の下馬評で魔王の侍従武官という話がまことしやかに流れたため、卒業式に無理矢理校庭に連れ出され30回にも及ぶ胴上げをしまくられたあげく最後にプールへ叩き込まれたのだ！あの伯父も侍従武官に成るようにと運動し始めたが、俺自身が宇宙艦隊に配属されなければ任官拒否して実家経営の鉾山に住み着くと我を通しまくった。

危ういところであったが、叛乱軍がイゼルローンへ侵攻するとの情報が入り、宇宙艦隊司令本部、軍務省、統帥本部で新規卒業士官の艦隊による研修が決まり成績優秀者は例外なく全員旗艦に乗艦するように決まったのである。

此で最低でも4ヶ月は魔王から逃れられるし、イゼルローンなら女共も噂は知らんだろう。

エーレンベルク元帥、シュタインホフ元帥、ベヒトルスハイム元帥そして叛徒の指導者よ。

ありがとう本当にありがとう！

オーディン 宇宙艦隊第2宇宙港

フリッツ・ヨーゼ

フ・ビッテンフェルト

いやー良かった任官直後に仮配置とは言え宇宙艦隊旗艦に配属とは嬉しい限りだ。

本来なら新規士官は一年間デスクワークと言うのがこの所のパターンだったからな、はつきり言って俺は机に向かうのが苦手だデスクワークなんぞ、やってられるか！

所が叛乱軍のイゼルローン攻撃が有るからと旗艦勤務だ、いやはや楽しみだ。

ロイエンタールも奴らしくない機嫌の良さだな。

オーディン 宇宙艦隊第2宇宙港

アウグスト・ザム

エル・ワーレン

今回いきなりの出陣に驚いた。

本来なら一年はデスクワークでゆっくり出来ると思ったのだが当て

が外れた事に成る、リーザとの新婚旅行も暫くはお預けだ、早く帰れば良いが叛乱軍めこんな時に攻めてくるな！

オーデイン 宇宙艦隊第2宇宙港

近日中にイゼルローンに叛徒共が大規模侵攻を行う可能性大と情報部及びフェザーンなどの情報によりイゼルローンへの増援部隊の派遣が始まった。

指揮官はグレゴール・フォン・ミュッケンベルガー大将、艦艇15500隻、兵員163万9000名である。

その艦隊の中に478年度士官学校卒業生達が配属されていた。本来ならば一年間はデスクワークすることが普通であるが成績優秀者に戦闘を感じさせるまたとない機会として旗艦勤務として上位20人が辞令を受けた。又その他卒業生もイゼルローンにて戦場の空気を感ずる物として派遣される事が決まった。

そして旗艦配置の卒業生の中にオスカー・フォン・ロイエンタール、アウグスト・ザムエル・ワーレン、フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトの3名も居た。

「おうロイエンタール今回の出兵で艦隊戦はあるかな？」

一人うきうきするビッテンフェルト。

「どうだか判らんが出陣は良い物だ」

なぜかホツとしにやけるロイエンタール。

「相手が居ることだ、こちらの都合では動いてくれまえ」

一寸憚然な態度のワーレン。

「其れはそうだがワーレン、出来ればドカーンとでかいのを見てみたいじゃないか」

「花火では有るまいしそう簡単にはいかんよ」

「ロイエンタールの言う通りだな」

「そんなもんか、つまらん」

「そろそろ出発だビットェンフェルト置いていくぞ」

「ああ置いていくか」

「ちっ判った」

オーデイン      グリンメルスハウゼン子爵邸

「テレーゼ様ロイエンタール達を武官就任させず前線へ向かわして宜しかったのですか？」

ケスラーが新規士官の書類を見せながら聞いてくる。

「いいのよ、私の武官としたり近衛にしたら、宇宙の気を吸えないでしょ。」

実戦経験が無いと頭でっかちの養殖物に成ってしまうわ、今必要なのは天然物の人材なのよ。

シユターデンみたいに理屈だけの単細胞馬鹿は御しがたいでしょ。

それじゃ駄目なんだよね実戦で鍛えた技と勘が必要でしょう」

「其れで敢えて前線へ送るように陛下の勅命まで頂いたのですか？ケスラーその位で驚いては駄目だよ。」

「今回は成績優秀者は旗艦で仕事その他はイゼルローン内で見学つて形に命令してるから、戦場の気を知るには一番だと思ってるね、所謂社会科見学ですよ」

「つまりはテレーゼ様の手の内で踊っているよ」

「悪辣かも知れないけど、こうでもしないと駄目なのよ。」

「敢えて心を鬼にして千尋の谷に突き落とすのよね」

「そう言うお気持ちでしたか」

「そそ。半年後に帰投するから其れから本番ですね」

「諒解しました」

第二十五話 脱出！いいえ放流です（後書き）

台詞を改訂



## 第二十六話 復活のロイエンタール（前書き）

第四次イゼルローン攻防戦が未だ書けないのに、書けたのはエル・ファシルの英雄です。

最後に増補しました。

## 第二十六話 復活のロイエンタール

帝国歴478年9月1日

イゼルローン要塞  
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

やっとオーデインを出立しホツとした。

最初のワープを抜けたとき此ほど安堵した事は無かった。

もう魔王<sup>テレーゼ</sup>は遙か彼方だ！

此から俺の時間が始まるのだ！

いよいよイゼルローンだ、これで魔王は五千光年の彼方だ。

ホツとしたこれで暫くは自由恋愛が楽しめるという物だ、

まあ一週間は要塞の各部署の見学だから出かけられんが、8・9は  
休暇だこれからが楽しみだ。

翌日から要塞司令室や艦艇用ドック、浮遊砲台等を見学を行い宇宙  
艦艇に乗り回廊部の狭さや危険宙域の外圍ぎりぎりまで航行したり  
し非常に為になる行為だった。

<sup>ヒッテンフェルト</sup>鶏冠頭は戦艦に乗ると異様なぐらい興奮して、自分の艦は真つ黒に  
塗るぞと力説していたがお前未だ少尉だろう船が貰えるのが何時に  
なるんだ？

ワーレンは心有らずとゆう感じで溜息をついていた。

そんなに嫁が恋しいか、俺には判らん事だがな。

俺は俺で今度の休みのことが気になってばかりいた。

そうこうしているうちに、8日が来た俺は早速バーへと繰り出した、

ネット情報で奇麗所が集まる所でイゼルローンでもお勧めスポット  
だと言うので行ってみた。

店に行くと30代前半ぐらの斜に構えた美女がお出迎えしてくれた。

「あら少尉さん初めての方よね?」

「ああオーデインから来た」

「まあ遠いところをようこそ、私当店のママをやっています、ユリアーネって言います」

「当たりのようだ、ママの態度も良いし、ホステスの質も良い」

「レテーナ此方のお客さんに来てあげて」

ママが呼んだ娘は、俺好みのいい女だった。

「レテーナて言いますお客様のお名前は?」

「オスカー、オスカー・フォン・ロイエンタールだ」

この名前に反応するだろうか?

反応しないな矢張り此処までは噂が来ていないのだな。

「ロイエンタール様で宜しいですか?」

「ああ構わんよ」

「よろしくお願いいたしますね、ロイエンタール様」

「此方こそミスレテーナ」

「レテーナで良いです」

「そうか」

今日は楽しい日になりそうだ。

イゼルローン要塞	バー	ファンタズイー	ユリア
ーネ・フェルゼンシユタイン			

本日調査対象のオスカー・フォン・ロイエンタールが来店した早

速羽を伸ばしに来たようだ。  
レテーナを付けたが早速気に入った模様、そのうちに誘われるだろ  
う以上。

御屋形様へ定時連絡終了。 明日以降も調査を続ける。

帝国歴478年9月9日

イゼルローン要塞  
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

今日も午前中は仲間とイゼルローン繁華街で必需品を購入してき  
た、あとは彼処へ行くだけだ。

昨日一日で感じたことは、レテーナは俺好みだし、向こうも満更で  
はないように見える。

しかし営業スマイルの可能性もあるから、数回は通って誘ってみる  
か。

仲間を誘ってファンタズイーへ向かう、ピッテンフェルト鶏冠頭とワーレンも誘っ

たが、

ピッテンフェルト

鶏冠頭はバーへ行くより戦艦のドックへ見学に行くと何人かの艦船

マニアと共に

出かけていった。

ワーレンは新婚の妻が居るので言う所は行かんと断ってきた。  
堅物だな、一人の女に操を立てるのがそんなに大事か？

半年も放っておけば、お前の妻も俺の親のように他の男に会って  
るかもしれないぞ。

帰ったら違う奴の子がいるかも知れんぞ。

まあしょうがない。行きたくない奴は行かないで良い、楽しいことはライバルが少ない方が良いからな。

到着すると早速ユリアーネが出迎えてくれた。

「ロイエンタール様また来て下さったんですね嬉しいわ」

「ああまた来た」

「レテーナで宜しいかしら？」

「そうしてくれ」

「レテーナ。ロイエンタール様がいらっしやったださったわよ」

「ロイエンタール様またきてくださって嬉しいです」

「ああ今日もお前に会いにきた」

「嬉しいです」

今日も良い日だった。レテーナもかなり俺に興味を抱いてきたしあと少しだな。

魔王から逃れて以来運が向いてきた、これからは楽しみだ。

イゼルーローン要塞

バー

ファンタズイー

ユリア

ーネ・フェルゼンシュタイン

本日もオスカー・フォン・ロイエンタールが来店した。

相変わらずレテーナ狙いのようだ、来週辺りは誘われたならOKするようになさせよう。

御屋形様へ定時連絡終了。

明日以降も調査を続ける。

オーディン ノイエ・サンスーシ

テレーゼ・フ

オン・ゴールデンバウム

過日ケスラーよりロイエンタールの素行調査書を見せて貰った。案の定女遊びを始めたようですね。

まあ束縛していたら男は逃げますから、息抜きさせてあげないと駄目ですからね。

まあしかし何処にでも爺様の組織構成員は居るんだね驚いたよ。

ロイエンタールよ息抜きして良く育って帰ってくるんだよ。

## 第二十六話 復活のロイエンタール（後書き）

これ以上書くと「らいとすたっふるール2004」に当たる可能性があるので御想像に任せます。  
誤植直しました。

## 第二十七話 第四次イゼルローン攻略戦（前書き）

初の戦闘シーンです、こんな感じですが如何でしょうか？

年月修正 7 7 8 7 8 7 4 7 9 4 7 8 へ

最後に増補しました。



## 第二十七話 第四次イゼルローン攻略戦

宇宙歴787年帝国歴478年9月18日

### イゼルローン要塞

予てから予想されていた叛乱軍イゼルローン攻略部隊の予兆と思われる行動が次々と入ってきたのは標準時9月18日午前9時のことであった。

イゼルローン要塞司令部内で、オペレーターの声が響き渡る。

「回廊外方に設置した偵察衛星からの連絡が次々に途絶えていきま  
す」

「ティアマト星系アンシャルの軌道上に敵艦隊らしき反応あり」

イゼルローン要塞司令官テーグリヒスベック大将と駐留艦隊司令官  
プラテンシュレーガー大将そして増援艦隊司令官ミュッケンベルガ  
ー大将がそれぞれの幕僚を引き連れ作戦を立て始める。

イゼルローン要塞

グレゴール・フォン・ミ

ユッケンベルガー大将

テーグリヒスベックが

『基本戦術は、駐留艦隊が叛徒共を要塞主砲の射程内に引き込みト  
ールハンマーで撃破する』と主張する  
するとプラテンシュレーガーが『我々は困か』と反論する。

それに同調するように、両者の幕僚達も口々に同じように相手を誹  
謗する。

何なのだ此処は、叛徒が来て居るのに味方同士で争って唾みあつて  
いる。

これでは埒があかない状態ではないか。

此方は一刻も早く叛徒共を撃退せねばならんのに、出撃すら出来な  
いではないか。

折角皇帝陛下から信任を得てこの増援艦隊の指揮を任されたのに、  
このままでは陛下に申し訳がたたん。

そして第2次ティアマト会戦で散った。我が父ウィルヘルムと会戦  
前に倒れた大叔父ケルトリング元帥の無念を晴らす機会なのだ、此  
処は儂が作戦を述べた方が良いな。

「兩人とも言い合つていても埒があくまい。

この作戦はどうだ、叛徒共は我々増援艦隊の到来を知らなかつ、  
艦隊を流体金属内に止めトルハンマー砲撃後出撃し混乱する叛徒  
共を一気に殲滅する」

司令部内でも良い案なのではとの声が聞こえる。

そこへプラテンシュレーガー大将が其れでは駐留艦隊が道化ではな  
いかと文句を言ってきた。

「ではどうすればいいのか」

「逆にすればいい、駐留艦隊が流体金属内で待機し、卿の艦隊が敵  
をおびき寄せればいい」

身勝手な考えだ、損害を受けるのが嫌で貧乏くじを俺に引かせるつ  
もりか。

しかしこのまま言い争つても仕方ない、戦う気のない奴に任せても  
失敗しかねん、

自分が出るしか無かつ。

「判った自分が出よう」

「頼んだぞ後詰めは任せるがいい」

嬉しそうに言うな、頼がゆるんで居るぞプラテンシュレーガー。

「グライフス連れてきた新規士官達上位20名以外は講堂にて戦闘を視聴させよ」

「はっ」

「20名は旗艦ヴィルヘルミナに乗艦艦橋に集結するように」

「直ちに命令します」

「テーグリヒスベック大将、プラテンシュレーガー大将後はよろしく頼みますぞ」

「了解した」

「任せて起きたまえ」

ヴィルヘルミナに乗艦し艦隊が発進する。

流体金属の海を突き抜け次々に戦艦、巡航艦等が真空の大海へと飛翔する。

このうち何隻がまた海へと戻れるのであろうか。

艦隊は各分隊、戦隊ごとに隊列を組みつつある、イゼルローンからは敵艦隊が近づいているとの入電が入り続ける。

1時間で隊列を組み終わり増援軍15500隻が戦闘形態を整えた。ヴィルヘルミナのモニターからもティアマト星系方面から来る敵艦隊を捉えつつあった。

新規士官に聞こえるように参謀長に話しかけた。

「参謀長作戦は当初の通り敵をトールハンマーの射程内に誘い込む、誘い込んだら艦隊は天頂方向へ急速撤退だタイミングを間違えないよう、各分艦隊に作戦を徹底させよ」

「はっ直ちに」

次第に明らかになってくる敵艦隊、オペレーターが概算の敵艦隊数を伝えてくる。

「敵艦隊総数凡そ40000隻」

凡そ2倍強の戦力に艦橋内にざわめきが起こる。

ふっ発破をかけるか。

「敵が40000隻でも我が方は駐留艦隊と合わせれば30000隻を超える、そしてトルハンマーがあるこの戦い勝てるぞ」

落ち着いたか、後は奴らがタイミングを間違えなければ勝てる。

敵艦隊が戦闘圏内へと近づいてくる。

オペレーターの声だけが響いていく「敵イエローゾーンを突破射程圏内に入ります」

「未だだあと少し引きつける」

「敵艦発砲」

「あの距離では有効打には成らんよ」

グライフスの言う通りだ、あの距離では防御シールドに弾かれる。

何発かは先頭集団に着弾するがシールドに阻まれ有効打とは成らない。

後ろを振り返ると新規士官達が固まって見ている、まあいきなり撃たれるのだ怖くもあるう。

しかし数人はモニターを確りと凝視し肝が据わって見える。

「敵艦隊距離11光秒、有効射程距離に入りました」

「全艦ファイエル！」

漆黒の闇の中艦隊からビームの奔流が敵艦隊に対して弾き出される。たちまち敵艦隊の先頭で火花が弾けるように大輪の光の花が咲きま

くる。

先頭部隊を痛撃された敵艦隊だが2倍以上の戦力差に勢いづくのか  
怯まずに押し込んでくる。

此方も少しづつではあるが、損害が生じ始めている。

うむ、これは押し込まれた振りをしながらギリギリと後退するの  
も骨だな。

すでに艦隊はトールハンマー射程内に進入している。

オペレーターが報告する「敵艦隊トールハンマー射程まであと2光  
秒」

左舷分艦隊は流石ケルトリングだまつまりが良い。

右舷分艦隊が押され気味だな、バレンホイムは何をしてる！  
本隊予備シュタイエルマルクでテコ入れだな。

「シュタイエルマルク准将に命令、本隊予備から2000隻を持っ  
て戦線後方から回頭し右翼の傷口をふさげ」

「シュタイエルマルク、トールハンマー射程までの時間稼ぎだ引き  
際間違えるなよ」

「諒解しました」

これで右翼は対処できた。シュタイエルマルクなら安心だ。  
更に圧力を加えてくる同盟艦隊。

「敵艦隊トールハンマー射程まであと0.5光秒」

「シュタイエルマルク分艦隊敵左翼先端に攻撃を開始しました、敵  
先端が崩れていきます」

よし、流石だシュタイエルマルク、だが深追いはするなよ。

「敵艦隊損害を物ともせず突入してきます」

「奴らは自殺志願者か？」

グライフスが驚いている。

「敵艦隊トールハンマー射程内に入りました」

「よし、あと2光秒引きつけるぞ」

「シユタイエルマルク分艦隊がバレンホイム分艦隊の援護に成功しました」

「バレンホイムに後退を指示、艦列を立て直しつつシユタイエルマルク分艦隊の後方へ廻れ」

「敵艦隊更に突進」

よし、そろそろだな艦隊を後退させ敵を引きずり込むぞ。

「イゼルローンから準備宜しの通信入りました」

よし来たか。

「全艦に命令全速で後退せよ。0.5光秒後退後天頂方向へ高速移動、トールハンマーが来るぞ」

敵艦隊は何も考えていないのか？壊走と勘違いしたのか？射程内に次々と敵艦が集まってくる。

そして遂に、イゼルローンの流体金属がパラボラ型に凹み其処から出力9億2400万メガワットのビームが放たれた。

次の瞬間叛徒の艦隊は一瞬にして大損害を浴びた、混乱しつつある敵艦隊に第2波が発射され更に敵が消滅する。

その直後イゼルローンから駐留艦隊が出撃してきた。

「ふ、プラテンシユレーガーやっと出てきたか」

「敵艦隊壊走しています」

「よし我が艦隊は天頂方向より敵第二陣に攻撃をかける」

「素点固定」

「ファイエル」

敵第二陣に弾着し其れなりの戦果を挙げる。

「駐留艦隊突出してきます」

味方撃ちしそうになる為攻撃が出来なくなる。

「プラテンシュレーガーは何をしてるんだ！」

「戦果が欲しいのじゃないか」

「バラバラではないか、あれでは逆櫓を食らうぞ」

案の定駐留艦隊は敵艦隊の逆櫓で損害を出す。

そここうしているうちに、敵艦隊は回廊から脱出していき、これ以上の追撃は不能だと言うことで艦隊はイゼルローンへ帰還した。

#### 帝国軍の損害

ミュッケンベルガー艦隊 1387隻、9万3815名  
プラテンシュレーガー駐留艦隊 2776隻 23万8518名

最初から力戦したミュッケンベルガー艦隊より逆櫓を食らった駐留艦隊の方が倍の損害をだした。

此処に第4次イゼルローン防衛戦は幕を閉じた。

## 第二十七話 第四次イゼルローン攻略戦（後書き）

ウィキペディアの引用先が間違えていて、9億4200万メガワットになっていたのを、ご指摘して頂き直しました。



第二十八話 イゼルローンを血に染めて（前書き）

同盟側です。

## 第二十八話 イゼルローンを血に染めて

宇宙暦787年年帝国暦479年9月

### イゼルローン要塞

### 同盟軍イゼルローン遠征隊

自由惑星同盟は銀河帝国の最重要の軍事拠点たるイゼルローン要塞を攻略すべく、第4次の遠征隊を派遣した。

遠征隊がハイネセンを出発し回廊内に進入したのは宇宙暦787年9月12日のことであつた。

同盟軍参加兵力、第4艦隊14500隻、第7艦隊14300隻、第12艦隊13400隻。合計42200隻兵員439万6000名であつた。同盟軍第4艦隊司令官サダ中将、第7艦隊司令官シンクレア中将、第12艦隊司令官ロボス中将であつた。

回廊進入直後の9月13日、第4艦隊旗艦アキレウスでは事件が起こつていた、サダ中将が急性腹膜炎で指揮を執ることが不能になつたのだ。

緊急の事でサダ中将は後送され変わって副艦隊司令官クラドック少将を戦時特例で中将待遇とし指揮を任せていた。

第4艦隊旗艦アキレウス艦橋ではクラドック中将がほくそ笑んでいた。

俺にも運が向いてきた、此所で活躍すれば中将になり艦隊司令になれる、

しかも第4艦隊が先頭だ、戦力も敵の3倍ほどだ勝ち戦になるぞ。

オペレーターの報告で我に返る。

「要塞より敵艦総数凡そ15000隻、敵艦隊此方へ向かつてきま

す

「ふっ艦隊数はほぼ同数いける！」

「よし射程に入り次第砲撃する、そのまま要塞まで押しきるぞ」

参謀長が意見する「もっと引きつけてから攻撃をした方が良いですが」

ちっ此奴自分が司令官に成れなかったからと、嫉妬してじゃまする気か。

「参謀長戦いは氣勢を持った方が勝つのだよ、消極的な言動は慎みたまえ」

「.....」

「敵艦隊射程内に入りました」

「よし全艦撃て」

艦隊から放たれたビームが次々と敵艦に命中していくが、大半がシールドで防御される。

「ちっ弾いたか、全速前進間合いを詰める！」

参謀長が苦虫を潰したような顔をしていやがる馬鹿にしゃがって。

「敵艦隊発砲、直撃来ます」

突っ込んだ先頭部隊がシコタマ叩かれる、不味い俺の経歴に傷が付く！

「全艦突撃撃って撃って撃ちまくれ！」

いいぞ敵に損害が出てきている、ジリジリ圧力を受け後退していく、特に右翼の敵はばらけ始めているな。

「敵右翼に攻撃を集中せよ！」

右翼の乱れが激しくなってきた、良いいけるぞ。

参謀長がまた余計なことを意見して来やがった。

「司令、第7、第12艦隊と連携を取りませんと隊列が伸びすぎます」

「黙れ！今は押ししてるんだ。此処で止まれば敵が持ち直す、そんなことも判らんのか！」

オペレーターの声が響く。

「回廊危険宙域ギリギリから敵艦隊凡そ2000、我が艦隊左翼に攻撃」

馬鹿野郎余計なことを言いやがるから、見逃したじゃないか！

「敵は最後の足掻きだ、撃って撃って撃ちまくれ！」

「第12艦隊ロボス中将より入電『先走るな隊列を立て直しつつ後続部隊との連携を保て』」

「司令敵の動きを見極めませんと」

「返信はどうなさいますか？」

「無視しろ！」

「司令ロボス中将が最先任です命令に従わないと」

「黙れ！俺に意見するな！」

「しかし」

ちっ！勝ったら参謀長は真っ先に首だ！五月蠅い奴はいらん！

「ロボスが先任だろうが、艦隊司令官は俺だ！今は同格の中将だ関係ない！」

ロボスの奴俺だけ手柄を立てるのに嫉妬してるらしいな。

「敵壊走を始めました」

「ようし行けるぞこのまま敵艦隊と追走して要塞に肉薄しろ！」

要塞砲は此で使えんよ。

「司令！！」

「なんだ？」

「敵艦隊天頂方向へ急速上昇、要塞表面から光が！」

「司令急速後退をトールハンマー来ますー！」

「直撃来ます………！！！」

馬鹿な俺の野望が………

次の瞬間第4艦隊旗艦アキレウスはその周りにいた僚艦共々原子の粒として消え去った。

第12艦隊旗艦ペルーンではロボス中將がその閃光を見ながら唸っていた。

クラドックの阿呆が！

「参謀長第4艦隊の残存部隊に速攻で後退せよと命令出せ」

「はっただちに」

「トールハンマー第2波来ます！」

またも沈む第4艦隊の各艦、最早組織的な動きも出来ない状態でバラバラに撤退してくる。

「第4艦隊生き残りの最先任を探して撤退指揮を行わせろ」

悲鳴のようなオペレータの声が響く。

「敵艦隊天頂方向から再度攻撃来ます！」

「要塞表面から敵艦隊出現しました」

「参謀長敵は更に艦隊を隠していたらしい、不味いぞこれは。」

「司令官閣下いかが致しますか？」

「第4艦隊残存はティアマト星系まで後退させろ、第7、第12艦

隊で敵を防ぎつつ後退だ」

「第4艦隊分艦隊旗艦タケミカツチ確認」

「阿呆の旗艦じゃないか、誰が指揮を執ってる？」

「パストーレ准将です」

「パストーレに第4艦隊を纏めてティアマト星系まで兎に角逃げろと連絡しろ！」

「諒解」

「第7艦隊のシンクレアに連絡を」

「シンクレア此は不味いぞ、敵の数が予想以上だ」

「確かに、阿呆のせいで作戦も滅茶苦茶だ」

「さすがにもう無理だろう」

「だな」

「俺とお前で繰り引きながら後退だ」

「判った」

嵩にかかって追撃してくる帝国軍特に、イゼルローンから出てきた艦隊は凄い勢いで追ってくる。

しかしロボスとシンクレアの逆檄に会い戦果を余り挙げられずに終わった。

同盟軍の4回目のイゼルローン攻撃は失敗に終わった。

同盟軍の損害

第4艦隊旗艦アキレウス以下6437隻、兵員61万3877名

第7艦隊1177隻、兵員7万5887名

第12艦隊1261隻、兵員8万4522名

またしても同盟軍の敗北に終わった。

第二十八話 イゼルローンを血に染めて（後書き）

ムーア+（ホーランド<sup>3</sup>）＝クラドック中将と言っ感じ。

第二十九話 新米少尉のイゼルローン日記（前書き）

今回グタグタです。



## 第二十九話 新米少尉のイゼルローン日記

帝国歴478年9月

イゼルローン要塞

フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

9月1日

イゼルローンへ到着した。

楽しみにしていた前線勤務だ俺たち下っ端は仕事がないから要塞内の各所を見学だ。

要塞司令部ではトルハンマーの予行演習や浮遊砲台の操作法などを教えて貰った。

9月9日

ロイエンタールがバーへ誘ってきたが断った、此処まで来たら歩かなければ面白くないだろう。

楽しみだったのは、艦艇ドックだ！各種戦艦や巡航艦が多数並び整備や修理が行われている、

流石にこれだけの戦艦を間近に見るのは初めてだ、この重厚さこの機能美しい物だ。

向こうには高速戦艦が停泊している、これは良い！スマートだし美しい艦だよし決めた。

俺の旗艦はこのクラスだそうしよう。

9月18日午前9時

朝起きたらロイエンタールが居なかった。

昨夜は何処かへ行っていたようだ、朝飯をかつこんでいる途中に帰ってきた。

ミーティングを始めようとしたとき敵襲の放送が鳴り、いよいよ戦闘かと周りの連中と話していた時、  
新規士官のうち上位20名は旗艦へ乗艦せよと命令が来た。  
よし俺も戦闘だ、叛徒共みておれよ！

凄まじい戦闘だ流石はミュッケンベルガー大将だ。

的確な指示で敵の攻撃を受け流していく、同期連中は殆どが震えまくっている。

だらしないうちのお前達！流石にロイエンタールとワーレンはスクリーンを見ながら一々頷いている。

敵将の猛攻が凄まじい勢いを感じるんだが、司令官は非常に落ち着いた口調で命令を出す。

受け流していくそうだが、しかし右翼が崩れつつある、あの攻撃は凄いなと思うのだが、ロイエンタールがあればお前のように猪突猛進だと言いやがった。

俺はそんなんじゃないぞ！

司令官が予備の艦隊を迂回戦術で敵左翼に叩きつけた、おー敵が崩れていく、あのような戦法も使えるのか勉強になるな。

後退しつつトールハンマーの準備が出来たと連絡があると、艦隊は急速上昇し後に残った叛徒の艦隊がトールハンマーで大打撃を食らっていた。

司令官の追撃命令と駐留艦隊の突出で敵は撤退していった。  
存外叛徒共もだらしがない。

今回は大変参考になった。特に敵の圧力を躲しつつ陣形の再編は授業では中々体験できない、良い経験だった。

帝国歴478年9月

イゼルローン要塞

アウグスト・ザムエル・ワーレン

9月1日

やっとイゼルローンだ、50日間オーデインに連絡が付けられず、非常に寂しい気分だった。  
しかし今日からはFTL通信でリーザと話が出来るようになる、凄く楽しみだ早く夜にならんかな。

9月2日

久しぶりに話をしたリーザは相変わらず綺麗だ、早く帰りたくし仕方ない。  
研修中にやけてしまい、案内士官から怪訝な目で見られた気をつけなばならんな。  
しかし今日も連絡しよう。

9月9日

ロイエンタールがバーへ行こうと誘ってきたが断った、当たり前だ俺にはリーザが居るんだ、お前じゃ有る前えし女遊びをしていられるか。  
ロイエンタールはそうかと言って一人で出かけていったが、彼奴のスキップは初めて見たが見物だった。

9月18日

ビットンフェルトが朝起きたらロイエンタールが消えていると言ってきたが、  
大方お前が寝坊して先にロイエンタールが出たんだろうって言うてやったが。

食堂にもおらず、何処へ行ったと話していたら、士官学校在学中の門限破り時のように窓から入ってきた。はあ、お前は少尉になっても同じか。

呆れていたら敵襲の放送があり、どうするんだと皆でざわついていたが、新規士官上位20名は旗艦へ集合と来たので慌てて集合した。実際の戦闘という物は聞くのとは全く違い緊張の連続だ。

いつもはいきがっている、貴族出身の連中はブルブル震えて居るが、ビットンフェルトやロイエンタールは何処吹く風でスクリーンに移る戦況を確認している。

司令官は作戦が旨い。見ていても的確な戦法で猪突猛進の敵の圧力を躲していく。

少しずつ畏にはめる様は燻し銀の男らしさだ、俺もあのよう的確な指示が出来る人間になりたい。

トールハンマー砲撃には肝を冷やされた。あれほどの攻撃は敵ながら気の毒に思えてしまう。

今回の研修は非常に為になったが、リーザに会えないのが辛い、半年の予定だったが敵を撃退したのだから、もう帰れるのだろうか其れだけが心配だ。

そんな話をしていたら、ロイエンタールが俺は帰らんって力説していたが、

そんなにいい女でも居たのか？俺には判らん事だ。

帝国歴478年9月

イゼルローン要塞

オスカー・フォン・ロイエンタール

9月1日

よしイゼルローンだ！もう俺は自由だ魔王は居ない、イゼルローンの恋人達よ俺は来た！

しかし外出許可が1週間ごとは残念無念だ。

研修よ早く終わってくれ、ピッテンフェルト鶏冠頭は喜んでいるが俺は早く自由になりたいんだ。

9月7日8日

レテーナよお前を落としてみせる。

9月18日

遂にレテーナの家招待された、店から帰りに小洒落たレストランで食事し家へエスコートされた。

家は洒落たマンションでイゼルローンにあるとは驚きだ、軽く酒を飲みながらレテーナの身の上話、不思議とレテーナとは話をしたくなる。

そのまま夜は更けていく。

翌朝起きたら午前8時半過ぎだった、

官舎へ行くが門番が居る為に昔のように窓から侵入した。

ワーレン達が呆れていたが、女との情事は俺の人生だからな。

呆れられている中敵襲があり、俺たちは旗艦に乗って迎撃だった。

司令官の的確な戦法だが右翼の指揮官が下手くそだった、俺ならあんな指揮は執らんにな、

あれで正規艦隊指揮艦とは情けない。

左翼のケルトリング少将は流石に旨い、

しかし娘は魔王の取り巻きだ絶対に手を出さないようにしよう！

遊撃を指揮したシュタイエルマルク准将の指揮も水際だっ  
ていて参考になる。

しかし敵将の指揮が余りにも不味い戦法だ、只突っ込むだけで、  
デッフェルト冠頭よりむごく兵が気の毒だ。

しかし叛乱軍め余りにも弱すぎる、此で終わりではオーディンへ早  
く帰らなければ成らないじゃないか、  
魔王から逃れたのに帰りたくはない！

このままイゼルローンへ永住したい、何とかならない物だろうか。

第三十話 チシャ娘（前書き）

あざといレタス娘、悪巧みする。

### 第三十話 チシャ娘

帝国歴478年10月1日

オーディン                      ノイエ・サンスーシ                      小部屋

先だつてのイゼルローン防衛戦の戦闘報告書や素行報告書を読みながら、お父様、爺様、ケスラー達と話し合い中。  
お父様は血色の良い顔で頷きながら読んでいる。  
最近はお父様も頻繁に会合に参加して生き生きとしています。

「テレゼよお前の推測が当たつたの」

「決断して頂いたのはお父様ですし、それに見合う情報を出してくれたのは皆ですから」

「よいよい謙虚じゃの」

「ケスラーよ、ミュツケンベルガーとケルトリング、シュタイエルマルクはよう働いたが、要塞の方は駄目じゃな」

「御意、調べました結果要塞司令部は未だ及第点ですが、駐留艦隊司令部は落第点でございます」

「ふむそろそろ替え時かの、のうグリーンメルスよ」

「既に任地に行き5年膿んでおりますよ」

「では変えるか、後任は軍務尚書に任せようぞ」

うわー此である味方殺しが行くのか。

考えていると、お父様が気がついたのか。

「テレゼどうした真剣な顔をして」

「いえ、要塞の司令部同士が仲が良くないようで、

其れを是正するのはお父様の勅命しか無いかと思ひまして」



「ふむそうじゃの、親任の時にきつく言い聞かせよう」

少しは良くなるか、けど平行追撃作戦対策は早くしないと駄目だな。ケルトリング少将かクラリツサのお父様だけど意外に戦闘上手なんだな、原作には出てこないが何処かで戦死したのかも知れないが、此からのことを考えると貴重な戦力だ。

シュタイエルマルクって聞いた事があるんだけど、どこだっけか？  
「ケスラー、シュタイエルマルクってなんか聞いた気がするんですけど？」

「御意、第二次ティアマト会戦で勇戦したシュタイエルマルク中将の孫でございます」

「なるほどあの勇将シュタイエルマルクの血筋ですか、祖父同様流石ですね」

いずれシュタイエルマルクもスカウトしよう。

おやおや爺様、ウツラウツラしてきてますね、日向ぼっこ提督の面目躍如ですか、

まあそれだけケスラーを信頼している証拠だし、お父様もクスクス笑ってます。

「今回は敵が此方の艦隊に圧力をかけて壊走させながら平行に追撃しようとしたみたいだけど次回以降も同じ手を使ってくる可能性があるのでは？」

「確かにその手はあります、統帥本部で研究させましょう」

「問題はミュッケンベルガー大将のように的確な戦法をとれる将帥が居ないと破綻する事だと思いますよ」

「確かにそうじゃな、そうならん様に作戦を作らせねばならぬの」

「負けた後で直ぐに攻めては来ないでしょうね、次回までに考えれば良いのでは、」

いつその事ミユッケンベンガー大将をイゼルローン要塞総司令官にするのも手ですが」

「いやあの者は次期宇宙艦隊司令長官にと考えておる、今回上級大将に昇進させ宇宙艦隊副司令長官にするつもりじゃ」なるほどね、彼なら威厳があるしピッタリでしょう。

ラインハルトは『堂々たる者だ、ただし堂々たるだけだ』と批判していたけど、あれは自分の物差しで言っているだけで実際各戦線では有利に戦っているから、父様の人物評価は确实だね。

完全に爺様寝てますが、寝てるふりかも知れないのがこの爺様の凄さ。

そうそう慰問袋の事も頼もう。

「お父様、奮戦むなく叛乱軍の俘虜になってしまった可哀想な将兵達に慰問袋を送りたいのですが、宜しいでしょうか？」

「うむ考えがあるのか？」

「兵達が可哀想ですし平民の人気取りにも使えろと思えます、それに何れ帰還させたときに我々の味方としてカウントできるでしょう」

「ではテレゼに任せよう、自由にせい」

「はいお父様、ケスラーその旨準備を手伝って下さい」

「御意」

そうだズーツと気になっていた事を聞こう。

「お父様お聞きしたいのですが、グリユーネワルト伯爵夫人の父親が男爵を求めたとか、断ったとか聞いたのですが、どちらが本当なのですか？」

「あの男は男爵には自分は過ぎたる物と辞退してきおった、其れなりに矜持があるので有ろう」

なるほどね、ラインハルトは父親のことを毛嫌いしていたけど親なりの矜持があつたんだな。

此処は一手撃ちますか、ケスラーなら出来るでしょうし。

「ケスラー、グリユーネワルト伯爵夫人の弟ですが、最近どうでしょうか？」

「はっ、相変わらず問題を起こしております、走るトラブルと言われるそうです」

「ハハハ、相変わらずよの父上楽しみますね。」

「普通なら放校処分になるのをそのまま居られるのが、お父様のお陰だと判つてないんでしょうね、

あの目見れば、お父様を相当恨んでいるのが判りますし」

「そうかテレエゼにも判るか」

「判りますよお父様、ギラギラした野心がただ漏れです」

「お父様提案なのですが、爵位もない貧乏騎士の小倅と馬鹿にされるのが相当頭に来るのでしょうかね、

それならグリユーネワルト伯爵夫人の身内なので、男爵か子爵を与えてしまったら如何でしょうか？」

ふっいずれ、平民や下級貴族の支持を受ける時、

爵位も持たない貧乏貴族出だと言う事も、ある程度加味されているから、

そのフラグを折ってあげましょう。

ラインハルト・フォン・ミューゼル男爵殿、いや子爵殿かな。

「そうかのあの者が受けるかの」  
「そうでしょうね、お父様もそう思うでしょうね、ケスラーも頷いてるわね、  
私も思うよ、けどね作戦はビットンの様に突撃だけじゃ無いんだよ。  
搦め手から攻めるのも手なんだよ。」

「お父様、其処は搦め手から攻めるのが手ですよ」  
「ほうテレーゼならどうする？」

「グリューネワルト伯爵夫人を使います、  
まず伯爵夫人にミューゼルの幼年学校における虐めを誰かに教えさせて心配させます。」

そしてお父様がその旨で彼に爵位を与えろと言えば、伯爵夫人は喜んで受けるでしょう。

そうすればシスコンのあの者の事です、一も二もなく受けるでしょう」

「うわー言い過ぎたかな、お父様もケスラーも引いてるよ。」

「ほほーテレーゼ様流石ですな」  
「やっぱ爺様起きてたか。」

「うむ流石じゃ」

「お父様の子供ですし、良い師匠達が居りますからね」

「ハハハそうかそうじゃの、のうグリーンメルス、ケスラーよ」

「あと今回の爵位授与のカモフラージュにイゼルローンで活躍した  
ミュッケンベンガー大將は伯爵家の次男で爵位を継ぎません、取り  
あえず大將を男爵か子爵に叙勲した方が良いかと其れだけの武勲を  
立てていますし、ここで恩を売っておけば後々役に立ちます」

「他の者が不公平を感じるのではないかの？」

「その辺は大将は十分な武勲をあげてますから大丈夫ですね、あの者については、お父様だから大丈夫でしょう」

「ハハハ儂は寵姫には甘いからの」

「そう言う訳です」

「陛下流石でございますな、テレーゼ様なれば此から安心ですな」

「自分が無能と知っている者と違い、

自分が誰よりも優れていると言い、

自分よりも劣る者は齒牙にもかけない者には、

それ相応の嫌がらせを受けるべきですからね」

フッフ、貴方がお母様に対して付けた渾名のチシヤ夫人。

貴方の嫌いなチシヤの様に巻き巻きしてあげますよ。

ラインハルト・フォン・ミューゼル君。

第三十話 チシャ娘（後書き）

増補しました

第三十一話 大いなる畏（前書き）

むっちゃん黒いです。

### 第三十一話 大いなる罖

帝国歴478年10月2日 午前

オーデイン ノイエ・サンスーシ ベーデミュンデ侯爵夫人邸

前回の会議に於いて決まった作戦を実行すべく必要なシナリオを作成中です。

ユリアンのイゼルローン日記に帝国歴488年に捕虜交換が行われていて其れが5年ぶりしかも50年ぶりの大規模交換だと言うことは、

483年に交換が行われている計算になるがその時は少数しか交換されていない。

エコニアにはケーフェンヒラー大佐以下55000人ほどが居るはずだしどうするか、

エコニアはヤンが来年赴任する所だからな、それに暴動があるどうすべきか。

みすみす死ぬ兵達を助けたいしどうしよう。

ケーフェンケラー大佐以下55000人を恩赦で引き取れば、大佐の証言から帝国内スパイ網の存在を知らせることが出来る、しかしケーフェンヒラー大佐は帰還を拒否するだろう。

しかしヤンがアッシュビーを調べてローザス提督に会いに行つて、直ぐにローザス提督が自殺他殺事故とも判らない睡眠薬の量間違えで死去している、

そしてスパイ網の答えを出した直後にケーフェンケラー大佐が急死している。



あまりにも出来すぎていないか、ヤンの報告書自体25年間の機密扱いに成った。

ローザス提督とケーフェンヒラー大佐は口封じに殺られた可能性が大きい。

民主共和制と言いながら衆愚政治で憂国騎士団などが平気で闊歩している国だ、

ヤンの暗殺未遂とかもしている、あり得すぎる事態だ。

ヤンが事態を起こす前ならケーフェンヒラー大佐を呼び戻すことが出来るかもしれない。

此方もある程度の大物の捕虜を出して交換するしかない。

そのへんは皆に相談しましょう。

仕方ない此処は一端諦めて、慰問袋だが帝国の缶詰や食料品、本、衣類、あと1人1本のワインだね出来るだけ良いワインを送りましょう、捕虜に里心を付けることも出来ます。

410年物は流石に無理だが463年物辺りなら揃うでしょう。

463年物も同盟では結構なビンテージワインですから、おそらくはかなりの数がピンハネされるでしょうね。

ピンハネされた物は同盟内で高値取引されるでしょう、

収容所所長とかの小役人が自分の懐を潤すために。

捕虜が帰還してワインを飲んでないあるいは数が合わない状態ならば、

『同盟は捕虜に対しての救恤品を搾取している』と宣伝できますから。

それを口実に戦闘を行うことが可能ですからね。

救恤品送付と捕虜交換については、多少強引だが名目はお父様の在位23周年記念として、俘虜に成った者達にも慈悲を行い、帰国させ恩赦を与えて罪に問わない様にする。エコニアだけだと勘ぐられるから、数的には30万程度は交換しよう。

作戦としては、ミュッケンベルガーを子爵に叙勲し、ラインハルト叙勲も行う、その時ついでに恩赦も行う形にすれば、門閥貴族やりヒテン爺さん達うるさ型も、ラインハルトの批判が大きくて、それほど文句は出ないはず。

そうなると慰問袋と捕虜交換に付いて、即位の月の479年の2月に間に合うように今月中には準備を終えないとだめだな。フェザーンの高等弁務官事務所から捕虜交換と慰問袋送付を、同盟へ連絡しよう。この頃のフェザーンは黒狐じゃないから、陰謀に巻き込まれる可能性は低いだろう。

その後イゼルローンに居るミュッケンベルガーに連絡して同盟に使者を送り、受け渡しの話し合いをさせよう。そうなると大規模な事になるから、父様と爺様とケスラーに相談しよう、早いうちがいいな今から連絡してみよう。

帝国歴478年10月2日 午後

オーデイン ノイエ・サンスーシ 小部屋

早速父様のところへ、爺様、ケスラーがやって来た、ケスラーは爺様の副官のポジションみたいになっています。

父様が聞いてきます。

「テレーゼ突然いったい何のようじゃな」

「はいお父様、昨日の計画シナリオを考えまして、是非お父様達に演技と品物の準備をお願いしたいのです」

「シナリオはこうです、

その1、叛徒共に俘虜に救恤品として慰問袋送付を提案します。

此は1月の終わりまでに俘虜に届くようにします。

その中身ですが、衣類、本、食料品などですが、一番大事なのが463年物辺りのビンテージワインを1人1本です。」

3人とも、えって顔してますね。

それはそうですね、俘虜にビンテージワインなんて帝国じゃ普通送りませんよ。

「なぜワインを？」

お父様も疑問ですよね。

「第1には俘虜に里心を付かせる為、第2に俘虜がお父様に感謝すること、

第3に此が一番大事なのですが畏です」

「畏じゃと？」

みんな怪訝な顔してるね。

「そうです、叛徒共の組織はかなり腐敗が進んでいるそうです、

其処へ高く売れるビンテージワインが数百万本送られて来たらどうすると思いますか」

「なるほど其れを掠め取るうとする訳ですか」

「ケスラー正解ですよ。小役人が自らの懐を暖める為に掠め取るでしよう」

「しかし其れが畏じゃと言つのが解せんが」

「お父様そこです、俘虜交換をしてワインが配給されたかを調べて、数が合わないなど判れば、叛徒共は共和主義自由主義は平等な世界と言いながら、

俘虜の生活用品まで掠め取る盗賊と変わらない集団だと、幻想を抱いている臣民に現実を見せることが出来ます。」

「なるほど凄いいことじゃの」

「それなら臣民に対する強烈なインパクトになります」  
みんなも驚いてるね。

「ではその2、俘虜交換による帰還です、

普通であれば俘虜は不名誉な者ですが今回お父様の戴冠23周年とイゼルローン勝利の恩赦として、

帰還兵恩赦を行います、彼らは確かに叛徒共の主義に毒された者もおりましようが、

純粹に帝国を思つ者達が多いはずですよ。

それに皇帝陛下の慈悲を受けて恩赦されて社会生活に戻れると成れば臣民の忠誠度も上がります。

また生活用品を掠め取られたと知れば叛徒共に対する幻想もきえるでしよう」

「なるほどのそう言う見方もあるのじゃな」

「俘虜のデータを見たのですが、エコニアに第二次ティアマト会戦で俘虜になった、

ケーフェンヒラー大佐と言う方が未だに抑留されています。もう4年も抑留では気の毒なので是非帰還させてあげたいです」

「テレーゼ様俘虜交換数ですが如何ほどをお考えでありますか」  
まあ其れを考えるよね。

「30万ほどを計画しています」

「30万とな」

「最低でもその位じゃないと罠になりませんから、それから、救恤品と俘虜の受け渡しはイゼルローンで行った方が良いかと」

「なぜじゃフェザンで良いのではないか？」

「フェザンだと機密がばれる可能性や何か仕掛けられる可能性が有ります」

「うむそうじゃの、ケスラーそうせい」

「御意」

「その3です、昨日話したように恩赦をうるさ方から霞ませる為にお父様の戴冠23周年でイゼルローン防衛で活躍したミュッケンベルガーに子爵位と所領を下賜します、更にグリューネワルト伯爵夫人の弟に男爵を下賜します、

これで恩赦は完全に霞みます。

ミュッケンベルガーはお父様に感謝するでしょう」

「そうじゃのミュッケンベルガーはよく働いてくれるからの」

「そうですね、ミュッケンベルガーには、非難は少ないはずです。

グリューネワルト伯爵夫人の弟は徹底的に非難されるでしょうね。

特にフリーゲル男爵辺りは激高しそうですよ」

「ハハハ確かにあの者は激高しそうですよ」

「陛下目に浮かぶようですな」

「全くじゃ」

笑いが発生していますが、そんなに可笑しいかな。

「こんな感じですか」伯父上あのようなげせんの者が私と同じ男爵ですと！』言いそうですね」

「爵位を与える時グリューネワルトを使うというのがどの様な感じじゃ？」

「ケスラー、伯爵夫人の所にも潜り込んでいるのでしょ？」

「御意」

「それに噂を流させます。幼年学校で弟が爵位がないと虐められていると、

そしてそのことで喧嘩をして放校されるかも知れないと」

「なるほど」

「そして、お父様がお渡りになってこう言うのですよ。」

『そちの弟の事じゃが、この所幼年学校で爵位も持たぬ小僧となじられておるそうじゃ、

そこでじゃ、そちの弟にグリューネワルト伯爵家の家門で断絶している、

シエーンヴァルト男爵位をやるうと思つがどうじゃ？』と。

「なるほどのいい手じゃ」

「後今思いついたのですが、あの一緒にくっついてる赤毛の者の

親を帝国騎士に叙勲したらどうでしょうか、あの者の親は司法省の下級官吏のようですね、

今では帝国騎士はたいした価値はありませんから、

永年勤続かなにかで褒美に叙勲してしまうと良いのでは思うのです」

「ふむ其れぐらいであれば文句も出ぬまい」

「それでは、ケスラー準備をお願い、

お父様は国務尚書と軍務尚書に俘虜に対する事と叙勲に対する事を、そしてミューゼルの噂が流れたら伯爵夫人の元へお願いします」

「御意」

「うむテレーゼ任しておきなさい、演技は得意じゃからな」

「確かに陛下の演技は子供の頃からですからな年期が違いますな」

第三十一話 大いなる罫（後書き）

ケーフェンケラー ケーフェンヒラー修正しました。

改訂しました

そちの弟にグリューネワルト男爵位をやるうと思つがどうじゃ？』

そちの弟にグリューネワルト伯爵家の家門で断絶している、  
シエーンヴァルト男爵位をやるうと思つがどうじゃ？』

グリューネワルト男爵家 シエーンヴァルト男爵家



第三十二話 皇帝の忙しい10月(前書き)

シーンが何回も変わるので分割。

陛下が演技します。

お茶目に30万から100万へ増えた。

## 第三十二話 皇帝の忙しい10月

帝国歴478年10月10日

オーデイン ノイエ・サンスーシ 謁見室 クラウス・フォ  
ン・リヒテンラーデ

陛下から午前9時に謁見室に参内せよと前日に連絡があつたが  
何であるうか。

ここ数年陛下が真面目に執務を取られる事があるのでその事である  
うか。

謁見室に行くとき既に陛下が待っていていらつしやつた。

陛下は私に驚くべき事を仰つた、酔つておるのでは無いかと疑つた  
物じゃ。

「國務尚書ご苦労」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「うむ今日呼んだのは他でもない、叛徒共に囚われておる我が臣民  
の事じゃ」

「と申しますと」

「うむ臣民達が叛徒共に囚われ窮乏しておろつ、そこでじゃ救恤品  
を送りたいと思つてな」

何を言うのじゃ陛下は叛徒に囚われた者など捨て置けばよい物を。

「恐れながら皇帝陛下囚われし者共は陛下に対しての忠誠心が足ら  
ぬからみすみす叛徒共に囚われたのですぞ」

「國務尚書、卿は皇帝より偉いのか？」

「滅相ございません」

陛下お怒りなのか。

「では予が良いと申しておるのじゃ囚われし者に救恤品を送る事にするのじゃよいな」

「お任せ下され皇帝陛下」

「うむ入れる品は三長官を呼んで有るので此から話そうぞ」

うむ仕方が無かるうグリューネワルト伯爵夫人が来られてからの陛下はお変わりに成られた。

「三長官をこれへ」

エーレンベルク、シュタインホフ、ベヒトルスハイムが入室してくる。

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

3人が同じように挨拶を行う其れを見て陛下が。

「三長官ご苦労」

「さて既に國務尚書には伝えたが叛徒共に囚われた者達に救恤品を送る事にするのじゃよいな」

「恐れながら皇帝陛下囚われし者共は陛下に対しての忠誠心が足らぬからみすみす叛徒共に囚われたのでございます、忠誠心有れば自決して憚らないかと愚考いたします」

ベヒトルスハイムの阿呆が先ほど儂が行った事と殆ど同じではないか、陛下がお怒りになるぞ。

「ベヒトルスハイムよ卿は予より偉いのか？」

「いえその様な事はございません」

「予が良いと申しおるのじゃ、その旨承知せよ」

皆驚いておるわ、儂も驚いたわ。

「「「御意」「」」

「そこでじゃ叛徒共に囚われている者達は150万程じゃそうだな  
エーレンベルク知んようじゃな。」

「よいわ後で調べよ」

「御意」

「そこでその者全員に帝国の食料品、衣類下着など、そして此が一番大事じゃ463年物のビンテージワインを1本ずつ袋に入れ送るのじゃ」

「なんじゃと陛下血迷われたか、俘虜などにワインしかもビンテージワインじゃと。」

「恐れながら陛下」

「何じゃ 国務尚書」

「俘虜ごときにワインを与えるしかもビンテージなど贅沢の極みでございます」

「尚書よ！2度と聞くまえ、卿は予より偉いのか！」

陛下のお怒りじゃ。

「滅相もございません」

「では良いなしかと申しつけるぞ、」

「来年の1月までに俘虜に届くように致せ、中身も変えるでないぞ」

「「「「御意」「」」」

「其れとじゃこの度救恤品を送る事と共に叛徒共と俘虜の交換を致す」

「良いのでありますか」

「で如何ほどの人数を」

「帝国にいる叛徒共の俘虜はいくらおる？」  
やはり判らんか。

「判らるのであれば、直ぐにでも連絡せい」  
「御意」

エーレンベルク慌てて連絡するのか。

「陛下しばしお待ちを」

「うむ判ったわ」

「陛下早急に調べさせております故暫しご猶予を」  
しばし休息かの。

女官が御茶を持って参った。

御茶を飲み終わる頃陛下がまた話された。

「話は変わるが、先頃の叛徒共のイゼルローン襲撃を撃退し誠に見事じゃった」

「「「ありがたき幸せにございます」」」

「聞くところによると増援部隊指揮官ミュッケンベルガーは水際だった指揮だったそうじゃが、

駐留艦隊司令官の指揮は酷かったそうじゃの、

しかも駐留艦隊司令官と要塞司令官が常日頃から喧嘩をしているそうじゃな」

「御意そういつ報告が来ております」

「エーレンベルクよ2人を交代させよ、上級大将に昇進させ軍事参議官に親補せよ」

「ベヒトルスハイムよ、ミュッケンベルガーは上級大将に昇進させ宇宙艦隊副司令長官にいたす良いな」

「「御意」」

うむかなりの人事じゃな。  
イーレンベルク連絡が来たようじゃな。

「陛下お待たせいたしました。叛徒に囚われし帝国の俘虜155万  
ほどだそうでございます、」

叛徒共の俘虜は220万ほどだそうでございます」

「ご苦労じゃ軍務尚書」

「ありがたき幸せ」

「では救恤品は160万個用意いたせ、多い方が良からう」

「御意」

「俘虜の交換は100万の俘虜を受け取るうぞ、叛徒の俘虜も同数  
送り返すのじゃ」

「其れは余りにも」

「予が良いのじゃ判ったな」

「御意」

「国務尚書連絡はフェザーンの弁務官事務所から叛徒共の事務所へ  
連絡させ決めさせるのじゃ。」

まずは1月までに俘虜に届くように救恤品を送るのじゃぞ、  
その後4月までには俘虜交換じゃ。」

努々間違えるでないぞ此は勅命じゃ」

「御意」

陛下が恐ろしゅう成ったわ。

しかし最近陛下は覇気が在られる、儂も仕え甲斐が有るとい物じ  
や楽しみになってきたの。

「典礼尚書をこれに」

ん典礼尚書となあの老いぼれに何の用じゃ？

「皇帝陛下には」機嫌麗しく」

「うむアイゼンフートよ、先頃のイゼルローンの戦闘は知っておる  
う」

「勝ったと言っただけでしたら」

「うむそこでミュッケンベルガー伯爵の弟が司令官として活躍して  
な」

「ほうほうして如何致すのですかな」

何を為さるんじや陛下は？

「今その者は分家して帝国騎士でな若かりし頃より帝国の為に活躍  
したのじや、

今回上級大将に昇進させ、宇宙艦隊副司令長官にする、

その功績を称えて子爵と所領を下賜することにした」

ふむミュッケンベルガーであれば、伯爵家の出ゆえ反対もさほど無  
かるう。

206

「してどの家門を下賜いたしますか」

「うむエツシエンバッハは絶えて久いの」

「さようでございます」

「ではそれにいたそう」

「御意」

「皆の者」ご苦勞で有った」

「」」」」」御意」」」」」

ふうやっとなつたわ、しかし此から大変じや。

1月では今月中に準備を整えねばならんな、まずはフェザーンじや  
な。

帝国歴478年10月10日

オーティン ノイエ・サンスーシ      グリユーネワルト伯爵夫  
人邸

アンネローゼ・フォン・グ  
リユーネワルト

里帰りしていたメイドのハンナ帰ってきました、  
ハンナの弟が幼年学校の生徒だと聞いて弟とジークの事を知らない  
かと尋ねたのですが、  
あんな事を聞くとは思いませんでした。

「ハンナお帰りなさい」  
「伯爵夫人ただいま戻りました」  
「実家は良かったですか」  
「はい」

「所でハンナの弟は幼年学校の生徒なのよね？」  
「そうですね」  
「それなら弟の話とか知らないかしら」  
「え……」

「どうしたのハンナ」  
「いえ……」  
「言いにくい事なの？」  
「いえ、あくまでも弟からのまた聞きでございませので、お許し下  
さい」





判るのですね。

「どうしたのじゃ」

「陛下大したことではございません」

「弟の事じゃな」

陛下も知っておられる。

「陛下そうでございます」

「予も先ほど聞いたのじゃ、そちの弟が爵位もない貧乏貴族と虐められているとか、その為に放校処分寸前とか」

「陛下」

「アンネローゼよ予に任せよ、爵位がないというのであれば予が下賜しようぞ」

「陛下其れでは他の方が」

「心配するでない予が良いのじゃ、國務尚書には言わせん」

「陛下」

「幼年学校も心配するでないぞ、アンネローゼ予に任せよ」

「陛下もつたいお言葉です、弟に代わり御礼いたします」

「ハハハよいよい」

第三十二話 皇帝の忙しい10月（後書き）

リヒテン爺さん達完全に陛下の変化をグリューネワルト伯爵夫人のせいだと思ってます、その為テレゼは安全に。

第三十三話 同盟も慌ただしい10月(前書き)

話す人がころころ変わり慌ただしいです。

### 第三十三話 同盟も慌ただしい10月

帝国歴487年10月11日

オーデイン 軍務省

軍務尚書室

ハーロルト・

フォン・エーレンベルク

俘虜の交換についてリストを制作すべく部下達に指示をしていたところ、陛下からご連絡があり早速人払いをして応対した。

「エーレンベルクよ」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「そちに頼みがあつてな」

「何なりと御命じ下さい」

「叛徒の収容所でエコニアなる所が有るそうだな、其処におる全員を帰還させるのじゃ、

其処に第二次テアマト会戦で俘虜になったケーフェンヒラーと言う男爵が居るそうじゃ、

その者も必ず帰還させるのじゃよいな」

「その者は何か有るのでしょうか？」

「いあテレーゼが41年間も囚われて可哀想だと申すのでな、

それに昔の時代の事を色々聞いてみたいそうじゃ、その者の帰還をするようにせい」

「御意」

ふう、殿下の気まぐれか、しかし陛下のご命令だ確りやらねばならん。

帝国歴478年10月11日

オーディン 国務省  
クlaus・フォ  
ン・リヒテンラーデ 国務尚書室

昨日から俘虜の対応で忙しくなってきた、ハタと思うとその費用は如何するか聞き忘れたわい、早速連絡しようとする、先に陛下からご連絡があった。

「国務尚書ご苦労」

「皇帝陛下におきましてはご機嫌麗しく」

「うむ」

「今日は如何様な事でございますよう」

「それよ、昨日予算に付いて言わなかったのな」

陛下も忘れていたのじゃな。

「今回の予算じゃが予のポケットマネーから出す事にする」

「陛下、平民から取りたてれば宜しいかと存じますが」

「予がしたいのじゃそのようせい」

無駄じゃな此処は陛下の考えにのろつぞ。

「御意でございます」

「其れとじゃ、救恤品と俘虜の受け渡しはイゼルローンかエル・フアシルで行うようにするのじゃ」

「御意」

「うむ頼んだぞ」

さてフェザーンのシューレンブルクに連絡じゃな。

であったか。

「久しぶりじゃのシューレンブルク伯」

「リヒテンラーデ侯もご機嫌麗しく」

「うむ」

「本日はどのような事でしょうか」

「其れより会話は漏れぬか？」

「大丈夫に御座います」

「では良いな。」

良いか恐れ多くも皇帝陛下が叛徒共の俘虜となっている臣民共に救恤品を下賜なさる。

其れが1月までに俘虜の元へ届くように致す、

叛徒共の政府の代表者とその方が交渉せよ。

その後俘虜の交換をする、其れが4月までには交換できるように交渉するのじゃ。

言うておくが、陛下から直接指摘された事じゃ必ず救恤品が先、俘虜交換が後じゃ、

受け渡しはイゼルローンかエル・ファシルじゃ。シューレンブルク伯よいな」

「リヒテンラーデ侯、陛下はなぜこのような事を」

「陛下の思し召しじゃ」

「御意」

宇宙暦787年10月13日 帝国歴478年10月13日

フェザーン 自由惑星同盟高等弁務官オフィス      ラファエル・ラ・フォンテーヌ

昨日突然帝国の高等弁務官事務所から、会談を持ちたいとの連絡があった、不倶戴天の敵であるが、以前サイオキシン麻薬摘発では共同行動を取った事もあり、政府に連絡を入れ指示を待った。

数時間後やっと政府から会談せよとの命令が下った。

秘匿回線のホットラインで話し始めるシューレンブルク伯の提案内容は驚愕を持つ物であった。

「恐れ多い事なれど皇帝陛下は敢闘むなく、貴勢力によって囚われの身となっている我が臣民全員に、格別なる慈悲を持って救恤品を下賜なさるとの思し召しでございます」

何だと、帝国は捕虜になった者は忘恩の徒として処罰していたのではないのか、

いきなりのこの仕打ちはどんな変化なのだ。

「なるほど、其れを政府に伝えて欲しいという訳ですな」

「左様、恐れ多くも皇帝陛下が臣民の苦しみをお聞きになり、哀れに思ってお手を差し伸べられたのです」

、その為其方に囚われている臣民の詳しいリストをお願いしたいのです」

ふん民衆を搾取してるのがお前らだろう。

「更にその臣民達を帝国へ帰還させよとの思し召しで御座いますな」

捕虜を帰せと言うのか、只帰すだけではなく此方も帰して貰わないと。



「しかし只帰せと言ってもそう旨くは纏まりません」

「帝国の臣民100万を其方が返還して頂けるなら、帝国が捕らえている其方の将兵100万を返還いたします」

うむ捕虜交換という訳か、先頃の第四次イゼルローン攻略の失敗で軍は80万近い戦死者を出している、

帰還兵全員が復帰する訳では無いが100万は魅力的だ、しかし自分の一存では出来ない其れが民主共和制だ、ハイネセンに連絡し指示を受けよう。

「ただ第1に救恤品の下賜此は来年1月までに下賜して頂きたい、其れが臣民に行き渡って身支度が出来たら4月までに返還をお願いしたい、

返還場所はイゼルローン或いはエル・ファシルでお願いしたい、此は皇帝陛下の勅命ですので変える訳にはいきませんのじゃ」

「シューレンブルク伯、非常に魅力的なご提案ですが、政府に連絡をし指示を受けねばなりませんので次回にご連絡いたします」

「判ります、なるべく早い返答をお待ちしております」

ハイネセンに早く連絡しなければならん100万の帰還なら大事だ。

宇宙暦787年10月13日 帝国歴478年10月13日

自由惑星同盟ハイネセンポリス 最高評議会 最高評議会議長  
ディオニシオ・エンリケス

フェザーンの高等弁務官フォンテーヌから一度目の連絡があり、帝国が対話を求めていると聞き、委員達を集め評議した結果、提案内容が何かを聞くようにと言つまで3時間もかかるとはな。

命令を出して2時間、フォンテーヌより帝国からの提案が知らされたとき、

我々は驚きを持って其れを聞いた。

帝国が捕虜交換を求めている、それ自体は以前にも何度もあった。しかし今回は100万単位での交換だと言つ、僅か一月前にイゼルローンで80万近い戦死者をだした為、

我々の支持率は低下気味だが、此処で4月までに100万の捕虜が帰還できるなら支持率だけでなく家族も含めて200万票以上の票が計算できる。

財務委員長などは『捕虜には只で喰わさないと成らないが、市民なら逆に税を納めてくれる』と積極的だ。

国防委員長も『軍の再建に帰還兵が使える』と賛成のようだ。他の委員も自分の支持率のUPにつながるなら賛成の意向だ。評決を取ることなく賛成で終わりそうだ。

もう一つの皇帝からの救恤品の下賜とは何が起こつたのか、フォンテーヌによれば皇帝の慈悲らしいが、帝国はよく判らない国だ。

此についても財務委員長は『財源を掛けずに済む』と言つ。情報交通委員長だけは、『各收容所に配るのに時間がかかり混乱が

生じるのではないか』と言う、  
国防委員長は『先に捕虜交換では駄目なのか』と言うが、勅命では変える事はできんだろう。  
他の委員の反対はないようだ。

そうしていると人的資源委員長から、『我が軍の捕虜に救恤品を送らないのか』と提案が出た。

国防委員長が『帝国に送っても兵には届かんよ』と言う。  
理由を訪ねると『皆途中で貴族共に搾取されてしまっようだ』とのこと。

財務委員長が『予算的にみすみす届かない物に掛ける予算は出せない』と言う。

此は反対意見が多いので却下だな。

帝国は捕虜交換をイゼルローン或いはエル・ファシルで行いたいと言うが、

イゼルローンでは行った瞬間トールハンマーで焼かれるのではという畏説が多く

エル・ファシルでの交換を強く求めようと委員会で議決を行った。

宇宙暦787年10月14日 帝国歴478年10月14日

フェザーン 自由惑星同盟高等弁務官オフィス      ラファエル・ラ・フォンテーヌ

ハイネセンからの帝国による提案受諾の連絡があり早速シュールブルク伯へ連絡を取った。

「これはシュールブルク伯、今日は良い天気ですな」

「誠に良い天気です、其れですと受諾できましたかな」

「自由惑星同盟政府は帝国の捕虜交換と救恤品について受諾します、

尚受け渡し場所はエル・ファシルを希望します」

返答が遅いな、やはりイゼルローンでないと駄目なのか？

「判りました、帝国政府は貴官の提案を受ける事とします」

「では詳しい話し合いを行いましょう」

帝国歴478年10月14日

オーデイン 国務省

国務尚書室

クラウス・フォ

ン・リヒテンラーデ

フェザーンのシューレンブルク伯より連絡があり叛徒共が受諾したとの連絡をしてきおった、

交換場所は案の定エル・ファシルじゃトールハンマーを撃たれる恐怖があるうからな、

早速陛下にお伝えしなければならん。

ノイエ・サンスーシに連絡を取り陛下にお伝えする。

「皇帝陛下におきましてはご機嫌麗しく」

「うむ国務尚書いかが致した」

「かねてより行っておりました俘虜の交換と救恤品についてエル・ファシルで交換と受け渡しを行う事を受諾いたしました」

「うむ国務尚書ご苦勞で有った、シューレンブルク伯もご苦勞で有ったと伝えよ」

「御意」

「此からも頼むぞ」

「御意」

第三十四話 アンネローゼ怒る(前書き)

ヤン初登場

### 第三十四話 アンネローゼ怒る

帝国歴478年10月30日

オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋  
フォン・ゴールデンバウム  
テレーゼ・

同盟から受諾の返事が来てリヒテン爺さん達があたふたしているのを見ながら、  
暫くは皆の所へ行ったり遊んだり勉強もしたり。  
お母様やお父様と出かけたりしまし。

そしてお父様はお母様はとても仲が良いです、  
えーと子供には目の毒ですんで早く寝ました。  
お渡りの日を聞いたらお母様4日、他の何人が居る側室2日、アンネローゼ1日だそうです。

そんなこんなで日待つ事2週間ほどだった、  
一昨日リヒテンラーデ侯から救恤品の準備が出来たとの報告を受け  
た為、  
密かに集まり密談です、参加者は何時ものようにお父様、私、爺様、  
ケスラーです、  
部屋の外や床下屋根裏には爺様の部下が隠れて防衛しており、  
部屋自体が戦艦艦橋用の遮蔽装置で音漏れナシです。  
科学ってすごいね。

「早かったですよね、もう少しかかるかと思ったんですけど」  
「国務尚書達には儂が発破を掛けたからの」  
にこやかですな父様。

「陛下あれは傑作でしたな、裏から見ている可笑しゆうて堪りませんでしたわ」  
爺様も笑ってます、真剣なのはケスラーだけだけどケスラーも苦笑いに近いぞ。

「それで中身は大丈夫なんですか？」

「確りとした監視を付けて納品から箱詰めまで監視した後、帝国財務省と貼りたかったのですが、財務尚書があつた男では逆に略取されかねない為、

恐れ多い事ながら皇帝陛下御財貨と言つた札を貼らせて頂きました」

「ハハハそうじゃな、あの財務尚書ではやりかねん、ケスラー気にせずとも良い、ようやってくれた」

「ありがたきお言葉」

あのカストロプ公が確かにやりかねないや。

「イゼルローンへの輸送は誰がやるのですか、

なまじ門閥貴族のどら息子とかだと事故とかと称して盗むんじゃない？」

「ホッホッ全くその通りですな」

「うむ儂の筆頭侍従武官のケツセリング少将を臨時の輸送指揮官に当てるつもりじゃ」

「ケツセリングならば生真面目ですし確と任務を遂行いたしましたしよ  
う」

「艦隊には手の者も参加させ、荷物が確り叛徒共に渡るまで監視いたします」

「TVクルーも乗せない駄目ですね。

此を帝国全土に流して平民や下級貴族に慈悲深い皇帝陛下というイ

メージを持たせない」と

「そうじゃの忘れるところであつたわ  
危ない危ない。」

「それから儂の愚息も参謀長として参加させますの」

へー爺様の息子って普段は領地に引きこもってるんじゃないの。

「ほうマンセルが来るのか、久しぶりじゃな」

「普段は裏方をさせておりますからな、このような時こそ役にた  
ましよう」

なるほどね裏の仕事か流石だね。

「ケツセリング少将だと作戦に問題が有る可能性があります」

「ではケスラー如何致す」

「参謀に全体を見下ろせる者を付ける事でございます」

「ふむ誰か心当たりでも居るのか」

「はっ小官が4年の時ルームメイトだった2期下の、

エルネスト・メックリングーという者で有れば役に立つかと」

えー芸術家来たー！

「してその者は今何処に居るのじゃ」

「統帥本部作戦課に配属されております」

「ではシュタインホフとエーレンベルクに連絡し艦隊へ配属させよ  
う」

「御意」

メックリングーがゲットできるチャンスかな、

けど取りあえずケスラーの知り合いならいずれ引つ張れるでしょう、  
それよりは門閥貴族だね。

「所でブラウンシュバイツ公とかの門閥貴族の方々に正式に発表す  
るのは叙勲式で良いのですよね？」



噂が流れて混乱は無いのでしょうか？」

「テレーゼ様其処はお任せ下さい。噂とは少しの真実に多くの嘘を混じらせれば必然的に霞む物でございます」

「なるほど、ケスラーに任せておけば心配ない訳ですね」

「そついうことじゃの」

「品物は既に輸送艦に積み込みを終了しておりますので、明日出立いたします。」

「海賊や海賊に扮した者達への対処は如何ですか？」

「千隻の護衛艦隊を用意いたしました」

「なるほどね、イゼルローンまで40日ですね、

着くのは12月10日ぐらい其処からエル・ファシルまで4日と言  
うところですね」

「そつでございます、受け渡しは不慮の事故等を考えまして12月  
20日前後を予定しております」

そつするとユリアンが16日でイゼルローンハイネセン間を移動し  
ているから同じぐらいだとして、

1月10日前後にハイネセンに届くか、何処かで中を調べて10日  
ぐらいはよけにかかるとしたら。

エコニアには10日ぐらいでギリギリ1月中には届くな。

「楽しみですね俘虜の皆が喜ぶでしょうね」

「そつですな」

「そつじゃの」

帝国歴478年11月1日

オーデイン 宇宙艦隊第2宇宙港  
ケツセリング  
レオポルド・フォン・

皇帝陛下から絶大の信頼を受けて小官は今日宇宙へと旅発つ。  
叛徒共に囚われている同胞の為に陛下自ら救恤品を下賜なさるとは、  
なんと陛下はお優しいのであろう、その輸送の任に小官を抜擢して  
頂くとは一生の譽だ。

陛下自ら小官に対して『ケツセリング、卿に叛徒に囚われている者  
達への救恤品を届ける指揮官を任せる』とお言葉を頂いたのだ。  
我がケツセリング家末代までの譽だ。

陛下のご心配もお聞きし絶対に海賊達から守り抜こうと肝に決めた。  
小官の参謀長には陛下の嘗ての侍従武官グリーンメルスハウゼン子爵  
令息のマルセル・フォン・グリーンメルスハウゼン准将だ。  
彼は荷物のお目付役らしいので。

本来の作戦を立てるのは者は未だ24歳なれど小官よりよほど出来  
の良い大尉である。

数日前彼に会い話を聞いて自分より遙かに優れた人物で有ると知っ  
て、  
全般的な作戦指揮を任せる気になった。

晴れの舞台だ皇帝陛下と皇女殿下臨御の中の出立とは、まさに末代  
までの譽だ。

皇帝陛下必ず送り届けます。

オーデイン 宇宙艦隊第2宇宙港  
テレーゼ・フォン・ゴ  
ールデンバウム

ケツセリング少将の艦隊を見送りながら、寒さに震えて耐えてます。

此で種は蒔きました、後はどう育つか楽しみです。

帝国歴478年11月1日

オーデイン ノイエ・サンスーシ グリユーネワルト伯爵夫人邸

アンネローゼ・フォン・グリユ

ーネワルト

今日弟とジークがやってくる、

皇帝陛下の思召しで年4回だった面会日が年12回に増えてとても嬉しいわ、

陛下が私たち姉弟をよく思っていてくれるのはありがたい事です。

けれど今日はラインハルトに一言言わなければ成りません、

陛下のお陰で放校処分だけは撤回して頂いたそうですので、

此から暴力を振るわない様にきつく叱らなければいけません。

ジークはラインハルトに迷惑しているのでは無いでしょうか、

あの子は優しい子ですから、巻き込まれているのではないのかと。

ラインハルトとジークが来たようですね。

「姉上」

「アンネローゼ様」

無邪気に来ていますが、今日はお説教です。

「ラインハルト貴方は学校で暴力ばかり起こしているそうですね！」

「姉上いきなりなんですか」

「アンネローゼ様ラインハルト様はアンネローゼ様の為に」

「ジーク今は黙りなさい」

「姉上??」

「私があなた達が学校で孤立し暴力沙汰ばかりで、

放校処分前だと聞いてどれだけ悲しんだか判りますか!」

「しかし奴ら姉上の悪口を」

「お黙りなさい!」

「悪口を言われたからと暴力振るう人がいますか、

私は貴方をそんな子に育てた覚えはないです」

「良いですかラインハルト此からは暴力は止めなさい、

そうしないと今度こそ放校処分になってしまいますよ」

「姉上」

「今回の事も皇帝陛下が事態の打開を図って頂けなければ、放校処分だったのですよ」

「.....」

「貴方が虐められる原因が爵位がないと言う事だからと、陛下が貴方に男爵を授けてくれるのですよ」

「.....」

「ラインハルト様が男爵に」

「姉上」

「ジークもラインハルトに迷惑しているのなら教えてね」

「アンネローゼ様その様な事は御座いません」

「じゃあこの話はおしまいね、シュホンケーキを焼いてあるから食べましよう」

「姉上」

「はいアンネローゼ様」

宇宙歴787年11月1日

自由惑星同盟ハイネセン  
ヤン・ウエンリー

統合作戦本部記録統計室

古い資料を読みながらのシロン産紅茶は格別だね。

この所同盟は捕虜の帰還話で持ちきりだ、数週間前まで第四次イゼ  
ルローン攻略の失敗で騒がしかったのに今は帰還話だ。

100万人が帰ってくる、この時期になぜいきなり帰すのか、スパ  
イでも送り込むのだろうか。

或いは不満分子にクーデターを起こさせるとか、まあ考えすぎか。

紅茶が無くなったな煎れてこよう。

第三十四話 アンネローゼ怒る(後書き)

今回はメックリングァー登場が強引すぎた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3863x/>

---

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

2011年11月5日04時11分発行